

# 愛知医科大学 学報



ドクターヘリ格納庫運用～キャンパス再整備完了～記念式典  
テープカットセレモニー  
(関連記事11頁)

＝ 第150号 ＝

2018. 4月

愛知県長久手市岩作雁又1番地1  
〒480-1195

学校法人 愛知医科大学

愛知医科大学ホームページアドレス

[www.aichi-med-u.ac.jp](http://www.aichi-med-u.ac.jp)

## ■ 主な目次 ■

平成30年度入学式 .....	2
平成29年度卒業式 .....	5
平成30年度予算大綱 .....	12
再任ごあいさつ .....	16
就任ごあいさつ .....	17
教授就任インタビュー .....	32
退職を迎えて .....	47
Smile ～スマイル～ .....	59
教育・研究最前線 .....	60
海外研修派遣研修記 .....	62

# 平成30年度愛知医科大学入学式

## 医学部・看護学部入学式



平成30年度入学式が、平成30年4月3日（火）午前10時から大学本館たちばなホールにおいて挙行されました。【写真】

式は、君が代斉唱に始まり、医学部116名、看護学部103名計219名の新入学生が紹介された後、新入学生を代表して医学部の本美朋華さんから「学則並びに諸規則を守り、先生方のご指導に従い、本学学生としての自覚を持ち勉学に励むことを誓います。」と宣誓が行われました。

続いて、佐藤啓二学長から告辞が、来賓の三宅養三理事長、久徳重和医学部父兄後援会会長及び浅井富成医学部同窓会会長から祝辞が述べられました。

最後に、看護学部4学年次生の上出彩未さんから「愛知医科大学は、医学部と看護学部の二学部からなり、学生数は約千人と、大学の規模としては決して大きくありませんが、その分同級生や先輩、後輩との繋がりのみならず、先生方との関係も密であり、とても良い人間関係

を築くことができます。また、先生方の思いやりのある熱心なご指導もこの大学の魅力の一つであり、皆さんが大学生活において行き詰まったとき、親身になって相談に乗って頂けるものと思います。入学式を迎えられた皆さんは、今、喜びや希望に満ち溢れておられることと思います。しかし、皆さんの目標は決してこの大学に入学するではありません。無事、国家試験に合格し、良き医療人になることです。これから医療に携わろうとしている私たちにとって、人との関わりがとても大切になってくると思います。多くの出会いを大切にしつつ、個々の人々が抱える思いや気持ちを感じ取り、理解することに努めていってください。」と歓迎の辞が述べられ、午前10時40分ごろ式は終了しました。



宣誓を述べる本美さん



上出さんからの歓迎の辞

## 告 辞

### 学 長 佐 藤 啓 二



入学おめでとうございます。皆さんは今日からAll Aichi Idaiのメンバーです。All Aichi Idaiとは、愛知医大で学んだ人、愛知医大で働いた人を全て含みます。All Aichi Idaiのメンバーだからこそ、理解しておいてほしいことがあります。

1972年に本学設立に際して定められた「建学の精神」です。なお、医学部だけの単科大学の時代に制定されたものですので、看護学部の学生については、医師を看護師と読み替えてください。

「建学の精神」は、三つの柱からなります。

一つ目は「新時代の医学知識・技術を身につけた教養豊かな臨床医」を養成すること、二つ目は「時代の要請に応じて地域社会に奉仕できる医師」を養成すること、

三つ目は「医療をより良く発展向上させる為の医学指導者」を養成することです。

2014年に完成した中央棟には、最新の医療機器が多数導入されており、最先端の医療技術や知識をもった医師・看護師が数多く勤務していますので、学びの環境は最高だと思えます。更に、本学の卒業生を「愛知医科大学の指導者」として養成できるよう、医学部長と共同して大学院研究科の内容見直しを進めております。

さて、皆さんは個人的には「命を授かる」経験をしていくことと思います。また、仕事では「命を預かる」経験をしていくことと思います。それ故「命」、「生命」について、より深い興味と知識を持って頂きたいと思えます。講談社現代新書の中に、中屋敷均さんが書いた「生命のからくり」という本があります。この中に「生命に必要なものは、遺伝情報の保存システムと遺伝情報の改変システムを共に内包すること」とあります。



遺伝情報と言えば、ジェームズ・ワトソンとフランシス・クリックが1953年DNAの二重螺旋構造を提唱しました。わずか1頁・1,000字の論文が、Natureに掲載されましたが、1962年にノーベル生理学・医学賞を受賞することになりました。

DNA鎖は、デオキシリボースという糖とリン酸の繰り返し構造で、デオキシリボースから突起のように、4種類の塩基（アデニン・グアニン・シトシン・チミン）が出ています。アデニンとチミンは構造的によく似ており、グアニンとシトシンも構造的によく似ています。立体構造によって、アデニンはチミンとしか、グアニンはシトシンとしか結合しませんので、DNA鎖と反対側のDNA鎖は塩基配列が逆になっています。

ヘリカーゼという酵素により、二重螺旋が解けて、一本鎖となると、片方のDNA鎖では、解けかけた部位から相補的なDNA鎖が合成され、安定してDNA鎖の複製が進みます。これは「遺伝情報の保存システム」となっています。

一方、反対側のDNA鎖では、ある程度解れてから、DNA複製が逆の方向にフラグメントとして進み、更にある程度解れてから、フラグメントとして逆方向に複製が進みます。名古屋大学教授で分子生物学者の岡崎令治先生が発見し、「岡崎フラグメント」と言われました。画期的な業績ということで、ノーベル生理学・医学賞間違いなしと言われていましたが、残念ながら、岡崎先生は若くして逝去されました。この「岡崎フラグメント」により、変異率が10～100倍高くなることが示されており、「遺伝情報の改変システム」も安定的に構成されていることが分かりました。

さて、人間を他の生物と異なる存在にしているものは何でしょうか。パスカルの「パンセ」思想論に、「人間は考える葦である」という言葉があります。「人間は自然において脆弱だが、思考することによって、他の生物と異なる存在になっている」ことを意味しています。

この「脳情報」にも、「脳情報の保存システム」と「脳情報の改変システム」が存在します。現生人類ホモサピエンスは、旧人類から分かれて、20万年が経つと言われています。20万年の間に現生人類は、「脳情報の保存システム」として、まず言語を作りました。言語によって、目の前の人に自分の経験や知識を伝えることができ、「伝承」として伝えることが可能となりましたが、100%の正確性はありませんでした。

そこで、次に文字を作りました。「文字の発明」により、目の前の人でなくても、地域が異なっても、時代が異なっても、経験や知識を正確に伝えることが可能となりました。

では、「脳情報の改変システム」はどのようになっているのでしょうか。脳には、1千億もの神経細胞（ニューロン）があり、一つのニューロンから数万の神経突起（シナプス）が出されており、シナプスはシナプス結合を形

成し、壮大なニューラルネットワークを作りだしています。長期記憶として残すべき情報については、ニューロンで蛋白が形成され、新たなシナプス形成やシナプス結合の組み換えを行うことにより、「脳情報の改変システム」を保持しています。

では、遺伝情報システムや脳情報システムは、生物学・化学だけで説明できるものでしょうか。私たちの細胞は、種々の分子から成り、分子は原子から成り立っています。原子は、電子（e<sup>-</sup>）と中性子・陽子から成る原子核から成り、中性子や陽子はフェルミオンの組み合わせで作られています。原子より小さいものを「量子」と言いますが、量子のふるまいは、ニュートン力学では説明がつかず、懐疑的に考えられてきました。しかし、量子力学を用いなければ説明がつかない事実が徐々に認識され、生命現象の最先端においては、量子力学による解釈が必要であることが認識されてきました。

物理学者のジム・アル＝カーリー氏と生物学者のジョンジョー・マクファデン氏は、20年の構想を経て、3年をかけて本を執筆しました。『Life on the edge』という名前ですが、邦語訳では、『量子力学で生命の謎を解く』となっています。ソフトバンククリエイティブ社から出版されています。専門的すぎず、内容は盛沢山ですので、是非読んで頂きたいと思います。

著書中の代表例として「ヨーロッパコマドリの渡り」が紹介されています。ヨーロッパコマドリは夏の間スウェーデンにいますが、秋になると300km離れた南フランスへ渡りをします。この渡りにおいて、どのように方角を定めているかが分かりませんでした。

1972年ヴィルチェコ夫妻は、「磁気」と「可視光の青い光」がなければ、ヨーロッパコマドリは方角を定めることができないことを実験的に証明し、更に「磁気感覚は、地磁気の方角性－北極や南極では垂直、赤道では平行－を感知する『伏角コンパス』と同じ働き方をしているのではないか」との仮説を提唱しました。

その後しばらく、それ以上の説明はなされませんでした。1998年クラウス・シュテルンは新たな仮説を提唱しました。網膜にある「クリプトクロム」というタンパク質の中の光応答性色素分子であるFADに、光の粒子である「光子」が衝突すると、FAD分子最外殻の電子を1個飛び出させて電子の空席ができること、隣のトリプトファンというアミノ酸の最外周にいる電子は2個ペアとなって反対方向にスピンをしており、「量子もつれ状態」となって安定しているが、隣に電子の空席ができると、それも占めようとして、「量子重ね合わせ状態」となるため、極めて不安定な状態となること、「量子重ね合わせ状態」では、微弱な地磁気に影響されて電子のスピンの方向が決定され、このことがコンパスとして働くのではないかというものでした。

2004年シュテルンの弟子であるソーステン・リッツは、磁石の1/100の強さしかない地磁気であっても「量子重

ね合わせ状態」であれば感知可能であり、量子コンパスとして作用することを実験的に証明しました。

後に、チョウやショウジョウバエにおいても、「量子コンパス」と同様のメカニズムが作動していることが明らかとなりましたし、植物の光合成において、葉緑素の反応中心に電子が受け渡されていくプロセスは、光合成効率がほぼ100%であることから、「量子重ねあわせ状態」でなければならないことも計算で示されています。

さて、皆さんは、Google scholarを知っていますか。学術情報の検索サービスですが、トップページに文字が記載されています。「Stand on the shoulders of giants」,

「巨人の肩の上に立つ」とあります。これは、「偉大な先人たちの業績の積み重ねの上に、現在の科学技術の成果が積み重ねられて、初めて新しい知の地平線が開かれる」ことを示した言葉とされています。

皆さんは、発展途上の医学・看護学を学ぶ立場ですから、是非過去の偉大な先人達の業績を積極的に理解し、「巨人の肩の上に立つ」ようにして頂きたいと思います。

これからの4年間、6年間皆さんが成長し、社会を支える有意な人材になることを楽しみにしています。

「Stand on the shoulders of giants」という言葉を送って、学長告辞といたします。

## 祝 辞

### 理事長 三宅 養 三



理事長の三宅です。この度は、晴れて愛知医科大学の医学部・看護学部にご入学になられた新入生とご家族、ご親族の皆さまに心からお祝いとお慶びを申し上げます。

愛知医科大学は、1972年に建学され、医学部は46年、看護学部は18年の歴史を持つ大学です。当時新設医科大学として20校が日本各地に造られましたが、その多くが大資産家のオーナーの資金によるものでした。しかし、愛知医科大学は、ほとんど財政基盤の無い状態から、太田元次初代理事長の大変なご努力により建造された特異な大学であります。そのため当初は、大変な資金難で苦難の草創期でしたが、先人の並々ならぬ頑張りにより徐々に発展し、現在では新設医科大学の中では、比較的上位の評価が得られるようになって参りました。因みに、今年の国家試験の合格率は、看護学部は全国平均が91%でしたが、本学は3年連続で100%の合格率を維持し、医学部の新卒合格率は、全国平均が93.9%でしたが、本学は95.4%と満足な成績でした。

平成18年から新病院建設を中心としたキャンパス再整備が計画・実行され、新病院は4年前、また、キャンパ

ス再整備は、今年の3月で全てが終了し、今年ご入学の皆さまはこの新しいキャンパスで勉学に励むことができる最初の学年となりました。新病院効果は顕著になっており、患者数や手術件数は、10年前と比較すると飛躍的に増加しています。

更に、愛知医科大学のある長久手市は東洋経済新報社の調査によると、800以上ある日本の都市の中で最も快適な住み心地を誇ることが示されており、学生の皆さまは大変快適な環境で学園生活を送れるのです。ご父兄の皆さまも本当に充実した大学に良いタイミングでご入学されたことに満足して頂きたいと思います。

しかし、この快適で素晴らしい学園でガラガラした生活は困ります。医師や看護師を一人育成するのに大変な費用がかかります。医師ですと、一人一億円と言われていいます。これは、ご両親の大変な負担のみならず、税金からずいぶん賄われているのです。それに報いるのが諸君の義務となります。

ハングリー精神を持って、勉学にしてもスポーツにしても、とにかく一生懸命物事に取り組むという癖をつけてください。一生懸命物事に取り組むことは、将来の臨床、研究、学問全てに通じる人間力の元となるからです。緊張感を持って良い学園生活を送ってください。

## 大学院入学式

平成30年4月3日（火）午前9時20分から大学本館711特別講義室において、平成30年度愛知医科大学大学院入学式が挙行されました。【写真】

式は、看護学研究科修士課程15名、医学研究科博士課程29名の計44名の新入学生が紹介された後、新入学生を代表して医学研究科の井戸未来さんから「学則並びに諸規則を守り、先生方のご指導に従い本学大学院学生としての自覚を持ち、勉学に励むことを誓います。」と宣誓が行われました。

続いて、佐藤学長から告辞が、三宅理事長から祝辞が述べられ式は終了しました。





# 平成29年度愛知医科大学卒業証書・学位記授与式

医学部・看護学部卒業証書・学位記授与式



平成29年度卒業証書・学位記授与式が、平成30年3月3日（土）午前10時から大学本館たちばなホールにてお

いて挙行されました。【写真】

式は、君が代斉唱に始まり、佐藤啓二学長から医学部108名、看護学部101名の卒業生一人ひとりに卒業証書・学位記が授与されました。

続いて、佐藤学長から告辞があり、来賓の三宅養三理事長、柵木充明愛知県医師会会長、久徳重和医学部父兄後援会会長及び浅井富成医学部同窓会会長から祝辞が述べられました。

この後、在学を代表して医学部3学年次生の長嶋愛さんから送辞が、卒業生を代表して看護学部の渡辺明里さんから答辞が述べられ、卒業記念品の贈呈が行われ、午前11時20分頃に式は終了しました。

## 告 辞

学 長 佐 藤 啓 二



卒業おめでとうございます。

皆さんは、「人生の扉を開けて、いよいよ自分の足で歩き始める」日を迎えました。

振り返ってみれば、皆さんの4年間・6年間は、徳川家康公の言葉にあるように「重荷を負うて、遠き道を行くが如し」の毎日であったかもしれません。

さて、国家試験に合格すれば、大願成就です。

龍の絵を書いて、最後に目を書き入れたら本物の龍となって飛び去ってしまったことから、最後の仕上げをすることを「画竜点睛」、「点睛開眼」と言います。「目を書き入れたら、目を見開いて、見続けること」が必要であると思いますので、皆さんには「点睛開眼」という言葉を覚えてほしいと思います。

何を見続けるのかと言うと、「時代の変化と医学の進歩」です。皆さん自身が大学に入る少し前の2010年から、皆さんの子供が大学に入る少し前の2040年の30年間を考えてみましょう。

最大の問題は、「人口減少」です。総人口は、2010年で12,800万人ですが、2040年には10,700万人になり、2,100万人が減少します。札幌、仙台、埼玉、横浜、名古屋、京都、大阪、神戸、広島、福岡の総人口が、全て0人になっても1,900万人強であります。

次の問題は、「少子化」です。18歳人口は、121万人から80万人へ33%減少し、14歳以下の人口は、1,680万人から1,073万人へ36%減少します。

3番目の問題は、「高齢化」です。65歳以上の人口割合は、23%から36%へ増加し、四人に一人から、三人に一人となる計算になります。その結果生じてくるのは、「消滅可能性都市」の問題です。2010年から2040年まで

の30年間に、20歳から39歳の女性人口が半減する消滅可能性都市は、全国の49.8%になる896市町村と言われ、このうち523市町村は2040年に人口が1万人を下回ると言われています。

これに伴い、現在の病床構成も変わらざるを得ません。医療介護総合確保推進法に定められた地域医療構想においては、2025年を目途に、高度急性期・急性期病床数は70%に、回復期病床数は340%に増加する試算が出されています。地方においては、中核病院は残るかもしれませんが、中小病院は甚大な影響を受け、開業医の先生の診療内容や分布が大きく変わるようになります。

では、医師や看護師の数は変わらないのでしょうか。2007年に7,600名であった医学部入学者数は、2017年に9,420名と約25%も増加しました。厚生労働省の医師需給分科会の試算では、全ての医師の勤務時間が現行の90%に低減したと仮定しても、2020年に28万5千人で均衡し、2040年には約4万3千人もの需給ギャップが生まれ、医師過剰となるとの試算が出されています。

4年制の看護学科については、1991年に11校、入学者数558名であったものが、2017年度には全国で250校を超え、2万人を超すようになっています。

自分が将来においても、重要な役割を果たすことができるように専門選択を考え、実力を磨くことがなにより重要です。

次に、医学分野の変化です。「遺伝子編集による治療の変化」について話をします。人間の遺伝情報は、23本の染色体上の30億塩基対配列として記録され、遺伝子の総数は2万数千と言われています。1遺伝子による病気は「遺伝病」と言われ、約7千あるとされています。更に、遺伝子変異が関係する疾患約6万件の内、1塩基対が置換した「点変異」が原因とされるものは3万5千とも言われています。2010年頃から見い出され、捜査が簡

単で安価である為、急速に普及したCRISPR-cas9という遺伝子編集技術があります。異常な塩基配列部分を削除し、正常な塩基配列を挿入することが可能となり、更には、1塩基対を入れ替えることが可能となってきました。

2017年サイエンス誌の選ぶ卓越した科学技術トップはBreakthrough of the yearで、九つのRunners up（革新的科学技術）がありますが、そのRunners upに「RISPR-cas9による1塩基編集」が選ばれています。遺伝病については、マウスにおいて、遺伝病である鎌形赤血球症や、タラセミア等も遺伝子編集技術で治療可能となり、がん細胞に対する免疫チェックポイント阻害剤の有効性は明らかになっています。血液幹細胞を採取し、Tリンパ球の表面のPD-1にがん細胞の作るPD-L1が接着しないよう、Tリンパ球への遺伝子編集を行った上で戻してやれば、同等以上の効果が期待できます。

また、豚胚細胞から、豚腎臓を形成する塩基配列を削除し、ヒト腎臓を作る塩基配列を挿入し、豚でヒト型腎臓を作る研究が進められています。腎臓ができれば、1型糖尿病が、腎臓ができれば血液透析患者も、永続的な治療となる可能性があります。

2018年2月には、長寿科学研究センターと島津製作所（田中耕一氏）の共同研究の成果である「アルツハイマー病の早期診断が可能になった」との論文が、Natureに掲載されました。アルツハイマー病は、三つの原因遺

伝子と一つの関連遺伝子が同定されていますので、遺伝子編集技術によって、アミロイドβを作らなくすることは可能であると考えられています。これにより認知症の早期診断、早期進展予防ができる可能性がありますし、介護の問題も大きく変化すると思われます。

また、ミオスタチンという筋肉をこれ以上増やさない遺伝子がありますが、これが突然変異すると筋肉量が2～3倍になり、運動能力が各段に高くなった動物が生まれています。牛ではベルジアンブルーという種類がそうですし、犬でもウィペットと呼ばれています。ヒトでは、突然変異に伴う、単発例の報告が約100例あります。遺伝子編集によって筋肉量が人為的に操作できれば、オリンピック出場者には、今後遺伝子ドーピングが課されるかもしれません。人間の未来を大きく変えてしまうヒト胚細胞（卵子、精子、幹細胞）の遺伝子編集については、倫理的な制約をしっかりと考える必要があります。

このように時代の変化を理解し、医療・医学の情報を取り対応し続けていかなければ、生き残れない時代になる可能性が高いと思います。「点睛開眼」をぜひ覚えておいてください。

最後に、皆さんはAll Aichi Idaiのメンバーとして、愛知医大を卒業したことを誇りに思い、愛知医大の名前を高めるように、努力してほしいと思います。皆さんの将来に幸多かれと祈り、学長式辞とします。

## 祝 辞

### 理事長 三宅 養三



理事長の三宅です。この度は晴れてご卒業になる医学部、看護学部の学生諸君、それにご家族、ご親族の皆さま方に心からお祝い申し上げます。これから皆さんは医療人として

プロの道を歩むわけですが、医療人のプロフェッショナルリズムという言葉が最近よく使われております。

プロフェッショナルリズムとは、医療は国民に奉仕するために行われるという基本的概念をまず持つことと、しなければならないこと、してはならないことを医療人である限り厳守するという心意気を意味します。医療倫理や医療安全などの学ばなければいけないことは多々ありますが、本日は私がプロフェッショナルリズムとして、特に強調したいことについてのみ2、3点述べさせていただきます。

まず、医療人は一生学問をし続けなくてはならないことです。医学・医療は刻々と進化し続けます。病める患者さんにより良い治療を提供するには、常に学問をし続けるのが諸君に課せられた義務で、これがプロフェッショナルリズムの原点となります。学問とは、スポーツにおける練習・訓練に通じます。プロ野球選手は、現役の時

ていこうと努力しますが、現役を退いた後は、練習などする必要はありません。しかし、医療人は医療を続ける限り学問を続けなければなりません。

どのような心構えを持つと一生学問を継続できるのでしょうか。それは、自分の仕事に興味とリサーチマインドを持ち続けるよう努力することです。その元となるのは、卒後数年の丁稚奉公にあると思います。臨床にしても、研究にしても、最初から給料がよく面白いものではありません。この時代を、私は「丁稚奉公」と呼んでいます。しかし、この時代に臨床や研究の基礎をしっかりと学び、それに耐え抜くと次第に面白さが分かってくるのです。それが奥の深い臨床や研究、それにリサーチマインドに結びつくのです。私は、これを「情緒と品格」と呼んでいます。私の50年にわたる大学人としての経験から、最初にしっかりと丁稚奉公をしなかった人で大成した人は皆無であったと思います。

福沢諭吉の「学問のすすめ」に、「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」と述べられています。これは、人間はみな平等という単純なことを言っているものではありません。人は生まれた時は皆同じ、歳を経て人間に大きな差ができるのは学問をするか否かで決まると言っているのです。医学も同じです。卒業した時点では皆同じ、その後、学問を続けるか否かで医療人の差ができ



るのです。更に、福沢諭吉は学問とは本を読むことだけではない、一生懸命何かに励むことはすべての学問に通じる、学問とは自分でするもので人から教わるものではない、しかし、学問は一人でできるものではなく、多くの人の力が必要とも述べています。

これは全て医学にも通じます。このように医学という学問は、真実を巡る人間関係から成り立っています。先人が営々と築き上げた業績があり、それを継承し授ける師に出会い、ともに研究を進める仲間やライバルの切磋琢磨があつてこそ、分野を問わず先端的な研究が可能となります。愛知医科大学は、このような豊饒な人間関係が美しく綾なす大学でありたいと願っております。

最近、「働き方改革」という言葉をよく耳にします。卒後数年は、超過勤務とか過剰労働などの今流行りの言葉に惑わされず、自分のためと思つてがむしゃらに丁稚奉公をしてください。そうすれば一生興味をもって、深い医療に携われる土台ができるのです。

医学は進歩し続けます。また、医療を取り巻く社会環境も大きく変わりつつあります。医療に携わる人は多様です。多様だからこそ、良い医療ができるのです。研究者の道を歩む人、臨床に熱中する人、手術が大好きな人、教育に生きがいを感じる人、地域医療や在宅医療に奉じる人、全て同じように医療には大切なのです。自分がこれから将来どの道を選ぶかは非常に重要ですが、その選

択に大きく影響するのは三つの出会いがあります。

一つは、「良い先生（師）に出会う」、二つは「良い友（ライバル）に出会う」、三つは「良い読書に出会う」です。

この中で最も重要なのは、良い先生、師匠に出会うことです。医療人として大きく成長した人たちの共通点は、物や組織ではなく、人に惹かれて進路を決めていることが多いのに気づきます。すなわち尊敬できる魅力的な人に出会い、自分もあのような人になりたいという気持ちが進路を決める原点になっているのです。若い時代に良い先生に巡り合うことは、その人の一生に極めて重要な意味を持ちます。

超高齢化時代を迎えた日本の医療は、大きな変換期を迎えています。延命という量の医療から健康寿命という質の医療に変わりつつあり、当然患者さんの価値観も非常に多様となつてきております。これから皆さんに期待する医療は、正しい診断と治療は当然のことですが、各々の患者の生物学的、社会的、経済的、心理的側面まで深く洞察して、その患者にとって最も良い医療を究めることです。今回新しく制定した学是「具眼考究」は、まさにこの精神を表しております。どうかこの学是の精神を持ち、情緒と品格を兼ね備えた医療人として、大きく羽ばたいて頂きたいと願っています。もう一度おめでとうございました。

## 送 辞

在学学生 長嶋 愛さん



冬の厳しい寒さも和らぎ、徐々に春の暖かさが感じられ、いよいよ春めいて参りました。

この良き日に卒業を迎えられた卒業生の皆さまに、在学学生一同、心より

お慶び申し上げます。

本学での学生生活をどのように振り返っておられるでしょうか。

同じ志を持つ友と出会い、幾多の困難を乗り越え、医学・看護学の道を精進され、見事に今日この日を迎えられたことは、私たち在校生にとりまして誠に感慨深く、尊敬の念を抱かずにはいられません。

勉学や部活動を通して、皆さまと一緒に過ごせたことは、私たちにとってかけがえのない財産となりました。皆さまが卒業されると実感した今、存在の大きさに改めて気づかされ、感謝と寂しさが溢れんばかりです。

今まさに皆さまは、医師・看護師としての第一歩を踏み出そうとしています。それは、ご家族の支え、先生方のご指導、そして何より皆さま自身の高い志と努力が実を結んだ結果であると感じます。

新たな世界に対する不安や期待もあることでしょう。しかし、本学で学び得た知識や精神力を糧とし、輝かしい未来へと前進していかれることを信じてやみません。

私たちは在校生は、医師・看護師として活躍される皆さまを手本とし、同じスタートラインに立てるよう、残された学生生活を精進して参ります。

最後に皆さまのご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げ、送別の言葉とさせていただきます。

## 答 辞

卒業生 渡辺明里さん



冬の寒さも和らぎ、柔らかな春の日差しが心地よく感じられる季節となりました。

今日、私たち209名は愛知医科大学を卒業いたします。この晴れの日

を迎えることができましたことに喜びを感じるとともに、これまで私たちを温かく見守り、支えて下さった先生方や家族を始め、多くの方々に、深く感謝いたします。

今振り返りますと、これから始まる学生生活に希望と不安を抱きながら入学した日のことが、つい昨日の出来事のように思い出されます。愛知医科大学で過ごした日々は、瞬く間に過ぎた日々であるとともに様々な人との出会い、経験、そして多くの感謝に満ち溢れたものでした。そして、これから医療従事者として歩み出す私たちにとって、その一つひとつが貴重な経験であり、人として成長する上でかけがえのない、大きな財産となりました。

私たちは今、愛知医科大学を卒業し、未来に向かって新たな道を歩み始めます。それと同時に、人の生命に携わる者としての責任を伴う立場となります。人々を支える立場となることへの緊張感もありますが、愛知医科大学で学んだことを誇りに思い、ここで培った多くのことを糧とし、あらゆる困難を乗り越えていきます。そして、これまで以上に学びを深めるとともに、医療従事者として、また、一人の人間として成長し続けられるよう、志を強く持ち、日々精進して参ります。

最後になりましたが、学長先生、ご来賓の皆さま、在学生の方々に御礼申し上げるとともに、お世話になりました諸先生方、地域の皆さま、多くの患者さん、医学部父兄後援会、看護学部父母会、同窓会、大学職員・病院職員の皆さま、そしてこれまで惜しみない支援をし、見守ってくれた家族に卒業生一同、深く感謝し、皆さまのご多幸、ご健康を心よりお祈り申し上げます。

そして、母校愛知医科大学の更なる発展をご祈念申し上げますとともに、本学の卒業生であるという誇りを胸に、その名に恥じぬよう、社会への貢献に努めていくことを誓い、答辞とさせていただきます。

本日は誠に有難うございました。

## 大学院学位記授与式

平成30年3月3日（土）午前9時20分から大学本館711特別講義室において、平成29年度大学院学位記授与式が挙行されました。【写真】

式では、看護学研究科修士課程修了者8名、医学研究科博士課程修了者10名一人ひとり、佐藤学長から学位記が授与されました。

続いて、佐藤学長から告辞が、三宅理事長から祝辞が述べられ式は終了しました。



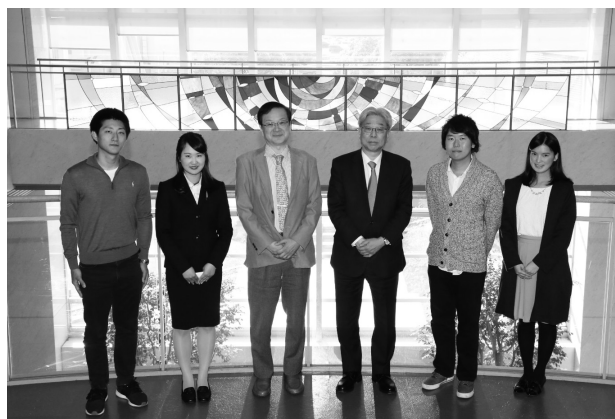


## ステンドグラス寄贈

平成29年度医学部卒業生からの卒業記念品として、大学本館エントランスホール3階空中歩廊に「ステンドグラス（学びは光、医学は太陽）」が寄贈され、平成30年3月26日（月）に除幕式が行われました【写真】

当日は、岡田尚志郎医学部長、中野隆学生部長を始め、平成29年度卒業生代表の姜真衣乃さん他3名が出席しました。

姜さんからは「愛知医科大学の学生がこのステンドグラスの光を受け、常に向上心を持って学び、今後も幅広い活躍ができるようにという思いと母校となる愛知医科大学がますます発展してほしいという願いを込めて、このステンドグラスを寄贈することといたしました。」との贈呈の言葉があり、岡田医学部長からは「これからは全責任を自分で負う厳しい道りを歩むこととなりますが、皆さんは我々の仲間です。何か困ったことがあれば、いつでも相談しに来てください。本学卒業生として胸を



張って、頑張ってください。素晴らしい記念品を寄贈頂き、ありがとうございました。」とお礼の言葉が述べられました。

この素晴らしい記念品は、いつまでも大切にさせて頂くとともに、卒業生の皆さんのご活躍を祈念いたします。

## リヤドロ「女神のゴンドラ」寄贈

平成29年度看護学部卒業生からの卒業記念品として、リヤドロ「女神のゴンドラ」1点が寄贈され、平成30年3月20日（火）午前10時から7号館（医心館）3階フロアにおいて、除幕式が行われました。【写真】

当日は、佐藤啓二学長、白鳥さつき看護学部長、琴喜田恵子教務学生部長や看護学部の教員を始め、平成29年度卒業生代表の松岡実歩さん他4名が出席しました。

松岡さんからは「これからの大学で看護を学ぶ後輩たちが困難に直面したとき、この女神のゴンドラを見て、心を癒し、仲間とともに勇気と自信をもって前進して頂きたいです。」との贈呈の言葉があり、佐藤学長からは「大変素晴らしい記念品を寄贈頂きありがとうございます。末永く大切に保管いたします。」とお礼の言葉が述べられました。



この素晴らしい記念品は、いつまでも大切にさせて頂くとともに、卒業生の皆さんのご活躍を祈念いたします。

## 特定行為研修修了証授与式挙行

平成30年3月3日（土）午前9時から理事長室において、平成29年度特定行為研修修了証授与式が挙行されました。

式では、三宅理事長から看護学研究科高度実践看護師（診療看護師）コースの修了者3名一人ひとりに修了証書が授与されました。

続いて、三宅理事長からは「我が国では、超高齢社会と2025年問題を抱え、診療看護師の養成は国家命題となっています。皆さまには先駆者として、今後の日本の医療を支えていく活躍を期待しています。」との祝辞が述べられ式は終了しました。

高度実践看護師（診療看護師）コース修了後は、特定行為研修修了者として、厚生労働省に報告されます。（38行為21区分）また、一般社団法人日本NP教育大学院協



高度実践看護師（診療看護師）コース修了生3名を囲んだ記念撮影

議会が実施する「NP資格認定試験」の受験資格が与えられます。

## 訃報

### 宇梶珠未助教（感染・免疫学講座）御逝去



平成30年4月2日（月）に医学部感染・免疫学講座の宇梶珠未助教が逝去されました。享年29歳でした。

宇梶助教は、平成23年3月に慶應義塾大学理工学部を卒業し、同年4月に慶應義塾大学大学院理工学研究科（修士課程）に進学されました。平成25年に同課程を修了し、同年4月に愛知医科大学大学院医学研究科（博士課程）基礎医学系薬理学専攻に入学されました。平成29年3月に同課程を修了し、博士（医学）の学位を取得後、平成29年4月から本学医学部感染・免疫学講座の助教として着任されました。

宇梶助教は、本学に着任以来活発に活動されました。教育面では、基礎医学セミナーで入念に細胞や菌の準備をして、学生に対して熱心に実験を教えていました。研究面では、新しい炎症や転移を阻害する低分子化合物の探索と作用機構の研究で多大な成果を上げられ、

学会発表にも多く参加し、口演では質疑応答を好み、理解力と対応に優れていました。

感染・免疫学講座では、短い期間でしたが、白癬の細胞モデルを立ち上げ、抑制候補物質を見出したところでした。理系の才能に溢れ、親切で面倒見がよく、誰からも親しまれていました。本学へ着任してからは、医学研究の目的意識がはっきりしているようでした。

宇梶助教は、これから長い間、教育に従事し、新しい医療を開拓して活躍するべき人でした。早逝されたことは残念でなりません。

宇梶助教の研究への熱意と探究心は非常に強く、若手研究者の模範となるものでした。芯が強いけれども親しみやすく、成果を上げるとともに周囲に楽しい雰囲気を作ってくれました。

宇梶助教のこれまでの貢献に感謝するとともに、ここに哀悼の意を表し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



# ドクターヘリ格納庫運用 ～キャンパス再整備完了～記念式典挙行

平成30年4月30日（月・祝）午前10時30分から正午まで、ヘリポート及びたちばなホールにおいて、愛知医科大学ドクターヘリ格納庫運用～キャンパス再整備完了～記念式典が挙行されました。

この式典は、ドクターヘリ格納庫の運用開始とともに、平成18年から取り組んできた新病院を中心とするキャンパス再整備事業の完了を記念するもので、大村秀章愛知県知事を始めとするご来賓の皆さま、ドラマ「コード・ブルー」でドクターヘリのパイロット役を演じた俳優の寺島進さんをお迎えし、ドクターヘリ運航関係者及び本学関係者に近隣にお住いの皆さまを加え、400名超が集まる盛大なものとなりました。

ヘリポートではテープカットセレモニーを行い、大村知事及び柵木充明愛知県医師会長からお祝いのお言葉を頂くとともに、特別ゲストとして寺島さんにご参加頂きました。

また、会場をたちばなホールに移して行った記念式典では、三宅養三理事長のあいさつ及び大村知事からの激励のお言葉に続き、キャンパス再整備事業にご尽力頂いた建設関係5事業者に三宅理事長から感謝状を贈呈しました。

三宅理事長からは「キャンパス再整備事業が無事完了しました。愛知医科大学は、これを出発点として、医学・医療の著しい進歩に同調するため、新しい挑戦を始めたい。」とあいさつがありました。

式典の最後には、寺島さんによるスペシャルトークショーが行われ、参加者は熱心に聞き入っていました。

当日のテープカットセレモニー及び記念式典の様子は、テレビや新聞などの各メディアでもご紹介頂きました。



テープカットセレモニー



あいさつする三宅理事長



大村愛知県知事



柵木愛知県医師会長



三宅理事長から感謝状が贈呈



寺島進さんによるスペシャルトークショー

# 平成30年度予算大綱

平成30年度予算が、平成30年3月19日（月）の理事会、評議員会において承認されましたので、お知らせします。

教育分野では、医学部において、医学教育分野別認証の審査が2年後に迫っており、準備を加速する必要があります。受審に必要な自己点検評価書を平成30年度に作成するために、臨床実習をこれまでの48週から72週に増やすことを柱とした新しいカリキュラムは、平成29年4月から開始しました。また、臨床実習をクリニカルクラークシップ1及び2に分け、学内のみならず学外研修病院においても、適正に評価のできる臨床実習を行っています。一方、座学中心の講義を改め、アクティブ・ラーニングを積極的に導入し、学生が自ら学ぶ姿勢を身につけることができるような工夫等の様々な試みをしています。

看護学部教育においては、学習状況を把握して支援するため、平成30年度入学生からグレード・ポイント・アベレージ（GPA）制度を導入することとしています。各自の得点は、半期ごとにアドバイザー教員から渡される成績通知書内に記載され、これまで以上にきめ細かな学修指導が行われることが期待されます。また、国際交流も新たな展開が始まり、タイ王国マハサラカム大学との学術交流協定を締結するに至りました。看護学部にとっては、初のアジア圏の大学との学術交流協定であり、海外から留学生を受け入れることも初となるものです。学生には異文化交流で得た貴重な体験により、広い視野が培われることが期待されるところです。

研究分野では、科研費申請件数（継続を除く）については、平成27年1月から研究計画調書の作成方法や採択のポイント等のノウハウが不足する申請者に向けて、研究活動実績のある者などに研究計画調書作成サポートを依頼するというJump up作戦の準備を始め、平成27年4月から申請補助を開始した結果、平成28年度の申請が128件であったものが、平成29年度は182件、平成30年度は227件と177%まで増加しました。基礎と臨床がコラボしながら若手研究を育成することを目途とし、平成29年度から始めた研究ユニット創出支援事業においては、既に成果発表会が開催される等順調に推移しています。研究創出支援センターについては、支援活動の内容が徐々に理解され利用者も増加しており、平成30年度はバイオバンクの充実等研究支援を更に加速して、研究においても高い評価の獲得を目指すこととしています。

医療分野では、病院全体の診療体制を強化していく上で、診療科への人員配置の偏在が顕在化してきました。診療科ごとの配置数と医療収入、教育の負担等を合理的に評価して、全体最適に努めなければなりません。まずは、人材という最も大事な資源を流動的に配置していきけるよう臨床教員定数の中央化を検討していきます。

新病院に導入した施設・設備、医療機器、システム等の活用、適切な人員配置を行って効率的な病院運営を図るとともに、特定機能病院、高度急性期病院として救急患者、心疾患患者、がん患者など高度医療を要する患者の一層の確保を図ることとします。特に、手術室、ICU系病室のフル稼働を目指します。平成30年度は、リハビリテーション技師、診療放射線技師などの医療職員を増員するとともに、医師の働き方改革の方針も視野に入れて、チーム医療の推進、診療看護師の活動範囲の拡大などの見直しを行います。

<主な事業>

## 教育・研究に関するもの

○学力強化、国試対策に向けた取り組み

- ・医学部において、進級を認定されなかった者に対して各学年次に向けた特別カリキュラムを実施
- ・医師国家試験対策システムの改修

○研究活動の活性化

- ・長久手市とのコラボレーションによる研究ブランディング事業の採択を目指す
- ・バイオバンク本格稼働などに備え、研究支援者（テクニシャン）の増員

○教育・研究環境の再生・整備

- ・解剖実習室の改修
- ・講義室等のAV機器整備
- ・医学部学務情報システムの再構築
- ・学内公募による教育改革事業

## 医療に関するもの

○医療に関する人員増

- ・教員の増員（呼吸器・アレルギー内科、小児科）
- ・スタッフの増員（作業療法士、診療放射線技師、歯科衛生士）

○診療用機器の整備

- ・内視鏡検査システムの更新
- ・放射線機器の更新（CTシミュレーター、X線透視装置、頭部用X線CT装置）

○大学院学生（NP）奨学金制度の貸与

- ・本院の看護師で本院大学院看護学研究生に進学し、修了後に引き続き本院に診療看護して勤務する者に奨学金を貸与する。



- セキュリティ向上対策
  - ・電子カルテシステムの安全性を高めるため、メール機能のセキュリティ対策を実施

- 職員研修の充実
  - ・教授向けSDの実施
  - ・管理監督者向け合宿型研修，経営人材育成
  - ・特定の資格に対する戦略的な取得支援

**法人・大学運営に関するもの**

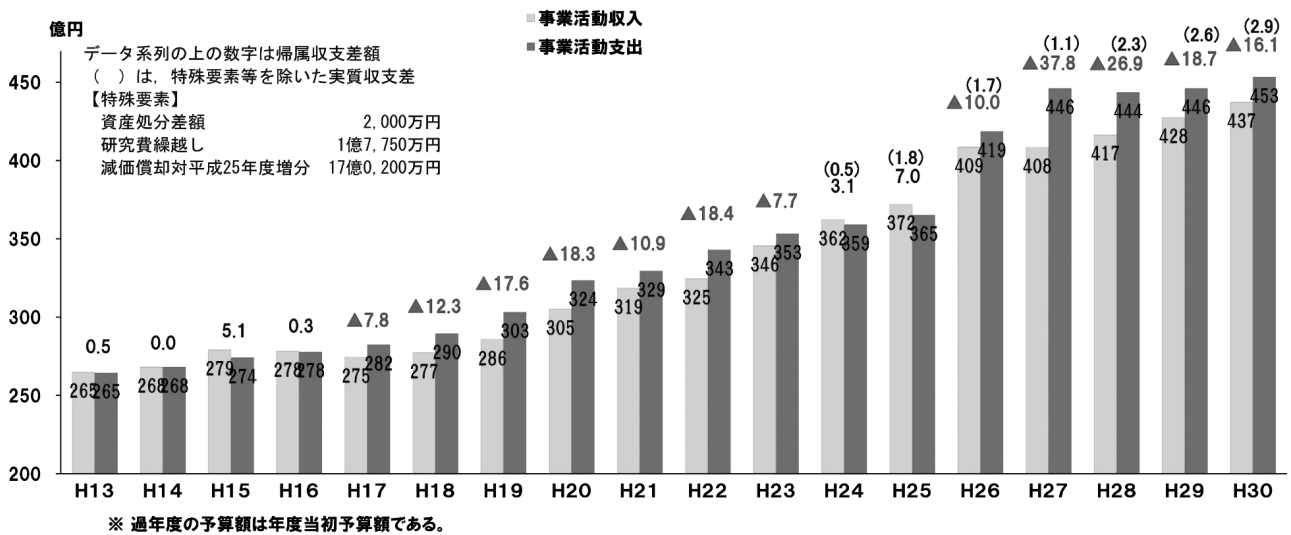
- 学生募集関係
  - ・各学部紹介動画の作成
  - ・大学への資料請求者一元管理データベースシステムの構築

- その他
  - ・ドクターヘリ格納庫運用記念式典
  - ・立石池外周道路（第2期）拡幅事業

平成30年度の予算状況は、

**事業活動収入 437億3,276万余円**  
**事業活動支出 453億3,779万余円**

となっており、事業活動収支差額は16億0,503万余円の支出超過となり赤字となっていますが、特殊要素等を除いた実質の収支額は2億9,447万円の黒字予算となっています。



事業活動収支予算では、収入43,733百万円（前年度比2.36%増）、支出45,338百万円（前年度比1.37%増）となり、収支差は、1,605百万円の支出超過となっていますが、資産処分差額20百万円、研究費の繰越分178百万円、減価償却額の対平成25年度増額分1,702百万円の単年度特殊要素等を調整後の収支額では、294百万円の黒字予算となっています。

資金収支予算では、学生生徒等納付金収入5,119百万円、寄付金収入480百万円、補助金収入1,709百万円、医療収入35,065百万円など資金収入合計45,358百万円となっています。

一方、人件費支出18,861百万円、教育研究費支出20,760百万円、管理経費支出653百万円、施設関係支出92百万円、設備関係支出858百万円、借入金返済支出1,742百万円など資金支出合計44,255百万円となっています。

## ＜ 資金収支予算 ＞

平成30年4月1日から

平成31年3月31日から

(単位：千円)

収入の部			
科 目	本年度予算	前年度(5月補正後)予算	増 減
学生生徒等納付金収入	5,118,630	5,113,380	5,250
手数料収入	246,243	240,356	5,887
寄付金収入	480,196	523,700	△ 43,504
補助金収入	1,708,622	1,791,144	△ 82,522
資産売却収入	0	3,600	△ 3,600
付随事業・収益事業収入	492,231	540,516	△ 48,285
医療収入	35,065,383	33,802,472	1,262,911
受取利息・配当金収入	5,361	7,344	△ 1,983
雑収入	586,098	670,724	△ 84,626
借入金等収入	150,000	150,000	0
前受金収入	895,556	1,123,356	△ 227,800
その他の収入	7,817,258	7,478,563	338,695
資金収入調整勘定	△ 7,207,232	△ 7,002,272	△ 204,960
前年度繰越支払資金	2,446,764	3,853,854	
収入の部合計	47,805,110	48,296,737	△ 491,627

支出の部			
科 目	本年度予算	前年度(5月補正後)予算	増 減
人件費支出	18,860,754	18,572,369	288,385
教育研究経費支出	20,760,223	20,145,793	614,430
管理経費支出	652,610	658,356	△ 5,746
借入金等利息支出	302,958	320,876	△ 17,918
借入金等返済支出	1,741,846	1,771,846	△ 30,000
施設関係支出	92,461	979,479	△ 887,018
設備関係支出	858,092	2,184,304	△ 1,326,212
資産運用支出	150,000	150,000	0
その他の支出	4,250,984	4,303,319	△ 52,335
〔 予 備 費 〕	300,000	300,000	0
資金支出調整勘定	△ 3,715,159	△ 4,153,137	437,978
翌年度繰越支払資金	3,550,341	3,063,532	486,809
支出の部合計	47,805,110	48,296,737	△ 491,627

## ＜事業活動収支予算＞

平成30年4月1日から

平成31年3月31日から

(単位：千円)

		科 目	本年度予算	前年度(5月補正後) 予算	増 減
		教育活動収入の部	事業活動収入	学生生徒等納付金	5,118,630
手数料	246,243		240,356	5,887	
寄付金	451,500		452,700	△ 1,200	
経常費等補助金	1,631,150		1,649,395	△ 18,245	
付随事業収入	492,231		540,516	△ 48,285	
医療収入	35,065,383		33,802,472	1,262,911	
雑収入	586,098		670,724	△ 84,626	
教育活動収入計	43,591,235		42,469,543	1,121,692	
事業活動支出の部	科 目		本年度予算	前年度(5月補正後) 予算	増 減
人件費	18,972,444	18,662,695	309,749		
教育研究経費	24,873,223	24,568,793	304,430		
管理経費	861,790	842,156	19,634		
徴収不能額等	7,380	8,800	△ 1,420		
教育活動支出計	44,714,837	44,082,444	632,393		
教育活動収支差額		△ 1,123,602	△ 1,612,901	489,299	
教育活動外収支	事業活動収入の部	科 目	本年度予算	前年度(5月補正後) 予算	増 減
	受取利息・配当金	5,361	7,344	△ 1,983	
	その他の教育活動外収入	0	0	0	
	教育活動外収入計	5,361	7,344	△ 1,983	
	事業活動支出の部	科 目	本年度予算	前年度(5月補正後) 予算	増 減
	借入金等利息	302,958	320,876	△ 17,918	
	その他の教育活動外支出	0	0	0	
	教育活動外支出計	302,958	320,876	△ 17,918	
	教育活動外収支差額		△ 297,597	△ 313,532	15,935
経常収支差額		△ 1,421,199	△ 1,926,433	505,234	
特別収支	事業活動収入の部	科 目	本年度予算	前年度(5月補正後) 予算	増 減
	資産売却差額	0	3,600	△ 3,600	
	その他の特別収入	136,168	242,749	△ 106,581	
	特別収入計	136,168	246,349	△ 110,181	
	事業活動支出の部	科 目	本年度予算	前年度(5月補正後) 予算	増 減
	資産処分差額	20,000	20,000	0	
	その他の特別支出	0	0	0	
	特別支出計	20,000	20,000	0	
	特別収支差額		116,168	226,349	△ 110,181
〔予備費〕		300,000	300,000	0	
基本金組入前当年度収支差額		△ 1,605,031	△ 2,000,084	395,053	
基本金組入額合計		△ 3,000,000	△ 4,000,000	1,000,000	
当年度収支差額		△ 4,605,031	△ 6,000,084	1,395,053	
前年度繰越収支差額		△ 53,772,623	△ 48,241,259	△ 5,531,364	
翌年度繰越収支差額		△ 58,377,654	△ 54,241,343	△ 4,136,311	
(参考)					
事業活動収入計		43,732,764	42,723,236	1,009,528	
事業活動支出計		45,337,795	44,723,320	614,475	





### — 不断の努力が求められている —

学 長 佐 藤 啓 二

平成26年4月に学長に就任しましたので、平成30年3月31日にて、一期四年間の任期を無事終えることができました。関係各位のご理解とご支援の賜物と感謝申し上げます。ありがとうございました。

今年4月1日から二期目二年間の任期に入っておりますので、一期目の総括と二期目の構想をお示ししたいと思います。

大学ガバナンス改革で求められた種々の制度改革として、理事長を委員長とする教員人事委員会の設置、大学運営審議会の設置、副学長制度の見直し、学長・学部長・病院長選考方法の抜本的変更、教授選考方法の見直し、講座・診療科名称の見直し等を行ってきました。

また、研究活性化の種々の取組として、研究創出支援センターの設置、研究ユニット創出支援事業や科研費Jump up作戦も着実に成果を上げるようになってきました。Jump up作戦においては、平成26年度の科研費申請件数は128件でしたが、平成29年度申請件数は227件と99件増加しました。

教育内容の充実に向けた取り組みとしては、総合学術情報センターを設置し、ICT支援部門を新たに設けました。また、学習の履歴と成果を蓄積できるシステム「e-Portfolio」を導入し、皆さんの協力を得て、開発作業が順調に進んでおります。

診療支援として、医師診療補助員を75対1から、50対1に増加させ、診療意思決定支援ツールであるUpToDateを活用する努力を重ねてきました。平成26年度の年間検索件数は961件でしたが、平成29年度には14,536件に増加しております。大学病院の診療レベルを客観的に評価される指標ともなり得るものと考えておりますので、今後とも利用件数を増加させる努力を重ねていくつもりです。

今年度早急に準備を進めなくてはならないことは、来年度に受審が決定している「医学教育標準化に向けた分野別認証への取組」であります。分野別に組織されたチームによる自己点検評価とその報告書作成の達成度には、多少差異は見られるものの、新医学部長の下、6月

に予定された模擬審査に向けて、新たに体制を組み直して進めております。

また、平成32年度を迎えるまでに、大学基準協会による大学評価の準備をしなければなりません。大学院医学研究科の抜本的改革（コースワークの見直し、MD/Ph.Dコース、指導者養成コースの設置に向けた検討等）が求められていますので、早速見直し作業を開始することにしております。大学院改革会議（仮称）を設置し、同会議で行うべき事項と大学院医学研究科運営委員会で行うべき事項を整理し、効率よく作業を進めていく予定です。

来るべき人口減少社会（特に少子化）においても、なお本学が発展し続ける為には、揺るぎない経営基盤を確立し、充実した研究及び教育成果を示し、確固たる地位を築いておかなければなりません。

愛知医科大学教職員並びに学生諸君の力を結集して、不断の努力を重ねていく所存です。これからも宜しくお願いたします。



### —医学部のブランド化に向けて—

医学部長 若槻明彦

2018年4月に医学部長を拝命しました。身に余る光栄でありますとともに、責任の重さに身の引き締まる思いであります。今後、更なる医学部の発展のため、全身全霊を傾けて努力する所存です。

愛知医科大学は昭和47年に開設され、医学部においては、これまで教育・研究に係る附属施設として、医学教育センターや総合医学研究機構等が整備され、平成26年に最先端医療機器を導入した新病院が開院されたことにより、臨床実習を中心とした教育の場としても充実いたしました。医学部では、開学から50年近くで4,000名を超える卒業生が医師となり、先端医療から地域医療まで様々な医療・教育現場において、国内のみならず海外においても同窓生が活躍しています。

昨今、医学部を取り巻く環境は極めて厳しくなっています。まず、医師過剰時代がまもなく到来します。これまで社会的に大きな問題であった医師不足は解消されつつあり、平成19年と比較して平成30年の医師数は23.5%増加しています。厚生労働省の試算では、週60時間を超す医師の勤務時間を週60時間以内に制限した場合、2028年頃に医師数は約35万人に達し、2040年には医師供給が約3.5万人過剰となると推計されています。また、少子化の影響で18歳人口は平成19年から10万人以上減少し、医学部入学定員も激減する可能性が指摘されています。一方、大学間の法人統合も昨今の話題となっており、今後も統合する大学が増加する可能性があります。こういった状況下において、これからの医学部は、学生の確保を始めとする舵取りが極めて重要であり、特に本学のような私立医科大学においては独自の特色を持つことが必須と考えております。

現在、医学部では「医学教育分野別認証制度」に対応したグローバルな視点からの医学教育改革が急速に進んでいます。本学医学部では、平成31年9月の受審が決定しており、教員の教育に対する意識改革を目的としたFDを開催し、医学教育カリキュラムの構築やアクティブラーニング、診療参加型臨床実習の積極的導入に取り組んでおります。更に、国際感覚を養う目的で、大学間

や医学部間での学術国際交流も積極的に行っており、米国の南イリノイ大学医学部、ドイツのルール大学医学部とは学生の短期留学を、タイのコンケン大学医学部、韓国の東亜大学校医科大学、ポーランドのウッチ医科大学とは学生・研究者の交流を行っております。また、2017年11月からは新たに米国のバーモント大学との協定を締結し、本年4月から学生の交流プログラムもスタートしました。

研究面における課題としては、大学院改革が必要だと考えております。医療現場では、高度な専門的知識のみならず全人的医療が求められております。患者に求められる医療を行うには、研究に裏付けされた臨床能力が必要となります。大学院医学研究科においては、更なる研究の質的向上を目指した改革を行うとともに、本学の卒業生が後輩を指導できる屋根瓦式教育を目指しております。また、研究創出支援センター内のバイオバンク事業が平成29年度から稼働しており、今後、多くのデータの蓄積が期待されます。本学が位置する長久手市は市民の平均年齢が若く、愛知県内で最も人口増加率の高いことから注目されています。今後、長久手市の特徴を生かしながら、地域住民の健康に貢献できる研究も計画中です。

近い将来の医師過剰時代の到来に伴い、大学間での競争は激しくなると予想されます。今後、愛知医科大学医学部は、独自の特色を活かした「ブランド化」に向けて、教育・研究の改革を実行し、更なる発展のために努力する所存です。

今後皆さまのご協力、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。



## —社会からの期待に応えられる 看護学部—

看護学部長 坂本 真理子

この度、看護学部長・看護学研究科長を拝命いたしました。

少子高齢社会が著しく進行し、私たちを取り巻く社会が大きく変化する中で、看護職者に期待される能力はより多様で高度化しております。看護職者の活躍の場も医療機関に限らず、在宅や施設へと広がりを見せています。保健医療チームの一員として、ヘルス・プロモーションや予防から病気や障がいをもちながら生活をされている方たちへのケアまで、幅広い看護実践を充実させていくためには、これまで以上に高い看護実践能力が必要とされると思います。教育機関として、どのように社会に貢献していくことができるか、常に先を見越した努力が必要です。

看護学部の設置は全国でも増加し続けており、とりわけ、本学が立地する愛知県では、2018年度で14校、来年度は16校となる予定です。本学の看護学部は、2000年に愛知県で5番目に設置され、来年度で20周年を迎えます。これまでの歴史に甘んじることなく、在学生在が愛知医科大学看護学部を選んで良かったと実感でき、卒業生が母校として誇りに思うことができる、質の高い教育を提供していかなければと思っております。

私自身は、保健師として公衆衛生看護分野での看護実践を経て、看護教育の世界に入りました。国内外の地域で、地域住民の方々とともに、どうしたら健康を促進できるのか、考え続けてきた道のりであったと思います。看護職も社会的な格差による健康格差の課題に取り組み、健康的な生活とは程遠い状況下にある人々にも暖かな関心を寄せていくことが重要であると考えています。そして、一人ひとりの人々が自分の望む生を生き、生を全うできるように、多様な価値観や生活に寄り添って、よりよい道とともに考え見出していく、そんな看護職を養成することが私の理想です。

2017年10月に文部科学省から、医学・歯学・薬学のモデル・コア・カリキュラムに次いで、「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」（「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の習得を目指した学修目標）が策定・公表

されました。看護系人材として求められる基本的な資質・能力が明示されたわけです。看護学部においては、本学で提供する教育内容を点検し、より充実させるとともに、今後も選ばれ続ける学部として、本学部の特徴を前面に打ち出していけるよう取り組んでいきたいと思っております。

看護学部には、これまでの経過の中で培ってきたたくさんの方の宝があります。1,500名を超える学部卒業生と100名を超える看護学研究科の修了生の存在。大学病院の看護部を始めとする医療スタッフの皆さまとの密接な関係と協働の蓄積。活発化する医学部との協働体験や看護学部父母会からの暖かいご支援。そして、学生たちの成長を見守り続けてくださっている地域の住民の皆さま、行政や保健医療福祉関連の実習指導者の皆さまとの関係の深さ。これらはすぐに得られるものではなく、長年の教職員の方々の努力によって築かれてきた強みであると思います。

私は看護学部長・看護学研究科長として、これらの蓄積を更に発展させ、社会からの期待に応えられる看護職を送り出せるよう、看護学部・看護学研究科の運営に邁進したいと思っております。

今後とも引き続き、皆さまからのご支援ご鞭撻を賜りたいと存じます。





## —自立しながらも、 「個」が「孤」にならない学生生活を—

医学部学生部長 鈴木孝太

2018年4月1日より解剖学講座の中野隆教授の後任として、医学部学生部長を拝命いたしました。2年前に本学に着任して以来、中野教授の下、学生生活委員として学生生活の支援などに携わってきました。浅学非才の身ではありますが、保護者の皆さまを始めとする関係者の皆さまのご理解とご協力をお願いいたします。

さて、着任以来、衛生学を始めとする社会医学系の科目を中心にプロフェッショナリズムや倫理に関する科目など、1学年次生から4学年次生まで各学年の科目、その中で様々な実習も担当しています。また、医学教育センターの学修支援部門長として、支援が必要な学生を対象に学修支援のための勉強会を開いたり、保健管理センター長として、心身の不調を訴える学生に対応したりしています。このように様々な立場で、特に講義室以外の場所で学生と接していると、今の学生に大学が提供していかなければならないのは、CBTや国家試験を乗り越えるための知識だけではなく、医学生、また、将来の医師としての態度・姿勢、特に他者との関わり方などを身につける機会、そして、社会との多様な接点だと感じています。

最近では、近年の少子化の影響か、大学受験指導の流行りは「個別指導」であり、個々の受験生に合ったきめ細やかな指導が提供されているようです。また、医学・医療は急速に進歩しており、教員も日々、自分の専門領域の情報をアップデートしていかないと、あっという間に取り残されていくのと同様、学生時代に身につけなければならない知識も日々更新され、膨大な量になっています。そのため、CBTや国家試験対策に特化した教科書が多数存在しますし、更に国家試験予備校のDVD講義を各自が視聴するのが主流となり、効率よく勉強できるようになっています。つまり、試験に合格するためには、「個人」で効率よく学ぶことが重要とされているわけです。

しかしながら、本学のコンピテンス、コンピテンシーを見ると、「利他主義」、「チーム医療」、「多職種協働」、「コミュニケーション」、「医学・医療と社会」、「地域社会」、

「地域包括ケア」といった、社会や他者との関わりについてのキーワードが並んでおり、個人で学習するだけでは身につけられない目標が多々あります。

つまり、現在の医学部に求められているのは、「個人」で生活する中で学習することと、他者との関わりの中でコミュニケーションをとりながら自らの役割を学ぶことをバランスよく両立させていくことだと考えます。その両者のバランスを崩し、個人の生活ばかりにとらわれて「孤立」してしまったり、あるいは集団の中で自分という存在を見失ってしまったりしないよう、大学は学生に寄り添いながら、学生が自らそのバランスを取れるよう、学修面・生活面の両方を支援していく必要があると感じています。そのために学生部は、特にクラブ活動などの課外活動を始めとする生活面の支援を、学修面の支援を行う教務部と協力して進めて参ります。

最後に、医学・医療は、自らの判断が人の命を左右する厳しい世界です。教員もその覚悟で教育、研究、診療を行っていますが、学生が受け身で、また、自分の都合のみを優先して「孤立」した学生生活を送っているのは社会に貢献できる医師を育てていくことはできません。学生が、医学・医療の厳しさを実感しながら成長していくための環境づくりを学生とともに、また、学生自身の積極性を引き出しながら進めていきたいと思っています。



## —看護の未来は動画で イメージする—

看護学部教務学生部長 高橋佳子

超高齢社会を迎える2025年に向けて国は地域包括ケアを推進し、従来の病院完結型の医療から地域・在宅医療にシフトしています。高齢化の進展や慢性疾患の増加により、長期的に慢性の病いととも生きる人の療養生活をいかに支えるかという点において、看護の役割はますます拡大しています。同時に、多様化・複雑化した国民のニーズに応えるためには、看護実践能力もこれまで以上に高度化・多様化が求められています。医療・介護現場には約30万人の人材不足が推定されています。人材不足などの対応として、次世代福祉機器としての介護用ロボットの開発を進展させ実用化し、AIロボット「Pepper」を使った医療ICTの取り組みも始まっています。

このような時流の中で、人々の健康で幸福でありたいという普遍的ニーズに看護はどう応えればよいでしょうか。広義の看護には、そもそも「人が人の世話をする」という意味があります。その一方で、私たち看護専門職者は、個々人の生を支え、ありたい姿をともに追及し、専門的知識と価値思考、技術を獲得して人々の看護にあたってきました。日本看護協会は、2025年に向けた看護の挑戦として、基本理念に基づき、「看護の将来ビジョン～いのち・暮らし・尊厳をまもり支える看護～」を掲げ、活動の方向性を明確にしました。このビジョンについて、私は多様な文脈が複雑に入り交じった環境の中でも状況を理解し、対象者への看護の目的・目標を設定し、その目的に応じて必要な情報を見出し、答えのない課題に対して多様な人々と協働しながら目的に応じた看護実践ができるという看護の強みが集約されていると解釈しています。

未知の時代に挑んでいくのはこれから育つ人であり、最も重要なのは教育です。2005年からの大学教育改革に端を発した様々な教育改革は、現状の教育制度の問題点を指摘し、2017年には学習指導要領も改訂され、今までの「知識を身につける教育」から「知識を活用する教育」へとコンセプトを変えました。看護基礎教育制度の改革も進み、2017年には看護学教育モデル・コア・カリキュ

ラムも発表されました。看護の世界はまだ答えのない課題、複数の答えが考えられる課題に満ちています。また、めまぐるしく変化する医療やグローバル化の進む社会情勢では、過去に出された解決策が通用しなくなり、それを今の条件や状況に合わせて再検討し、新しい答えを考えなければならぬことも多くなっています。

様々な教育改革は、容赦なく私たちに変化を求めてきます。これからの看護の学びは、豊かな人間性を基盤に、獲得した知識をどう活かすかという判断力、新たな課題に挑む創造力を獲得することが重視されます。学ぶこと自体の意味を理解し、看護師を目指すという自身の意思を明確にして学修する覚悟が必要かもしれません。また、試験や実習に追われる苦しい状況であっても、好奇心を育み満たす力を持つことは、生きることそのものを面白くさせてくれるかもしれません。看護の未来は、ワンショットの情報では描ききれないほどに広がっています。迫る情報や出来事を受け止め、主体的に判断しながら、自身が看護をどう描くかを、常に動画でイメージする動きのあるものであってほしいと思います。

愛知医科大学看護学部は、これから起こりうる変化に対応するために学修活動を支援する教務委員会、学生委員会、実習委員会を始めとする様々な委員会体制、学生生活を支援する事務体制など、教職員一同で学生を支えています。

## 主な役職者の改選

### ○ 大 学

#### 【副学長（特命担当）】



##### 春日井邦夫

(内科学講座（消化管内科）・教授)

この度、副学長を拝命いたしました。学長を補佐し、男女共同参画、教員評価に加え、卒前・卒後の一貫した教育体制の構築に取り組む所存です。愛知医科大学の更なる発展に貢献できますよう、微力ながら精進いたしますので、宜しくお願い申し上げます。

(新任、任期：H30. 4. 1～H32. 3. 31)

#### 【災害医療研究センター長】



##### 加納 秀記

(救急診療部・教授（特任）)

この度、災害医療研究センター長を中川隆名誉教授から引き継ぎ、拝命いたしました。本センターは、災害医療の教育・研究を行い、各種災害における犠牲者を軽減のため貢献して参りたいと存じます。大学病院との連携を深め、基幹災害拠点病院としての教育・研究も行っていきたいと思っております。

(新任、任期：H30. 4. 1～H32. 3. 31)

#### 【総合学術情報センター長】



##### 中野 隆

(解剖学講座・教授)

総合学術情報センターは、図書館部門、ICT支援部門、情報基盤部門からなります。アクティブラーニングの助長、成績データ等の分析や情報共有を図るICT技術の利用促進に向けて、講習会などの啓蒙活動を充実させる予定です。

(新任、任期：H30. 4. 1～H32. 3. 31)

#### 【保健管理センター長】



##### 鈴木 孝太

(衛生学講座・教授)

保健管理センター長を拝命いたしました。学生と教職員の健康管理を中心に、大学に関わる皆さんが毎日を健康に過ごすことができるよう、サポートして参ります。体調不良のときはもちろんのこと、健康相談などでも、気軽にD棟6階のセンターをご利用ください。

(再任、任期：H30. 4. 1～H32. 3. 31)

#### 【研究創出支援センター長】



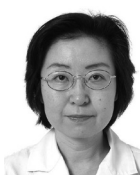
##### 武内 恒成

(生物学・教授)

平成28年度から稼働している研究創出支援センター長を若槻副学長から引き継ぎ、拝命いたしました。同センターは研究支援部門、共同実験部門、バイオバンク部門からなり、研究推進や論文発表についての全学的な支援業務を旨としております。本学における研究活動の質的向上に向けて、様々な観点から貢献して参りたいと存じます。

(新任、任期：H30. 4. 1～H31. 3. 31)

#### 【加齢医科学研究所長】



##### 吉田 眞理

(加齢医科学研究所・教授)

引き続き、加齢医科学研究所長を拝命いたしました。現在「神経病理部門」、「プリオン病解剖部門」の二部門があり、神経病理学の専門学術機関として、研究や学生教育産、地域医療における神経疾患の診断、ブレインリソースセンターとして本邦の神経科学の基礎研究に貢献していきたいと思っております。

(再任、任期：H30. 4. 1～H32. 3. 31)



## ○ 医学部

### 【メディカルクリニック長】



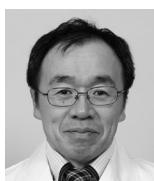
#### 馬場 研二

(メディカルクリニック・教授)

引き続き、メディカルクリニック長を拝命いたしました。当施設は、平成29年度から診療体制を一新、積極的な広報活動も展開の結果、新規患者数が増えつつあります。今年度もその姿勢は崩さず、診療・教育・研究の更なる充実に向け、全力で取り組んで参ります。

(再任, 任期: H30. 4. 1 ~ H32. 3. 31)

### 【学際的痛みセンター長】



#### 牛田 享宏

(学際的痛みセンター・教授)

引き続き、学際的痛みセンター長を拝命いたしました。学際的痛みセンターでは、色々な領域の専門家と連携し、難治性の慢性痛を中心とした疾患の診療・研究・教育を推し進めることで、この領域の医療の更なる発展に努めたいと考えています。

(再任, 任期: H30. 4. 1 ~ H32. 3. 31)

### 【総合医学研究機構長】



#### 佐藤 元彦

(生理学講座・教授)

引き続き、総合医学研究機構長を拝命いたしました。高度研究機器部門、動物実験部門、核医学実験部門からなる総合医学研究機構は、研究活動の中核といえます。設備の整備・広報活動を通して、利用促進を図り、本学の研究活動の発展に貢献して参りたいと思います。

(再任, 任期: H30. 4. 1 ~ H32. 3. 31)

## 【IR室長】



#### 若槻 明彦

(医学部長)

IR室は教育・研究や経営に関する情報の収集・分析や、学生の成績などのデータ蓄積により、大学の様々な改革や意思決定をサポートする部署です。現在本学では、専任講師により学部生中心のデータを蓄積し、学修の場にフィードバックしています。今後は更に内容を充実させて、大学発展のために尽力いたしますので、宜しくお願いいたします。

(新任, 任期: H30. 4. 1 ~ H32. 3. 31)

## ○ 看護学部

### 【看護実践研究センター長】



#### 多喜田 恵子

(精神看護学・教授)

引き続き、看護実践研究センター長を拝命いたしました。認定看護師のキャリア支援、看護実践能力の向上を目指す卒業後研修・研究支援、地域連携支援活動の充実を図りたいと思います。また、愛知医科大学病院看護部との連携を基盤に、地域社会のニーズに対応した看護活動の発展に貢献したいと思います。

(再任, 任期: H30. 4. 1 ~ H32. 3. 31)

## ○ 大学病院

### 【看護部長】



#### 井上 里恵

(看護部・部長)

この度、副院長、看護部長、メディカルクリニック看護科長を拝命しました。看護部は、病院の中で一番大きな組織であり、役割拡大など社会からも大きな期待を寄せられています。医療・介護の現場が激動する中、患者さん・家族の思い、生活に寄り添う看護の実現とともに、副院長として病院長を補佐し、愛知医科大学病院の発展に貢献できるよう努めたいと思います。

(新任, 任期: H30. 4. 1 ~)

## 平成29年度新病院建設募金感謝の集い開催

平成30年2月17日(土) 大学本館第1会議室において、新病院建設募金感謝の集いが開催されました。【写真】

これは、同募金に100口以上の寄付をされた個人の方に感謝の意を表すための会で、平成29年11月末までに寄付をされた方々を対象に行われました。

始めに、三宅養三理事長から同募金の趣旨にご賛同頂き、ご支援頂いたことに対する感謝の言葉が述べられ、寄付者一人ひとりの紹介及び大学の近況等について説明がありました。

続いて、三宅理事長から寄付者一人ひとりに感謝状が贈呈されました。その後、参加者全員による意見交換が行われ、寄付者銘板の見学を行いました。

見学後、昨年6月にオープンした立石プラザ交流ラウンジで催された懇親会では、出席された方々同士及び本学役員との懇談が行われ、大学、病院への期待や意見が多数寄せられました。



## 大学執行部（常任理事）を対象としたSD実施

平成29年4月1日に施行された大学設置基準において、SD（スタッフ・ディベロップメント）が義務化され、その対象となる職員に「教授等の教員や学長等の大学執行部、技術職員等も含まれること。」と定められました。このことを受けて、平成30年1月17日（水）役員会議室において、常任理事を対象としたSDが開催され、三宅養三理事長を始め、常任理事の7名全員が出席されました。【写真】

今回は、世界的名著『人を動かす』の内容を元にした人材育成プログラムを提供している、デール・カーネギー・トレーニング・ジャパンから石原裕一朗氏を講師にお招きし、「エンゲージメント」をテーマに実施されました。

近年組織開発分野で注目が高まっている「エンゲージメント」は、「組織に対する満足度が高く、成果にコミットしている状態」を言い、生産性向上につながる重要な要素であることや、日本ではエンゲージメント意識が低い状況であるといった問題点を共有した上で、エンゲ



ジメントの高い企業の事例紹介がありました。

研修後半には、参加者からの質問も活発に寄せられ、エンゲージメントを高くしていくために「スタッフの良いところに注目していく。」「満足感を与えられる上司をおくことが重要である。」などの意見交換が行われました。

## 名誉教授称号授与式挙行

平成30年3月31日付をもって定年退職された石口恒男教授（放射線医学講座）、小島貞男教授（化学）、中川隆教授（災害医療研究センター）、小寺良尚教授（造血細胞移植振興寄附講座）、八島妙子教授（老年看護学）、白鳥さつき教授（基礎看護学Ⅰ）に愛知医科大学名誉教授の称号が授与され、平成30年4月9日（月）午後0時10分から大学本館役員会議室において授与式が行われました。

授与式には、三宅養三理事長を始め佐藤啓二学長、若槻明彦副学長（医学教育担当）、坂本真理子副学長（看護学教育担当）、島田孝一法人本部長、羽根田雅巳事務局局長が出席し、三宅理事長から称号記が授与されました。



出席者による記念撮影

記念撮影の後、昼食を交えた懇親会が開かれ、和やかな雰囲気の中、午後1時ごろ授与式は終了しました。

## 予算全学説明会の開催

平成30年3月29日（木）大学本館たちばなホールにおいて、平成30年度予算を中心とする全学説明会が開催され、職員約140名が参加しました。【写真】

まず、三宅養三理事長から「平成18年から始まったキャンパス再整備は、今年度末をもって全てが終了し、本学の舞台が整い役者も揃ってきました。新病院効果がじわじわと出てきており、外来患者数は少し前に3,000名を超え、手術件数も1万3千件に届く勢いです。次は、教育・研究に目を向けて、充実させたいと思います。今年度の国家試験の合格率はとても満足できる数字で、新卒の医師国家試験合格率は、全国平均93.9%に対して95.4%と高く、看護師国家試験合格率は3年連続で100%を達成しました。こういったことを見ると、本学は全ての意味で右肩上がりにあると思います。しかし、まだまだすべきことは山積みであり、やはりこれからは『大学の品格』を出すために研究活動の活性化が必要となります。また、医学教育分野別評価受審の準備も進めています。新しい専門医制度も始まり、これに順応しなければいけません。医療安全では、情報セキュリティの対策も必要で、関連病院が少ないことも課題ですが、最も大きなことは厚生労働省によるがん診療連携拠点病院に指定を受けることです。本院はまだこの指定を受けておらず、様々なことで影響があるため、必ずこの指定を受けられるように方策を練ることが求められます。もう一つは、やはり寄付文化の醸成です。ハーバード大学では、1年間で1,300億円の寄付を集め、寄付で集めたお金が大学の経営の半分を占めているのです。加えて、平成30年度は、診療報酬・介護報酬の同時改定が行われます。医療収入が減れば、大学経営に負担がかかってきますし、平成31年には消費税も増税となります。大学を取り巻く



環境を考えると、安閑としている状態ではありません。今お伝えしたことを頭に入れながら、2月中に予算会議を何度も行い、予算を編成しました。予算は目標であり、予算と決算が大体一緒になれば、良くなったと考えられます。予算は目標ですので厳しく組み、それに向かって邁進していかなくてはなりません。今年の予算については、特殊要素を除いた実質的な収支差は、少しだけ黒字の予算を組んでいます。たくさん予算要求案を頂き、できれば全部通したいところではありますが、それでは経営が成り立ちませんので、プライオリティ等を考慮して、予算を編成しております。事業効果についても、これから評価して、結果が良いものについて予算を付けていきたい。」とあいさつがありました。

引き続き、予算責任者である島田孝一法人本部長から、平成30年度予算に関する規模や実質の収支額及び重点事業の内容等について、具体的な説明がありました。

更に最新の活動状況として、平成30年3月末をもってドクターヘリ格納庫が完成したことから、「ドクターヘリ格納庫運用～キャンパス再整備完了～記念式典」を開催予定であることが説明されました。



## 小寺良尚名誉教授から日本画の寄贈 小寺礼三画伯 筆「稚児文殊」

平成30年4月6日付けで小寺良尚名誉教授から、本学の医学教育の発展を祈念し、小寺名誉教授のご尊父であり日本画家である小寺礼三画伯 筆「稚児文殊」が本学へ寄附され、平成30年4月11日（水）理事長室において、寄贈式が行われました。

この絵画は、多くの学生や教職員がいつでも鑑賞することができるように大学本館エントランス内に展示されています。

### 「稚児文殊」解説

文殊菩薩は知恵第一であり、その知恵は童子のように清純と言われるので、姿を童子形とし、王朝の稚児が唐獅子に騎乗する姿の和風仏画が鎌倉時代以降に行われるようになりました。



小寺名誉教授ご夫妻と三宅理事長

## 名古屋市教育委員会共催 市民大学公開講演会開催

平成30年2月24日（土）午後1時30分からイーブルなごやホールにおいて、名古屋市教育委員会との共催で市民大学公開講演会が開催されました。

当日は、名古屋市を始めとする多くの一般市民の方々にご参加頂き、「愛知医科大学における最先端研究・医療」をテーマに、二部構成で行われました。

講演会は、三宅養三理事長による開催のあいさつに始まり、第1部講演では、医学教育センター長でありメディカルクリニック・総合診療科の伴信太郎特命教授から「今日の医療の最前線～総合診療医ドクターG～」と題して、今なぜ総合診療が最先端の医療なのかを今日の社会や医学・医療が直面している諸問題を踏まえながら、あらゆる健康問題の窓口となることのできる医師「総合診療専門医」の専門性や基本的臨床能力の教育方法についてお話し頂きました。

続いて、第2部講演では、脳血管内治療センターの宮地茂教授から「治る脳卒中、治す脳卒中—最新の脳血管内治療—」と題して、脳の血管が傷んで起こる脳出血・クモ膜下出血・脳血栓症・脳塞栓症について、最新の脳血管内治療法を写真やイラスト交えながら分かりやすくお話し頂き、脳卒中予防の基本は生活管理であると強調され、参加された方々は、各講演を熱心に聞き入っていました。

最後に、三宅理事長から閉講のあいさつとして、メディカルクリニックの施設や各診療科の教授紹介があり、盛況のうちに講演会は終了しました。



愛知医科大学病院について解説する三宅理事長



伴特命教授



宮地教授

## 第30回日本医学会総会2019開催に当たり

### 式典委員長 佐藤 啓二

日本医学会とは、1902年（明治35年）の「第1回日本聯合（れんごう）医学会」を起源とし、「医学に関する科学及び技術の研究促進を図り、医学及び医療の水準の向上に寄与する」ことを目的とし、4年ごとに開催されてきました。現在では、128の分科会を擁する日本医学会が、日本医師会と協力し、約3万人の登録予定者により、日本最大規模かつ最大領域を網羅して開催する学会となりました。

この度、中部地区では24年ぶり3回目となる第30回日本医学会総会2019中部を名古屋大学名誉教授の齋藤英彦会頭が主宰されることになりました。

「日本医学会総会2019中部」準備委員会は、2019年4月27日（土）～29日（月・祝）の開催に向けて、名古屋国際会議場をメイン会場として、中部8県の医療関係者及び多くの企業協賛を得て開催する準備を進めております。愛知医科大学では、三宅養三理事長が顧問、私が副会頭並びに式典委員長、三嶋廣繁教授が総務委員会、道勇学教授と牛田享宏教授がプログラム委員会、中村二郎教授が展示委員会、藤原祥裕教授・小笠原尚高教授（特任）が式典委員会、石橋宏之教授が登録委員会に参画し、活動しております。

「医学と医療の深化と広がり～健康長寿社会の実現をめざして～」をメインテーマに、四つの柱を設け、(1) 医学と医療の新展開に34セッション、(2) 社会とともに生きる医療に29セッション、(3) 医療人の教育と生き方に11セッション、(4) グローバル化する日本の医療に13セッションの計87セッションを企画しました。

27日（土）開会式後には、齋藤会頭による講演（医学・医療と生老病死：不変の精神と技術革新）を始め、横倉義武日本医師会会長による講演（日本医師会の医療政策）、門田守人日本医学会会長による講演（社会と共に進化する医学）、ノーベル物理学賞を受賞した天野浩名古屋大学教授による特別講演（健康長寿社会を支えるトランスフォーマティブエレクトロニクス）が行われます。

翌28日（日）には、川口淳一郎JAXA（宇宙科学研究所）教授による講演（やれる理由こそが着想を生む）、山極壽一京都大学総長による講演（野生の思考と未来の人材育成）、末松誠AMED（国立研究開発法人日本医療研究開発機構）理事長による講演（AMEDのミッション：グローバルデータシェアリング）、福井トシ子日本看護協会会長による講演（地域包括ケア時代における医療専門職育成）がそれぞれ行われます。

最終日の29日（月・祝）閉会式後には、福和伸夫名古屋大学教授による講演（過去と現在を直視し、今後の震災に備える）、葛西敬之JR東海（東海旅客鉄道）取締役名誉会長による講演（東海道新幹線から超電導リニアへ）、ノーベル生理学・医学賞を受賞した山中伸弥京都大学iPS細胞研究所所長（教授）による講演（iPS細胞研究の現状と医療応用に向けた取り組み）を予定しております。

「日本医学会総会2019中部」開催に際して、各地で市民公開講座などのイベントが行われます。ポートメッセなごや（名古屋市国際展示場）を会場に、4月26日（金）～28日（日）の3日間、大規模な市民展示（健康未来EXPO 2019）及び学術展示を行うとともに、平行して名古屋大学博物館において、「医学史展」も開催されます。

胚細胞に対する遺伝子編集技術により招来される「人間の未来－進化と倫理」は避けることのできないテーマであり、壮大な航空宇宙医学も目をそらすことができないテーマであります。

学術分科会が細分化される中、幅広いテーマを総合的に見聞する機会は、日本医学会総会を除いて、失われているのが現状です。

是非「日本医学会総会2019中部」に参加することによって、見聞を広め、医療者として大きく成長するチャンスを生かしてもらいたいと考えております。



# 第30回 日本医学会総会 2019 中部

医学と医療の深化と広がり ～健康長寿社会の実現をめざして～

## 学術集会

2019年4月27日(土)～4月29日(月・祝)

名古屋国際会議場、名古屋学院大学白鳥学舎、ウインクあいち

## 学術展示

2019年4月26日(金)～4月29日(月・祝)

名古屋国際会議場、ポートメッセなごや

会頭

**齋藤 英彦**  
名古屋大学名誉教授

副会頭

**松尾 清一** 名古屋大学総長  
**郡 健二郎** 名古屋市立大学長  
**駒田 美弘** 三重大学長  
**星長 清隆** 藤田保健衛生大学長

**柵木 充明** 愛知県医師会長  
**森脇 久隆** 岐阜大学長  
**今野 弘之** 浜松医科大学長  
**佐藤 啓二** 愛知医科大学長

準備  
委員長

**高橋 雅英** 名古屋大学理事

## 事前参加登録のご案内

2018年2月1日(木)正午～2019年4月5日(金)正午まで

**分科会応援早割 (対象: 医師・歯科医師・研究者)**

2018年2月1日(木)正午～10月31日(水)正午まで

参加登録区分 (区分は、登録時の身分とする)	分科会応援早割 2018年2月1日(木)正午～ 2018年10月31日(水)正午まで	事前参加登録 2018年2月1日(木)正午～ 2019年4月5日(金)正午まで	当日参加登録 2019年4月27日(土)～4月29日(月・祝)
医師・歯科医・研究者	25,000円	30,000円	35,000円

## 各種研修制度との連携

New

1. 日医かかりつけ医機能研修制度応用研修単位

日本医学会総会に出席することにより応用研修の2単位が付与されます。

2. 産業医・健康スポーツ医研修単位

(別途5,000円・産業医最大6単位取得可能)  
※早期からのご登録が可能です。事前申込みのみ(定員制・先着順)

公式WEBにて  
随時更新中

3. 日本医学会分科会(一部)の研修単位

分科会の認定する専門医制度等について、分科会規定に基づき単位取得が可能です。

4. 日本医師会生涯教育制度学習単位

受講内容に応じて日本医師会生涯教育制度の単位およびカリキュラムコードの取得が可能です。

事前参加登録完了後に産業医セッション受講申込専用サイトをご案内します

事前参加登録はこちらから ▶ <http://isoukai2019.jp/>



## 同時期開催

第116回日本内科学会総会・講演会

2019年4月26日(金)～4月28日(日)

会長 **長谷川 好規** 名古屋大学大学院医学系研究科  
病態内科学講座 呼吸器内科学 教授

ポートメッセなごや

「第30回日本医学会総会 2019 中部」参加により総合内科専門医認定更新単位：10単位、認定内科医認定更新単位：5単位が取得可能です。

■主催：日本医学会

■主務機関：名古屋大学医学部、名古屋市立大学医学部、藤田保健衛生大学医学部、愛知医科大学、岐阜大学医学部、三重大学医学部、浜松医科大学、金沢大学医学部、金沢医科大学、福井大学医学部、富山大学医学部、信州大学医学部、愛知県医師会、岐阜県医師会、三重県医師会、静岡県医師会、石川県医師会、福井県医師会、富山県医師会、長野県医師会

(学会事務局より提供)



## 大学運営審議会～新メンバーで課題検討を開始～

学長及び副学長を中心に大学の重要事項及び将来構想等を審議する組織として、平成28年4月1日付けにて設置された「大学運営審議会」については、平成28年度には計20回、平成29年度には計18回の会議を開催し、各種規則の改廃に係る審議のほか、副学長から学部・病院の動向や課題等について随時報告がなされ、両学部間での情報共有が図られています。

昨年度に任期満了に伴う学部長の改選があり、副学長（特命担当）も新たに指名され、平成30年度は新メンバーで第1回大学運営審議会が4月21日（月）に開催されました。【写真】

今年度の大きな課題としては「大学院改革」が掲げられており、改革会議の設置に向けて検討が始まりました。また、平成31年度の医学教育分野別評価（国際認証）の受審や、平成32年度の大学基準協会の認証評価受審に向けて、全学的な内部質保証推進組織の整備等も今後の課題となっています。構成員各人が多忙の中ではありますが、様々な課題への迅速な対応を重視し、開催時間を調整しながら積極的に開催していきます。



<構成員>

学長	佐藤 啓二
副学長（医学教育担当）	若槻 明彦
副学長（看護学教育担当）	坂本真理子
副学長（診療担当）	羽生田正行
副学長（特命担当）	春日井邦夫
事務局長	羽根田雅巳

## 平成30年度職員新任式挙行

平成30年4月2日（月）大学本館303講義室において、平成30年度職員新任式が挙行されました。

式では、三宅養三理事長から「キャンパス再整備が完了し、患者さんにとって大変利便性のあるしっかりとした大学病院として、今機能しています。良い医療を更に伸ばしていくために、様々な分野のことを学び、職員同士助け合っていくことが非常に大事ではないかと思います。良い組織であるために、頑張る人が報われるようにしようといつも考えておりますので、努力を惜しまず、愛知医科大学をますます良い大学にして頂きたいと思っております。」とあいさつがありました。

なお、今年度の新規職員は234名で、内教員71名、事務9名、医療20名、看護131名、技術2名、業務1名です。



宣誓を述べる新規職員

## 新規採用事務職員フォロー研修実施

SD（スタッフディベロップメント）の取り組みとして、平成30年3月16日（金）大学本館711特別講義室において、平成29年度に採用された職員に対して、配属後1年を区切りとしたフォロー研修が実施されました。

事前課題で調査した「2年目に期待される役割」を共有し、「業務スピードの向上」、「主体的な業務遂行」、「組織の目的・目標を意識する」、「後輩の見本となる」などの様々な役割が期待されていることを認識しました。また、キャリア学習として、3年後、5年後どんな職員

になりたいのか、そのために必要な取り組みについても考えました。

受講者からは「自分が考えていた2年目の役割とは違う意見を聞き、とても参考になった。」「キャリアビジョンを明確にし、どのような目標を立てるべきかじっくり考える必要があると実感した。」といった感想がありました。

本学の将来を担う貴重な人財として、更なる成長と今後の活躍が期待されます。

# 平成30年度新規採用職員研修実施

平成30年度新規採用職員158名を対象に、平成30年4月3日（火）、4日（水）の2日間にわたり、事務職員、医療職員、看護職員合同の新規採用職員研修が実施されました。

初日は、社会人としての心構えや立ち振る舞い、正しいビジネスマナーの知識を習得する研修を行い、受講者からは「学生でなく社会人という自覚を持ち、あいさつや言葉遣いに注意して業務を行いたい。」「自分の行動が組織全体に影響することを意識していきたい。」といった感想がありました。

2日目は、本学の概要、ビジョン等を説明する講義が行われ、島田孝一法人本部長から、本学の財政やキャンパス再整備に関する説明に加え、努力することや仕事を楽しむことの大切さが伝えられました。また、羽生田正行病院長から、本院の理念と基本方針、優れた設備や災害対策についても説明があり、受講者からは「立地、建物も素晴らしい恵まれた環境の中、患者さんに最適な医療を提供できるよう精進していきたい。」「病院のローガンやコンセプトを理解することで、今後目指していくべき看護師像を考えることができた。」との感想がありました。

続いて、平成30年4月5日（木）には、事務職員9名、医療職員19名を対象に、「社会人」ではなく「プロフェ

ッショナルな組織人」への意識改革を目的とした研修「ディスカバリー」が実施されました。物の見方を変えるパラダイム転換や、責任感を高めるオーナーシップを学び、受講者からは「自分の価値観にとらわれず多角的に物事を見て、最適な判断をしていきたい。」「組織人としてプロ意識と責任感を持って仕事に臨みたい。」との感想がありました。

他職種合同の研修期間を終えた後、平成30年4月6日（金）・9日（月）・10日（火）の3日間にわたり、新規採用事務職員研修が実施されました。事務組織全体と各部門の役割や目標を理解し、電話対応や文書事務等の業務遂行に必要なスキルの学習を行いました。受講者からは「電話対応の難しさを実感した。しっかりと対応ができるよう努力していきたい。」「ビジネス文書の書き方を覚え、業務が始まったらすぐ活用できるようにしたい。」と振り返りのコメントがありました。

研修最終日には、管理職約20名の前でプレゼンテーションを行い、内定期間中からグループで取り組んだ「愛知医科大学・病院の特徴」と「愛知医科大学の職員として、どんな大学及び病院にしていきたいか」を発表し、最後に各自から決意表明が述べられました。

配属後の成長と活躍により、組織への貢献が期待されます。



病院の理念を説明する羽生田病院長



新人研修



決意表明をする新規採用事務職員8名の皆さん

## 講義概要（新規採用職員研修）

4月3日（火）職場の常識、ビジネスマナー

4月4日（水）大学の概要とビジョン、新規採用職員に期待すること

## 講義概要（新人研修「ディスカバリー」）

○「プロ意識」「目的・意義」「ソリューション」「ポテンシャル」を見出す

## 講義概要（新規採用事務職員研修）

○事務組織各部門の役割、機能及び目標  
○文書事務、電話対応、事務端末の取扱  
○グループ課題発表



## 朝日新聞社主催

## 羽生田正行病院長が朝日医療シンポジウムへ登壇

平成30年3月11日（日）午後2時からANAクラウンプラザホテルグランコート名古屋において、朝日新聞社主催「朝日医療シンポジウム～高齢化・災害大国日本東海の地域医療の可能性～」が開催されました。

本シンポジウムは、昨年に引き続いて開催され、基調講演とパネルディスカッションの二部制で行われました。後半のパネルディスカッションに本学から羽生田正行病院長が登壇し、名古屋市立大学、藤田保健衛生大学、岐阜大学の病院長とともに、地域医療に関する重要なテーマ「高齢化社会」、「災害医療」、「医療人の育成」の三つのテーマについて議論を深めました。

羽生田病院長からは、愛知県唯一の高度救命救急センターとして、近隣の病院と連携を取りながら最前線で高度な救急医療を担い、基幹災害拠点病院として、大規模災害時に備えた実践的な取り組み事例などについて話があり、本院の医師・看護師・医療スタッフが写真やイラストを使い、分かりやすく医療の解説をしている書籍にも触れながら話がありました。

また、教育面では、医学部・看護学部が協働し、コミ



学是を紹介する羽生田病院長

ュニケーション能力を養う講義やグローバル化に向けた留学プログラムの紹介があり、新たに制定した学是「具眼考究」の考え方についても解説されました。

シンポジウムには、名古屋市を始めとする多くの方の参加があり、参加された方々は皆真剣な表情で熱心に聞き入っていました。

## 男女共同参画プロジェクト委員会

## キャリア教育講演会開催

男女共同参画プロジェクト委員会の事業の一環として、平成30年2月20日（火）午後5時30分から大学本館205講義室において、「愛知医科大学キャリア教育講演会－これからの女性医師のキャリアアップ－」が開催されました。

本講演会は、医学生の時期から男女共同参画やワークライフバランスについて理解しておくことを目的としており、学生や教職員約20名の参加がありました。

当日は、本学医学部の卒業生で、現在本院で活躍されている女性医師の先生3名を講師に迎え、三部構成で行われました。

講演1では、『女性医師として働くということ』と題して、産科・婦人科の森井裕子助教（医員助教）から、特別短時間勤務を取得しながら、どのように仕事と育児に取り組まれたかについてお話し頂き、ご自身の経験を基に産休中の過ごし方や勉強方法などの紹介がありました。

講演2では、『働く女性医師をめざして』と題して、同科の岩崎愛助教から、出産経験を通して感じた子育ての楽しさや仕事との両立の大変さ、女性医師だからできること・求められることについてお話し頂き、どんな形であれ生涯医師を続けていくことが大切であると強調されました。

講演3では、『Let's 働き方改革 誠心誠意・創意と工夫でキャリアを紡ぐ～男女ともに「医師の総活躍社会」～』と題して、消化管内科の山本さゆり講師から、結婚・



学生の質問に答える3名の講師方

出産・開業などのライフイベントについて、ご自身の経験談を交えながら紹介がありました。特に子どもを育てながら医師として働く上で、日々学ぼうとする気持ちが大切であり、今後は学内で女性医師をサポートする環境づくりの整備にも貢献していきたいとお話し頂きました。

3名の講師からは、様々な経験談を交えてお話があり、聴講した学生にとって、医師としてのキャリアアップについて具体的にイメージすることができました。講演後の質疑応答では、産休中の過ごし方や子育てをする上で両親が共働きだった場合はどのようにすればよいかなどの質問があり、活発な意見交換が行われました。

最後に、男女共同参画プロジェクト委員会の若槻明彦委員長（副学長、産婦人科学講座・教授）から、本学における女性医師支援の現状について紹介がありました。



## 長久手市大学連携推進ビジョン4U完成 ～より密接な地域との関係構築を目指して～

愛知医科大学が位置する長久手市は、2017年度東洋経済新報社「住みよさランキング」において、800を超える都市の中でも、千葉県印西市、富山県砺波市に次ぐ第3位になりました。このランキングは、「安心度」、「利便度」、「快適度」、「富裕度」、「住居水準充実度」の公的統計を基に作成されており、長久手市は、昨年2位に続いてトップ3に入っています。

このように注目を集めている長久手市では、市内には異なる専門性を持つ四つの大学があり、長久手市と四大学が連携して「大学連携推進協議会」を開催し、住みよい町づくりを推進するための意見交換等を定期的に行っています。

平成29年度には、「長久手市大学連携基本計画」を策定することとなり、本学からは医学部シミュレーションセンターの川原千香子講師を選出し、メンバーとしての活動を行ってきました。本計画のコンセプトは、長久手市と大学、そして、四大学間の有機的な協働を掲げ、その成果が長久手市民、長久手市にある企業、そして長久手市に通う学生たちに届くことです。

協議会の活動としては、先進的な取り組みを行っている自治体の調査を始め、各大学が持ち回りで学生ワークショップの開催等を行いました。本学では、1回目のワークショップを担当し、本計画の目的共有をメインテーマとして活発な意見交換が行われ、その後も各大学でのワークショップを通じて、学生たちによる意見交換を経て、お互いの状況の理解を深めていきました。

そして、平成30年3月24日（土）長久手市福祉の家において、各大学の学生がそれぞれ長久手市に企画立案した内容を発表することを目的に「コラボ！逆指名大会」が開催されるとともに、完成した長久手市大学連携基本計画「長久手市大学連携推進ビジョン4U」が披露されました。

本学からは、「本学の学生が指導的役割を果たし、連携する各大学の学生を対象に災害トリアージ、心肺蘇生の学生リーダーの養成教育を行い、知識を身に付けた学



長久手市大学連携推進ビジョン 4U



### ビジョン冊子（本図はビジョン冊子表紙）

生が他の学生を指導し、正しい知識を普及させる」ことをテーマとして発表が行われました。

この活動モデルの確立により、災害トリアージや心肺蘇生法を医学生・看護学生が直接指導するだけでなく、各大学のリーダーが自ら心肺蘇生等を実践することで、より多くの学生が災害トリアージや心肺蘇生を学び、災害時や緊急時の対応がより円滑になることを目指したものと なっています。

この企画は、長久手市からも好評を頂いており、更には、他大学のボランティア企画とのコラボレーションも今後検討されています。

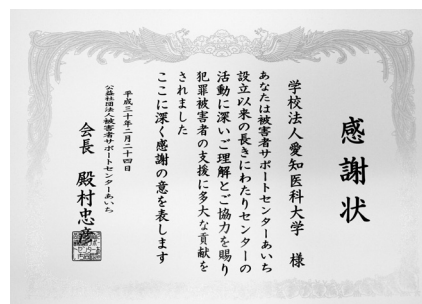
学生を引率した川原講師からは「医科大学ということもあり、なかなか近づきにくく、敷居の高い大学という印象を持たれている感じがありましたが、他の大学の学生たちとの交流を深め、専門性を理解しあう中で、本学の特色を伝えることができたと思います。これからもこの専門性を活かして、活動を推進していきたい。」と感想がありました。

本学では、これからも長久手市や連携大学との連携を深めて、医療教育の普及に貢献していきます。

## 被害者サポートセンター あいちから感謝状贈呈

平成10年2月に公益社団法人被害者サポートセンターあいち（あいポート）が設立されて以来、本学は犯罪被害者の支援活動を行っている同法人の設立趣旨に賛同し、賛助会員として入会をしています。これに伴い、平成30年2月24日付けで同法人の会長から長年にわたる本学の協力に対して、感謝状が贈呈されました。【写真】

本学では、総勢3千名を超える職員や学生が在籍しており、もしかしら犯罪や交通事故などに巻き込まれてしまうことがあるかもしれません。そういった被害に合わないことが重要ですが、被害に合われた方やご家族を支援し、サポートすることが大切です。



今後も、愛知医科大学は同法人の賛助会員として、啓発活動等に協力していきます。

# 教授就任インタビュー



放射線医学講座・教授

すずき こうじろう  
鈴木耕次郎

## — 教授就任に当たっての 抱負を聞かせてください。—

放射線科では、画像診断、放射線治療、IVR、核医学を4本柱として行っており、私はIVRと腹部領域の画像診断を専門としています。IVRは、画像診断装置で体の中を透かして見ながら、カテーテルや穿刺針などを体内に挿入する低侵襲な治療法で、血管病変、腫瘍性病変など様々な疾患を塞栓物質やステントなどで治療しています。愛知医科大学のIVRは全国レベルであり、今後もIVRの臨床、研究を更に発展させるように他施設で治療に難渋する症例も積極的に取り組んでいきます。CT、MRIなどの画像診断では、迅速で丁寧な読影を心がけ、画像から臨床で役立つ情報を最大限引き出した読影報告書を作成します。また、診断精度を上げる新たな撮影法の開発と新たな画像所見の発見に努めます。

学部教育、卒後教育において、画像診断はどの診療科にも関係しており、画像診断の基本的な考え方、異常所見の見つけ方、鑑別の進め方など、実臨床で役立つ知識と技術を身につけられるように心がけます。また、やる気のある若手の放射線科医を育成し、画像診断、放射線治療、IVR、核医学の全てで放射線科の総合力を向上させていきます。

放射線科は中央診療部門でもあり、診療各科との連携をより深め、チーム医療に一層の貢献をしたいと思っています。

今後も、愛知医科大学の更なる発展に貢献できるよう、教育、研究、診療に努力していきます。

## — 現在の研究分野に進まれた きっかけを教えてください。—

学生時代には、放射線科以外にも考えていた診療科がありました。しかしながら、研修医時代に放射線科の魅力を知り、放射線科に進むことを決めました。放射線科の魅力として、画像診断は特定の臓器、疾患に限らず全身の様々な疾患を画像から得られる情報を基にして病態、疾患を推測して診断することです。全身の疾患を診断できることは面白いと思います。直接患者さんと接する機会は他の診療科に比べると少ないですが、病院の縁の下の力持ち的な面白さもあります。また、学生時代に血管造影検査、カテーテル治療のことを習い、カテーテル治療は低侵襲でありながら、非常に治療効果の高い治療法と思っていました。学生時代から、特殊な技術を身につけたスペシャリストになりたいと思っていましたので、放射線科のIVRはそれに適した分野でした。

## — 学生へのメッセージをお願いします。—

私の専門であるIVRは、画像診断技術とカテーテルや塞栓物質、ステントグラフトなどの進歩により、学生時代には無かった新たな治療法が現在では一般的治療として行われています。医学は日々進歩しており、10年後、20年後には劇的に変化していることが稀ではありません。医学は全く飽きることがなく、常に勉強が必要ですが、やり甲斐のある仕事です。将来どの領域に進もうとも、皆さんには明るい未来が待っています。そのためには現在できることを精一杯することが重要で、勉学に励み国家試験をクリアすることが必要です。また、勉学に加えて、部活や学外活動など学生時代にしかできないことも多く経験してください。多くの友人を作り、コミュニケーション能力を高め、色々な観点から物事を考える力を養うことも大切です。学生時代にしか経験できないことも多くあり、学生時代を満喫して欲しいと思います。

オフショット



長野県のスキー場にて



リハビリテーション科・教授

きむら しんや  
木村 伸也

— 教授就任に当たっての  
抱負を聞かせてください。—

リハビリテーション医学は、社会参加（人生）と活動（生活）に直接働きかけ、最大限の向上を目指す専門的な技術の体系です。脳卒中、運動器疾患に加えて、現在は呼吸・循環器疾患、術後廃用症候群、がんなどを対象とし、急性期医療と並行して早期から関与することが重視されています。リハビリテーション科専門医は、これら多様な疾患を対象として、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、看護師、介護福祉士、義肢装具士、医療ソーシャルワーカーなど専門職と協働し、その先頭に立って治療を行います。

超高齢化社会を迎えた現在、愛知医科大学病院においてもリハビリテーションを必要とする患者さんが急速に増えています。それに呼応して、リハビリテーションセンターの技士が大幅に増員され、平成26年5月の新病院開設以後、年間の新規受診患者数が毎年10%以上増加してきました。

このような状況の下、リハビリテーション科での私の最大の任務は、卒前・卒後教育においてリハビリテーション医学の教育を充実させ、特に新専門医制度で本学と連携施設において専門医・指導医を養成し、愛知医科大学を拠点とした地域のリハビリテーションを担っていく人材を生み出すことです。研究面では、急性期からの廃用症候群予防法、リハ・介護連携による活動向上プログラム、ロボット技術の臨床活用法の開発・研究などを進めていきます。

学内外の皆さまからのご助言・ご指導をよろしくお願い申し上げます。

— 現在の研究分野に進まれた  
きっかけを教えてください。—

医学部在学中であった1980年にWHO（世界保健機関）が発表した国際障害分類（ICIDH）（試案）に出会ったことが最も大きなきっかけです。日本でのICIDH普及啓発の中心であった上田敏先生（東京大学リハビリテーション部、元教授）の著書などから、障害の医学としてのリハビリテーション医学を知りました。以来、患者の生活を直接の対象とするリハビリテーションに魅力を覚え、東京大学での研修を経て専門医となり、脳卒中、神経・筋疾患、がんなどのリハビリテーション技術、障害構造論に基づく目標指向的アプローチなどを研究してきました。

2001年にICIDHが国際生活機能分類（ICF）へと改定され、目標指向的アプローチは、現在の医療・リハビリテーション・介護・福祉において標準的手法となっています。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

「リハビリテーション＝機能回復訓練」と思われがちですが、これは日本に根強い大きな誤解です。リハビリテーション医学は、疾患治療に留まらず、生活機能全体の回復・向上を目指す医学であり、疾患と生活機能・障害の双方を知る専門医の存在が欠かせません。

また、リハビリテーション分野では、本学を含め全国の病院・研究機関などで女性専門医が多く活躍していることも特徴です。

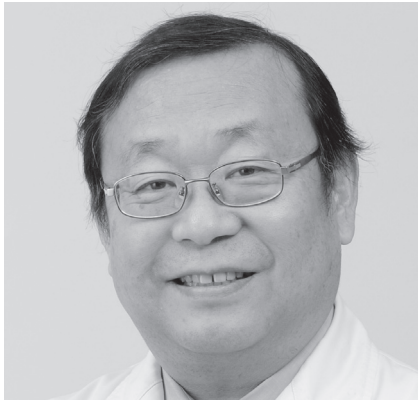
抱負で述べましたようにリハビリテーションの必要性が大きくなってきているにも関わらず、リハビリテーション科専門医はまだ不足しています。学生の皆さんにリハビリテーション医学の魅力を知って頂き、一人でも多くの医師が専門医を目指してくださいよう心から願っています。

オフショット



6年前から自転車で通勤し、休日はポタリングです。





メディカルクリニック・教授

ばば けんじ  
馬場 研二

— 教授就任に当たっての  
抱負を聞かせてください。—

愛知医科大学メディカルクリニックは、昭和58年（1983年）に開設され、今年で35年目になります。内科学講座の教授がメディカルクリニック長を兼任していた過去から、ここ15年ほどはメディカルクリニック専任のポストが設けられ、そこでの教授（特任）がクリニック長となっていました。今回初めてこの部署での教授ポストが設置され、私とその任を拝命いたしました。

これはすなわち、メディカルクリニックが診療だけでなく、大学院を含む、教育・研究の面においても、更なる活動が期待されるようになったことであり、大変名誉であるとともに責任の重さを噛みしめています。とは言え、やはり当面の課題は、メディカルクリニックにより多くの患者さんが来て頂けるような診療施設としての充実・活性化です。しかし、診療の活性化と医学研究の活動は、実は決して無縁ではなく、むしろ密接に絡み合っているとさえ言えると思います。したがって、私自身がこれまで取り組んできました呼吸器病学の臨床・研究の経験を生かし、他の分野の先生方とも協力しながら、患者さんのニーズに十分対応し、かつメディカルクリニックでしかできないような特色を打ち出していきたいと考えています。

— 現在の研究分野に進まれた  
きっかけを教えてください。—

私が医学部を卒業した頃は、循環器内科や消化器内科に人気がありました。私は逆に、皆があまり行かない領域へ行こうと思っていました。当時の呼吸器診療は、内視鏡を行う件数も極めて少なく、地味さが際立っていました。しかし、呼吸器診療は、感染症、重症呼吸管理、免疫・アレルギー、悪性腫瘍といったあらゆる疾病や病態に関わるとても幅広いものであると研修医の時に感じました。更に呼吸器の症状には呼吸困難を伴うことが多く、これが実際の治療によって速やかに症状が改善すると患者さんからはとても喜ばれました。こうした駆け出しの頃の経験が呼吸器科医としてやっていこうと決めた理由です。30年以上経った今でもその感覚は変わらず、呼吸器病学の大いなる進歩とともにその興味はますます深くなっています。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

学生時代は色々なものにチャレンジしながら、思いっきり楽しんでください。しかし、勉強はしっかりしてください。覚えることが多くて大変だと思いますが、例えば「この疾患の時はこの症状」と短絡的に覚えるのではなく、「なぜそのような症状が出るのか?」、「なぜこのような検査異常が出るのか?」といった、いわゆる病態生理を常に考えながら勉強してってください。こういう考え方の習慣は、医師になってからとても大事になります。

もう一つ「進路」についてですが、医学はどの分野もとても面白く、極論を言えば、どの分野も自分の人生をかけて損はありません。尊敬できる先輩や師に出会えば、なお素晴らしいし、そうした観点から自分の進む道を決めても良いくらいです。

これからの明るい未来へ向かって、全力で進んで行って欲しいと思っています。



あいち航空ミュージアムにて

# 新入学生ガイダンス実施

平成30年度入学生を対象としたガイダンスが、医学部は4月4日（水）・9日（月）、看護学部は4月3日（火）～6日（金）・9日（月）に実施されました。各新入生からは、入学の喜びの表情が溢れていましたが、ガイダンスが進むにつれて、これから始まる大学生活への真剣なまなざしが見受けられました。

## ◆ 医学部ガイダンス概要

日	時間	内 容
四月四日 (水)	9:00	医学部のカリキュラムについて ・1学年次のカリキュラムについて ・6年間のカリキュラムについて ・進級上の留意事項について
	10:30	授業、試験等の教務関係について
	13:00	国際交流に関する説明
	13:30	学生生活について
四月五日 (木)	14:00	合宿研修説明 実習衣採寸・注文 実習用ズボン採寸・注文 聴診器注文
		合宿研修
四月六日 (金)		学生証配布、ロッカー案内 教科書販売
四月九日 (月)	10:00	基礎科学ガイダンス
	10:20	学生相談室紹介
	10:30	防犯講習会 ・防犯講話 ・防犯実技 ・薬物講話
	13:00	ハラスメント防止講習会
	14:00	健康診断
	16:00	SNS講演会

## ◆ 看護学部ガイダンス概要

日	時間	内 容
四月三日 (火)	11:00	看護学部長あいさつ
	11:10	教員紹介
	11:30	クラブアンケート
	11:40	集合写真撮影
四月四日 (水)	9:00	教務関係オリエンテーションⅠ (学則、履修規程、学習方法等)
	10:40	教務関係オリエンテーションⅡ
	13:00	教務関係オリエンテーションⅢ
	14:00	救命講習及び新入生研修 Ⅰ・Ⅱの概要説明
	14:20	事務手続き及び連絡等
	15:00	総合学術情報センター利用講習会 学務情報システム説明
四月五日 (木)	9:30	学生生活関係オリエンテーションⅠ
	10:00	学生生活関係オリエンテーションⅡ (災害対策含む)
	11:10	傷害・賠償保険等の説明 救命講習
	13:00	看護学部生として習得しておくべき心肺 蘇生術
	15:20	事務手続き及び連絡等
	15:50	健康管理
四月六日 (金)	9:00	新入生研修Ⅰ 大学生としてのマナー 新入生研修Ⅱ 保健衛生・感染症について
	12:00	アドバイザーとの懇親会
	13:00	キャンパスツアー 上級生との交流会
	9:00	抗体価検査とワクチン接種の説明
四月九日 (月)	10:20	学生相談室紹介 防犯講習会 ・防犯講話 ・防犯実技 ・薬物講話
	10:30	防犯講習会 ・防犯講話 ・防犯実技 ・薬物講話
	13:00	ハラスメント防止講習会
	14:00	施設紹介 ・愛知医科大学愛恵会等
	14:20	施設紹介 ・運動療育センター
	14:50	施設紹介 ・運動療育センター
	16:00	SNS講演会
	17:30	安否確認システム説明



# 大学生としてのマナーを身に付けよう 新入生研修実施

本学では、医学部・看護学部ともに新入生を対象に、大学生としての基本的なマナーを学び、医療人としての心構えを身に付けることを目的として、毎年4月に新入生を対象とした研修会をカリキュラムに導入しています。

## 医学部 プロフェッショナリズム1a (合宿研修)

医学部では、平成30年4月5日(木)・6日(金)の一泊二日で三河湾リゾートリンクス(愛知県西尾市)において、1学年次の授業科目「プロフェッショナリズム1a」の一環として、医学生としての品位や品格、自ら学ぶ姿勢を身につけ、集団行動を通して、実践をためらう心理的抵抗(自分の殻)を打ち破り、これからの学生生活を円滑に過ごす基礎を築くことを目的とした新入生合宿研修を実施しました。【写真】

研修は、若槻明彦医学部長のあいさつに始まり、佐藤啓二学長からは「医学生の心構えと大学の使命」について説明がありました。続いて、本学卒業生であり医学教育センター・副センター長の早稲田勝久教授(特任)及び青木瑠里講師による「先輩からのメッセージ」の講演後、三宅養三理事長から「本学の歴史・使命・教育理念」について講演がありました。その後、医学教育センター長の伴信太郎特命教授から「医師としての将来像」の講演後、本学の臨床医学講座の教授3名による、各講座・診療科の内容や特色について講演する「愛知医科大学臨床系教授からのメッセージ」が行われました。立食形式の夕食では、医学部長を始め、基礎科学、基礎医学、臨床医学の教員と学生との距離を縮める良いきっかけとなりました。また、両日を通し学生のコミュニケーション能力やチーム力を高めることを目的とした、コミュニケーション演習を行い、最後に演習の集大成として、チーム名、その由来、なりたい医師像、今後の学修課題について発表し合い、医学生としての決意を新たにしました。合宿の締めは、石橋宏之医学部教務部長のシュプレヒコールで参加者全員身を引き締めて、無事に合宿を終えました。



## 看護学部 新入生研修

看護学部では、平成30年4月6日(金)体育館において、大学生として学習に臨む姿勢や態度、マナーなどを学ぶとともに、同級生、上級生、教員との交流を図ることを目的とした新入生研修が実施されました。【写真】

新入生は、山本弘江准教授や長崎由紀子准教授から「大学生としてのマナーについて」及び「保健衛生・感染症」などの講話を熱心に聞いた後、アドバイザーごとに分かれて、昼食をとりながらの懇談会に臨みました。

新入生たちは、アドバイザーの教員とは初対面であり、当初緊張した様子が伺われましたが、時間が経つにつれ、笑い声が聞かれ和やかなひとときとなりました。

午後からは、キャンパスツアーとして、上級生とともに大学構内を見学し、学内の各施設について多くを知ることができました。その後、体育館に戻り、担当教員から愛知医科大学〇×クイズや看護学部での勉強のススメなどの説明がありました。

最後に、上級生による学生間の交流会が開かれ、貴重な情報を得る機会となりました。新入生にとっては、これからの学生生活を送る上で、非常に有意義な一日となりました。





## 篤志献体者に 文部科学大臣から感謝状贈呈

本学の解剖学教育のために献体頂いた次の方々に対し、文部科学大臣から感謝状が贈呈されました。  
なお、感謝状の贈呈は、献体者のご遺族が受領を希望された方です。

井上 清次 殿	伊佐治 武 殿	伊藤 武史 殿	石井 一成 殿	石田 悟郎 殿
岩谷登美子 殿	加藤 國一 殿	神谷 澄夫 殿	川瀬すま子 殿	小西 道子 殿
小林 太 殿	齋藤 元子 殿	酒井 錫枝 殿	柴田 政弘 殿	清水 悦美 殿
志水 孝 殿	志水 満歳 殿	杉田フミコ 殿	杉村 正 殿	名和 月子 殿
野々村由子 殿	星野 きよ 殿	前田 育子 殿	松井 敏子 殿	松村 幸子 殿
松原 嘉利 殿	三上多美子 殿	蓑毛 逸子 殿	吉田 健 殿	渡邊 東一 殿

(以上 五十音順)

## 平成29年度実験動物慰霊祭挙行

平成29年度医学部実験動物慰霊祭が、平成30年3月7日（水）午後1時30分から実験動物供養塔前において厳かに執り行われ、医学の教育・研究の発展のための礎となった諸動物の冥福を祈りました。

慰霊祭では、初めに本学の医学研究のために貢献した動物の諸霊に対し参加者全員で黙祷が捧げられました。引き続いて、岡田尚志郎医学部長から、瞑目した諸動物に対して、その尊い献身に感謝するとともに慰霊の辞として、医学研究の発展のため尊い犠牲となった動物たちの霊に哀悼の意を表し、今後とも動物愛護の精神に基づき、更に実験動物の愛護に努めることを誓いました。

その後、佐藤啓二学長、佐藤元彦総合医学研究機構長、奥村正直動物実験部門長に続いて、日頃動物実験や飼育に携わっている教職員や学生一人ひとりから白いカーネ



哀悼の辞を述べる岡田医学部長

ーションの花が献花台に捧げられ、諸動物の冥福を祈りました。

## 防犯講習会・ハラスメント防止講演会開催

平成30年4月10日（火）午前10時30分から大学本館たちばなホールにおいて、医学部及び看護学部の新入生219名を対象に、愛知警察署生活安全課生活安全係巡査長の三浦佑紀氏を講師に迎え、防犯講習会が開催されました。

三浦講師からは、愛知県内では侵入盗、交通死亡事故、特殊詐欺が多く発生しており、特に自動車事故を起こしてしまった時の対応については、慎重に行ってほしいとの説明がありました。引き続き、サイバー犯罪に関するDVD「～その指先が導く危険～晒される個人情報、リベンジボロボロの危険」を鑑賞しました。

続いて、午後1時から、21世紀職業財団客員講師の新

美智美氏を講師に迎え、ハラスメント防止の講演会が開催されました。

新美講師からは、大学におけるキャンパスハラスメントを中心とした基礎的な知識、ハラスメントの被害にあって時の対処法や予防などについて、事例に基づき詳細に説明がありました。また、気軽に相談ができる教員や友人を持つことが大切で、そのためには日頃から良好な人間関係を築いておくことが重要であると強調されました。

この講演会で得た知識を活用して、ハラスメントのない大学生活を送ってくれることを期待します。

## 交通安全講習会開催

平成30年4月24日（火）午後5時40分から大学本館ちばなホールにおいて、愛知警察署交通課総務係警部補の山本憲一郎氏を講師に迎え、医学部・看護学部の学生を対象とした交通安全講習会が開催されました。

講師からは、交通事故の多くが交差点で発生していること、信号のない交差点では必ず一旦停止をして左右確認を行うこと、また、信号のある交差点では、黄色信号

でブレーキを踏むかアクセルを踏むかによって人生が大きく変わる可能性があること等について講和があり、引き続き、鑑賞したDVDでは、事故映像から危険の予測・回避を学びました。

受講した学生292名にとって、この交通安全講習会を通じ、交通安全に対する意識を常に高く保ち、一人ひとりが交通安全に努めてくれることを期待します。

## 寄附講座紹介講演会開催

平成30年3月20日（火）大学本館202講義室において、寄附講座紹介講演会が開催されました。

本講演会は、平成29年4月1日付けで医学部に新設された二つの寄附講座の概要、設置目的、教育・研究等の基本方針及び抱負などを学内外に広く周知することを目的として開催され、学内外から多数の方の参加がありました。

講演者及び講演内容は次のとおりです。



萩原准教授

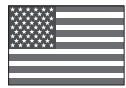


青野講師

講演者		講演内容
講座名	氏名	
分子疫学・疾病制御学寄附講座	萩原真生 准教授	本講座において、消化管感染症における常在細菌叢のメタゲノム解析を実施した結果とその成果から得られた細菌叢の破綻の改善を目的とした新たな疾病制御法の開発に関する新たな知見について
疼痛データマネジメント寄附講座	青野修一 講師	本講座が取り組む、多種多様な疼痛患者データや集学的診療チームが持つ診療情報の収集・集約（疼痛データバンク構築）と学際的領域（医学と工学の連携）によるデータの利活用について

\* 講演順

## 国際交流



### 米国バーモント大学 (University of Vermont) と 学術国際交流協定を締結

本学では、学術交流の推進を目指し、平成29年11月に米国バーモント大学と大学間での学術国際交流協定を締結しました。

協定の内容は、学生・研究者の交流、共同で行う研究等の協力活動等となっており、まずは医学部学生の交流を中心とするプログラムの立案に向け、同大学医学部の担当教員と渡辺秀人国際交流センター長との間で調整を重ねました。その甲斐あって、同プログラム実施が早くも実現し、平成30年4月には同大学医学部から2名の学生が本学医学部において研修を行いました。

本協定の締結については、本院病理診断科の都築豊徳教授が長年にわたり同大学の担当教員と友好関係を構築されており、締結の橋渡しに貢献頂きました。

今後は、更なる国際交流の充実化に積極的に取り組み、多様な異文化に触れる機会を設け、本学の国際化の促進に貢献できる大学となるように努めていきます。



バーモント州バーリントン市にキャンパスを置く州立大学  
ノーベル賞受賞者などを輩出しています。



### ケース・ウェスタン・リザーブ大学教員招聘

看護学部では、平成30年2月20日（火）から2月25日（日）までの日程で、学術交流協定締結校のケース・ウェスタン・リザーブ大学（米国オハイオ州）から、Amy Bieda氏（看護学部学士課程ディレクター）とLatina Brooks氏（大学院看護学研究科修士課程ディレクター）を招聘し、相互の交流を図りました。

今回の招聘では、教員を始め、看護職員や学生を対象とした講演会が開催され、「超低出生体重児のケア：ゴールデンアワー」と「ファミリー・ナースプラクティショナーの教育と実践」の2つのテーマで講演がありました。また、教員との交流セッションでは、「子を持つ母親のメンタルヘルス」をテーマに意見交換を行うとともに、本院及び名古屋市子ども・子育て支援センターの視察を行いました。

ケース・ウェスタン・リザーブ大学と本学とは、教員の相互派遣や学生の短期留学を実施しており、今後の学術交流の発展に向けて大変有意義な招聘となりました。



理事長表敬訪問



学長表敬訪問



## 看護学部一日体験入学開催

平成30年3月23日（金）近隣の高校生を対象として、看護学部における講義の実際を体験することで、大学で看護学を学ぶことへの関心を深めて頂くことを目的として、看護学部一日体験入学が開催されました。

当日は、54名の高校生が参加し、午前中の体験授業では、「健康の知識を集団に伝える技術」をテーマに行われ、参加した高校生たちは緊張する中で真剣に聞き入っていました。

体験演習では、「野菜を食べる必要性をグループで伝えあおう」をテーマに野菜とそれ以外の区別や、日本国内での野菜摂取量の県別順位（愛知県が最下位）などを学び、野菜を食べる必要性をグループ毎に模造紙に描いて発表し、それに対する講評を行いました。

昼食は、アシスタントを務める看護学部生と歓談しながら交流を深め、午後からはドクターヘリ、ドクターカーを見学しました。

参加した高校生からは「知らないことを聞くことができたので良かった。」「グループでの発表がとても楽しかった!」「ボランティアの学生さんとお話しできるのがとても良かった。」「同じ夢を持つ仲間と話をして、



高校生たちは野菜を食べる必要性について話し合いました

更に看護の学問を学ぶ意欲が向上した。」「ドクターカーやドクターヘリに乗ることができて、とてもうれしかったです。」などの感想が寄せられ、参加した高校生にとっては貴重な体験を通してとても有意義で充実した一日となりました。

## 平成30年度SNS講演会開催 ～被害者・加害者にならないために～

平成30年4月9日（月）午後4時30分から大学本館ちばなホールにおいて、医学部及び看護学部の新入学生を対象として、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）活用の際に知っておくべきモラルやリスクについて学び、被害者にならないことはもちろんのこと、誤った使い方により加害者にもならないことを目的とした講演会が行われました。

昨年度に引き続き、浜松学院大学短期大学部の今井昌

彦教授を講師にお迎えし、学生にとって身近な事例を用いながら、SNSの持つリスクを分かりやすく解説頂きました。安易にSNSに投稿して被害が拡大していくことや写真などからも個人情報が漏れていく恐ろしさの中で、どのように関わっていくことが大切なのかを考える機会となりました。

聴講した学生からは、SNSの持つリスクについての貴重な学びを得たという感想が数多く寄せられました。



## 平成30年度看護学部臨床教授等辞令交付式

平成30年4月25日（水）午前9時から看護部管理室において、平成30年度看護学部臨床教授等辞令交付式が行われました。今年度は、臨床教授4名、臨床准教授4名、臨床講師5名が選考され、坂本真理子看護学部長から辞令が交付されました。

看護学部では、平成20年4月から臨床教授制を導入しており、これは臨床教育の指導体制の充実を図ることを目的とした教育制度です。

本制度においては、豊富な臨地実習指導経験と優れた看護実践能力及び教育能力を持つ看護職員に臨床教授等の称号を授与し、看護学部の教員とともに、学生の指導を行って頂きます。学生にとっては、丁寧な実習指導が受けられることはもちろんのこと、将来の目指す看護師像が明確になる機会になっています。今年度も平成29年度看護学部卒業生の約3分の2が本院に就職したことは、看護学部と看護部との一貫した教育体制の成果であ



看護学部教員と臨床教授等の称号を授与された看護部の皆さん

ると思われま

す。看護学部では、今後も看護部と連携・協働し、豊かな人間性と確かな看護実践能力を備えた看護職者の育成を進めます。

## 馬場昌子名誉教授を偲ぶ会開催

平成30年2月10日（土）午後1時30分から大学本館たちばなホールにおいて、昨年10月2日にご逝去された「馬場昌子名誉教授を偲ぶ会」を本学看護学部の教職員により実行委員会が結成され、開催されました。【写真】

馬場先生は、平成10年に愛知医科大学参与として着任し、準備室長として看護学部設置に尽力され、平成12年4月の看護学部開設時から成人看護学の教授として、創設間もない看護学部の礎を築かれました。また、長年にわたりターミナルケアの教育及び研究に従事され、日本のターミナルケアの普及と質の向上に大きく貢献されました。社会活動としては、医療従事者及び市民に呼びかけ、ホスピス病棟の開設や病棟ボランティアの育成に貢献され、この功績から平成2年に愛知県知事賞を受賞されました。

偲ぶ会の当日は、150名を超える関係者の方々が参列される中、献花から始まり、馬場先生との思い出のスライドが紹介されました。その後、関係者の方々から感謝



の言葉が寄せられ、ご家族のあいさつと歌と演奏が披露され、午後2時40分頃つつがなく終了しました。

閉会後には、レストランオレンジに会場を移して懇親会が開催され、馬場先生との思い出話に花が咲き、とても和やかなものとなりました。

## 医学部学外体験実習体験記

愛知県内の心身障害者施設にご協力頂き、2月5日（月）から2月16日（金）にかけて医学部2学年次生が学外体験実習を行いました。心身障害者の人たちと接する初めての体験は、医学生に大きなインパクトを与えたようです。実習を終えた学生の感想文を紹介します。

### 医師としての心構え

実習施設：東名古屋病院  
2学年次生 小野 秀

今回私は、初めて愛知医科大学病院以外の施設を見学させて頂きました。今まで愛知医科大学病院の体験実習では関わるのできなかった、歩けない、話せない患者さんと関わる事ができたことがとても貴重な経験になりました。

スヌーズレン療法であったり、施設の養護学校を見学させて頂いたり、その病院だからこそできる貴重な体験ができたことが本当に良かったです。

実習の始め、小児科医の先生から重症心身障害者についての説明を受けたとき、その先生がこの治療は患者さんを治療して、社会復帰させるためにやっているものではないということをおっしゃっていました。このような患者さんの治療には一人当たり数千万円という治療費がかかり、その治療費を負担しているのは国であるということでした。そのことを聞いた私は、これらの人にお金を回すよりも、もっと貧しい国にお金を寄付して、世界的な教育水準を上げたりしたほうがいいのではという議論があることに少し納得しました。

いざ病棟に移動して、患者さんと関わる医師の先生を最初に見たとき、私は感動したことを覚えています。私は小児科の武藤先生について実習をしました。武藤先生は、重症心身障害者一人ひとりに、まるで言葉を彼らが理解しているかのように話しかけ、コミュニケーションを図っていました。まず、その姿に私は、どこか武藤先生の医師としての強さを感じました。40人くらいの受け持ち患者さんに一人ひとりの人間性を理解しているかのように話しかけていました。

午後、私は養護学校の見学もさせて頂きましたが、話せない、歩けない患者さんを相手にしており、ほとんど

介助を行っていました。介助を行った上でも、何かしらのアクションを患者さんが起こせば、養護学校の先生や看護師はとても大きなりアクションで対応していました。私は、何とも言えない感情になりましたが、患者さんと一日関わるだけで、その患者さん一人ひとりの個性が見えます。とてもじゃないが治療を止めて、他のものに手を回すなど言えません。私は、将来小児科医になりたい。医師としての治療だけではなく、一人の大人として教育にも携わっていきたいとは考えているが、こういうところで働くことは考えたこともありませんでした。このような場所で、私が将来働いたときに、先ほど挙げた疑問点を調和させることはおろか、私が今学んでいる医療にも自信が持てなくなるであろうと思います。私が今まで身近に感じたことのない医療を目の前にして、医療についての奥深さ、様々な医療があることを考えさせられました。

しかし、すべては武藤先生への質疑応答で変わることができました。私が、小児科医としてこの問題をうまく調和することができるであろうかとお伺いした際に、武藤先生はこう答えられました。「人の人生って輝かしくあるべきだと思う。そうあるべき人生だし、その過程を私たちが精いっぱいサポートしているだけ。」

私は、本当に感動しました。今まで聞いた医師の言葉の中で、一番感動しました。この言葉は私の胸に深く刻まれ、一生忘れることはないであろう。実習を通して、武藤先生に出会えてよかった。私に医師として忘れてはいけない心構えを教えてください、本当にありがとうございました。



# ケース・ウェスタン・リザーブ大学短期留学体験記

看護学部では、米国ケース・ウェスタン・リザーブ大学フランシス・ペイン・ボルトン看護学部と教員・学生の交流を含む包括的な相互交流を行っています。平成30年3月に、看護学部生5名が留学しました。短期留学を終えた学生の体験記をご紹介します。

## Case Western Reserve University 短期留学での学び

看護学部4学年次生 市野 李佳, 柏原 彩乃, 盛田 さやか, 森部 咲貴, 安井 あいか  
(留学時は3学年次生)

平成30年3月17日(土)から26日(月)までの10日間にわたり、私たち3学年次生5名は、アメリカ合衆国オハイオ州にあるケース・ウェスタン・リザーブ大学(CWRU)フランシス・ペイン・ボルトン看護学部での短期留学に参加しました。

CWRU看護学部の学生と一緒に、講義・演習だけでなく大学病院での実習も含め、様々な学年のカリキュラムに参加させて頂き、本学看護学部のカリキュラムとの違いや、演習などの進め方の違い、学生の反応などをよく知ることができました。

まず、教員と学生が相互的なやり取りをしており、一緒に授業を作っていると感じました。初日、成人看護援助論の脳神経系の解剖生理の授業では、先生が脳を模したケーキを作って持参し、学生は食べながら授業を受けており驚きでした。日本では、授業は受動的に聞くというのが一般的ですが、アメリカでは、学生が主体的かつ積極的に質問したり、自分の意見を伝えている姿は見習うべきであると思いました。CWRUは、アメリカでも他の大学に比べ先進的に看護を学べるところだと聞きました。講義、演習、実習がサイクルとなり、理論と実践を関連付けて学べる教育システムが特徴とされ、1年生であっても学生が自信をもって実習に臨んでいるのが印象的でした。3年生にもなると医療チームの一員として扱われており、教員も学生をリスペクトしていました。自分と同じ学年とは思えないほど堂々として、のびのびと実習をしている姿が印象的でした。日本での実習でも、もっと自分の知識と技術に自信を持ち、意見を述べ有意義な実習にできるようにしていきたいと思いました。

今まで、日本以外の国の医療に触れる機会がなかったので、アメリカのがんセンター、小児病院、ホスピス、高齢者施設などたくさんの施設見学を経て、アメリカの患者のニーズを中心とした医療を実践していることにとっても驚きました。病院の建築に対するコンセプトや規模の大きさ、患者のニーズを実現するための工夫は想像を超えるものでした。色使いや光、空間の使い方は施設それぞれの個性があり、日本とは対照的であると思いました。日本では、白を基調とした造りが多く、どの施設も似たような感じがします。日本の病院を当たり前と捉えるのではなく、一例として捉え、環境が患者に与える影響についてもっと深く考えていきたいと思えます。

CWRUでは、大学の理念「Think Beyond Possible」に基づき、想像力豊かな学生の育成を目指しており、Think[box]では、パソコンでデザインし、機械を使って自由に物作りをすることができます。また、Hololensは、ゴーグルをかけるとプログラムされたものが立体的に見えるレンズで、例えば、脳に腫瘍があると、どの神経を阻害するか、その神経の支配領域はどこまでなのかを立体図形で見ることができ、形態機能学を学ぶ優れた方法と思いました。

今回の留学は、アメリカの看護や医療に触れる貴重な機会となりました。同じ看護・医療といっても、国が違えば価値観や考え方、やり方が違い、看護・医療も異なるものでした。国によって、看護・医療がこんなにも違うことを知るきっかけになり、世界のいろいろな国々の医療がどのようになっているのかも知りたいと思いました。

今後、アメリカ留学で学んだことを実習で活かしていきたいと同時に、世界の看護や医療の現状についても考えていきたいと思えます。今回の留学に際し、お世話になりましたCWRUの先生方、各施設の方々、学生さん、そして、愛知医科大学の先生、事務の方々に感謝いたします。



基礎看護実習



ワクチン接種演習

## 定年退職教授最終講義

今年3月で定年を迎えられた6名の教授の最終講義が大学本館たちばなホール及び看護学部棟N301講義室において行われました。長年にわたり本学の発展に多大なる貢献をして頂き、また、本学の医学・看護学教育に対しご尽力くださいました先生方の講義には、多数の方が聴講に訪れました。ここに、先生方の最終講義の様子についてご紹介いたします。

### 災害医療研究センター

中川 隆 教授 1月15日（月）

#### 【災害と医療】

中川先生は、平成12年4月にご着任以来、医学部学生を対象とした講義や臨床実習など、大変な熱意を持って教育指導に当たってこられました。特に、災害医療総論では、医学部1・2学年生を対象に講義され、医療人として災害医療に関わる重要性を提唱してこられました。

また、救命救急科・教授、救命救急センター・部長、副院長、災害医療研究センター長等の役職に就かれ、病院での救命救急、災害医療等の発展に手腕を振るわれました。

一方で、学外においては、愛知県や名古屋市の救急医療体制の構築に尽力されるなど多くの社会貢献が認められ、平成29年9月には、防災功労者内閣総理大臣表彰を受賞されています。

最終講義では、ご自身の学生時代に、麻酔科・集中治療のトップランナーであった青地修先生に心酔されたことが集中治療や救急等の分野に進むきっかけになったこと、また、阪神淡路大震災を始め、いくつもの災害現場から学んだ教訓や将来起こるであろう災害に備えた医療体制や本学の役割、救急・災害医療教育などについて、多くの写真や資料・データを用いて詳しく講義頂きました。

### 化学

小島 貞男 教授 2月26日（月）

#### 【化学と放射性同位体】

小島先生は、昭和63年4月に核医学センターにご着任以来、医学部学生に対する講義・実習において、大変な熱意をもって教育指導に当たってこられました。着任当初は、核医学センター利用研究者への放射線安全管理講習を担当され、近年は、初年次医科学セミナーや基礎科学プレチュートリアル等の講義を始め、基礎科学部門教員として1学年次生の教育を担当され、現在まで医用化学講義・実験の科目責任者として精力的に教育に取り組まれてきました。

一方、平成16年度から19年度、平成23年度から現在までの通算12年間（6期）にわたり、教務委員会委員として、また、平成23年度から27年度は、教務部次長として、医学教育の改革・改善を始め、多くの懸案事項の解決に向けて大変なご尽力を頂きました。加えて、平成8年度から現在まで、入学者選抜入試問題作成及び採点委員（化学）としても、手腕を振るわれてきました。

最終講義では、核医学センター、総合医学研究機構核医学実験部門での活動内容を始め、現職着任時に、化学実験や講義の内容を見直しされたことについてお話を頂きました。また、専門分野である「環境中に存在する微量放射性核種の生成核反応と分布・挙動」について、チェルノブイリ原子力発電所事故や東京電力原子力発電所（福島県）事故など、幾多の事故で環境中に放出された



た。これは、先生が挙げてこられた業績を伺い知ることができる興味深いものでした。

講義の最後には、愛知医科大学は救急災害医療のトップクラスを誇る災害拠点病院、高度救命救急センターとしての役割を担ってほしいと述べられるとともに、災害医療研究センターを始め、今まで関わってこられた多くの皆さまへの感謝の意を表され、災害のルール「備えあれば憂いなしするのは失敗、何もしないのは大失敗」という言葉とともに、講義を終えられました。



放射性物質や放射線測定法、放射化学分離により定量した土壌試料内の放射性核種の濃度や原子炉内での放射能蓄積量と半減期との関係等について解説されました。講義の終盤には、放射性物質を計測・分析し続けることは、測定していない物質の推定放出量を予測することができることなど、先生が長年研究されてきたことについてお話頂きました。

最後に、福島第一原子力発電所事故では、未だに放射能の影響が残っており、除染作業や原子炉内に核燃料を処理するにはまだずいぶんと時間がかかるが、注視していきたいとの見解とともに、今後も長年の研究テーマへの興味が尽きないとお話され、講義を終えられました。



## 放射線医学講座

石口 恒男 教授 2月28日(水)

### 【標準医療を変えた放射線医学の進歩】

石口先生は、平成13年4月に放射線医学講座にご着任以来、診療、医学教育、研究面で大変な熱意を持って本学及び放射線医学講座の発展に尽力されました。また、平成18年4月から22年3月まで、医学部附属核医学センター長、平成15年4月から現在まで、本院中央放射線部・部長、平成23年4月から現在まで、副院長、新病院建設委員会副委員長、電子カルテ関連専門委員会委員長、CD病棟改修検討委員会委員長などの役職に就かれ、大学病院の運営と発展に貢献されました。

また、長年にわたって放射線医学の分野で画像診断、IVR及び医療放射線防護等の研究に従われ、国内外の学会等で精力的な活動を行ってこられました。教授就任後は、血管塞栓術、ステントグラフト内挿術及びIVRの被曝防護等に関する若手の研究指導に携われました。

一方、学外においても、多くの関係学会の理事等の役職を務め、広く医学界にも貢献されました。

最終講義では、X線撮影の歴史(単純撮影から造影検査)、CTやMRIの登場が診断ガイドラインへどのように取り入れられ、現在の標準な医療に結びついていったの



か、また、先生の専門分野であるIVRの進歩が標準治療として確立され、救急医療における役割が大きくなっていること、加えて、自作のZステントやステントグラフトの内挿術の事例や今後の課題、展望等、多くの写真や資料・データを用いて、その時代のトピックスを交えながら詳しくお話頂きました。

講義の最後には、昨年結成された同門会を活用して大学と連携病院の関連を深め、教育研修プログラムを充実させていきたい、ご支援、ご協力をお願いしたいとの意向を示され、講義を締めくくられました。

## 老年看護学

八島 妙子 教授 2月14日(水)

### 【看護教育に携わって、今振り返り思うこと】

八島先生は、平成13年4月に老年看護学領域の助教授として着任され、平成18年4月に教授へ昇任、平成22年4月からの4年間については看護学部長及び看護学研究科長並びに役員に就かれました。17年間にわたり、看護学部、看護学研究科の教育及び運営、更に医学部教育に貢献されるとともにご自身の研究においてもご活躍されました。

最終講義では、看護教育に携わってこられた道のりを「準備」、「迷走」、「大学」の三期に分けてお話されました。準備期は、看護専門学校への進学、卒業後3年間の臨床経験を経て、看護専門学校専任教員としてスタートされた時期です。しかし、4年間の教員生活の中で、創造性のある教育をしているかという行き詰まりを感じられ、仕事から離れられました。続く迷走期では、看護専門学校での教育の再スタートと共に研究活動を求められ、大学院修士課程でケアマネジメント機能についての研究に取り組みました。修了後は、看護短期大学老年看護学助教授として、教育・研究に携わられました。最後は、本学看護学部の老年看護学領域の助教授として着任されたからの大学期です。「やりたい時がやり時。学びたい時に学ぶ。」の生涯発達の考えの下で「高齢者の生活リズムに関する研究」で博士(老年学)の学位を取得され



ました。また、フィジカルアセスメントに繋がる総合的解剖学実習モデルの構築、ロボット介護機器開発・導入促進に関わる研究活動に、若手教員と共に積極的に取り組んでこられました。また、看護学部長、看護学研究科長就任中には、大学院研究科高度専門看護師コースの創設、新病院建設委員会のメンバーとして緩和ケア病棟の構想に尽力された思い出を語られました。

最後に、これまで関わった多くの方々への感謝の気持ちを伝えられるとともに、看護学教育で学んだのは自分自身であること、学生との関係は与え、与えられる関係であり、生涯発達の視点をもって、創造的な人生を送りたいという希望を述べられました。



## 基礎看護学 I

白鳥 さつき 教授 2月21日(水)

### 【看護専門職にコミットすること】

白鳥先生は、平成26年4月に学部教育では基礎看護学領域、大学院教育では看護管理学領域の教授として着任されました。また、平成28年4月からの2年間は看護学部長及び看護学研究科長並びに役員として、看護学教育の質を高めるための組織改革・改善に大きく貢献されました。

最終講義では、ご自身が看護専門職にコミットできなかった体験から、何がその職業へと導いたのかを修士課程、博士課程を通じて究明された結果を交えながら話しされました。臨床実践では、患者・家族や医師から大きな影響を受けたこと、地下鉄サリン事件では、有事の際の看護部長の圧倒的なリーダーシップからマネジメントの重要性を学んだことについてお話されました。

教育に携わるようになってからは、基礎看護学を通して看護独自の機能を改めて見直すことができ、科学的根拠を持つことの強み、一方で、科学的に解明できない看護の素晴らしさ「ART」である部分の魅力についてもお話されました。

近年の研究活動では、看護管理の立場から、臨床はハイリスクであり看護師がどのようなリスクにさらされているかについて10年来の全国調査をされてきました。職場におけるハラスメント、職業感染、抗がん剤曝露、職



業被ばくなどについて看護師の行動と知識を調査され、啓発活動のための研修会を毎年開催しており、その成果をご紹介頂きました。

看護専門職への専門職社会化、つまりコミットするためには「一にも二にも臨床のただ中に身を置くこと。」「学生を導くためには、豊かな臨床実践力を持ってモデルとなる教師になれるよう努力すること」というメッセージを送られました。

最後に、看護学部の教職員、本院看護部や研究でお世話になった医学部教授など、これまで関わりのあった方々への謝辞とともに、愛知医科大学の今後の発展を祈念して講義を締めくくられました。

## クリティカルケア看護学

松月 みどり 教授 2月21日(水)

### 【特定行為研修制度の過去・現在・未来】

松月先生は、平成27年7月にクリティカルケア看護学領域の教授として着任され、約3年間、特に看護学研究科の診療看護師(NP)養成・看護師特定行為研修の教育に多大なる貢献をされました。

長年、救急看護及びクリティカルケア看護に携われ、日本でも有数の高度救命救急センターで看護師長として勤務されていました。また、病院看護部長の時は、看護師特定行為研修試行事業に関わられるとともに、日本看護協会常任理事の時は、保健師助産師看護師法の改正と看護師特定行為研修制度の創設にご尽力されました。愛知医科大学では、実際の養成教育に携われ、現在までに7名の修了生が東海地域の救急外来、ICU、手術室などの臨床現場でNPとして活躍しています。

制度創設から国民にサービスを提供するまで、一貫して看護師特定行為研修に携わってこられた唯一の先生であり、先生の活動は、愛知医科大学看護学部のみならず、今後の看護界にとって多大なる貢献と言えます。最終講義では、「特定行為研修制度の過去・現在・未来」として、看護師特定行為研修がなぜ必要であったのか、臨床現場



の状況について分かりやすく解説され、また、制度創設まで困難を極めた道のりの舞台裏のお話があり、日本の看護の発展のために、特定行為を活用した新しい看護実践と新しいチーム医療の在り方を創造して欲しいと、未来の修了生たちにメッセージを送られました。

最後に、愛知医科大学の学部生や大学院生、教職員への感謝の気持ちを述べられ、講義を締めくくられました。参加した教員及び修了生は、先生のこれまでの努力と情熱に感銘を受け、今後、その志を引き継ぎ、未来へ繋げていく役割があることを深く心に刻んだことでしょう。

## —退職を迎えて—

### “長年の勤務お疲れ様でした”

長年にわたり本学に勤務され、本年3月31日をもって定年退職又は期間満了退職された方々から寄せられたメッセージをご紹介します。

なお、定年退職後も再雇用等により本学にご尽力頂ける方もみえますので、引き続きのご活躍をご期待いたします。



中川 隆 先生  
(災害医療研究センター・教授)

#### 退職を迎えて

平成12年4月に本学へ赴任し、瞬く間の18年でした。医師人生の半分弱の年月をここ長久手で過ごしたことになります。

この間、全国4番目のドクターヘリ導入(平成14年)で大空を飛ぶ機会をもらい、病院前救急診療の重要性を実感し、次いで入場者2,200万人を記録した愛知万博(平成17年)では、会場内救急診療に従事し、心肺停止5例中4例の救命成績を挙げました。



小島 貞男 先生  
(化学・教授)

#### 愛知医科大学での30年

昭和63年4月に学内共同利用研究教育施設である核医学センターが設立され、放射線安全管理を担当する助手として採用されました。前任地の名古屋大学アイソトープ総合センターでの経験を活かし、15年間核医学センターの円滑な運営に努めました。共同利用研究者がより便利に実験などが進められるように尽力しました。また、法令改正への対応や放射線予防規定改正など、放射線安



石川 恒男 先生  
(放射線医学講座・教授)

#### 定年退職のごあいさつ

平成30年3月末をもちまして、愛知医科大学を退職することとなりました。

私は、平成13年に助教授として本学に着任し、平成15年4月から15年間にわたって、教授を担当いたしました。また、同期間に愛知医科大学病院の中央放射線部・部長を務めました。この間、新病院建設委員会の副委員長と

東日本大震災(平成23年)では、発災当日に本学DMATの出動を見送り、翌日ドクターヘリで花巻空港へ参集し、ドクターヘリ運航統括業務並びに被災地内の傷病者搬送に従事し、同年5月まで南三陸町への愛知県内医療チーム派遣調整を県と愛知県医師会の協議の下に実施し、行政・組織との連携の難しさを実感しました。熊本地震(平成28年)では、愛知県庁で県内DMAT派遣調整を終えた後、被災地に赴き、熊本赤十字病院に設置された活動拠点本部長を務めました。

これらの数々の活動は、愛知医科大学の一員だからこそ経験できたことであり、私にとっては貴重な財産となりました。本学関係各位にこの場をお借りし、改めて深謝申し上げます。

全管理業務も十分に責務を果たしたと思います。平成5年4月から化学の助教授として基礎科学部門に移り、それから15年間医学部1学年次生の教育に携わってきました。化学講義・実験をコアカリキュラムに沿った内容に大きく変えました。また、基礎科学の教員全員が担当するチュートリアル、セミナーなどの科目の統括責任者を担当しました。平成22年に教授を拝命後は、医学部教務部次長の5年間を含め、7年間教務委員会委員を担当し、初年次教育の充実を目指してきたつもりです。

本学に教員として30年間勤めることができたのは、先輩・同僚の皆さんのおかげだと感謝しております。本学の益々の発展を期待しております。

して、新病院の設計・運営の計画に携わったことが第一に思い出されます。電子カルテの導入、CT、MRIなど画像診断のフィルムレス化、PET-CT、3テスラMRI、高精度放射線治療装置の稼働、ハイブリッド手術室でのIVRなど、大きな変化もありました。業務の拡大に伴って、放射線科医師の数も倍増しました。任期中に一定の役割を果たすことができたと思いますが、これも大学、病院、そして医局の多くの方々のご理解、ご支援、ご協力の賜物と心から感謝申し上げます。

最後に、本学の今後益々の発展を祈念し、ごあいさつといたします。



白鳥さつき 先生  
(基礎看護学Ⅰ・教授)

#### 退職のごあいさつ

平成30年3月31日をもちまして、愛知医科大学を退職いたします。これまで、支えて頂いた教職員の皆さまに深くお礼を申し上げます。

私は、平成26年に学部教育では基礎看護学を、大学院では看護管理学を担当する教授として着任しました。平成17年に准教授として、2年間在籍しましたので、着任時には「古巣に戻った」という感触を持ったことを思い出します。私は、看護管理学を専門としていたため、臨床

との繋がりは非常に重要であり、豊富な情報源でもありました。愛知医科大学病院では、全ての部署から学部教育はもちろんのこと、個人的な研究においてもご支援を頂き、私自身の学びと発展につながりました。他の大学では実現できないことだと思っています。

平成28年には、看護学部長を拝命し、組織全体の中の看護学部の位置づけが良く見えるようになりました。看護学部が更なる発展を遂げるためには、古い価値観を見直し、新たな発想で挑戦を続けることが必要だと考えています。これは、医学部の運営方法からも示唆を得ました。このように多くの方々のお支えがあって、充実した4年間を過ごせましたことを深く感謝申し上げます。

愛知医科大学がこれからも魅力的な大学であり続けることを心より祈念いたします。



松月みどり 先生  
(クリティカルケア看護学・教授)

#### 退職のごあいさつ

愛知医科大学と関係者の皆さま、2年8か月と短い間でしたが、大変お世話になりました。

私は、大学院看護学研究科において従来から教育していた診療看護師（周術期）に、平成27年10月から保健師助産師看護師法を改正してできた「特定行為に係る看護師の研修制度」を取り入れるために、着任しました。着任後2年が経過し、特定行為研修施設は全国で69施設に

なり、これから益々看護師が実施する業務内容が拡大されていきます。その中でも、大学院教育で実践教育をしているのは全国でも9大学のみです。単に術後ドレーンを抜去したり、PICCカテーテルを挿入する行為がよく取り上げられますが、患者の病態推移の臨床推論と抜去しても良いという適正な判断能力が重要であり、臨床研修医に近いまでの知識内容と実務教育が必須であります。その教育が可能なのは、大学院教育でしか行えません。愛知医科大学大学院の診療看護師コースでは、この制度のエリート看護師を育てております。しかし現在は、課題が山積であり、まだまだ周知されていません。退職に当たり、今後とも診療看護師の広報と育成にご支援頂きたいことを心からお願い申し上げます。



八島 妙子 先生  
(老年看護学・教授)

#### 退職を迎えて

平成13年に本学に着任し、17年間お世話になりました。無事に定年退職の時を迎えられましたのは、多くの方々に支えられてのことと心より感謝申し上げます。

就任時は、看護専門学校から大学教育への移行という変化に伴う、様々な課題もありました。教職員が一丸となって、学生とともに現在の看護学部が作り上げられたと実感しております。

初めは医学部の先生方の診療・教育・研究に夜遅くまで取り組む姿勢に近寄りたいたい存在と思っておりましたが、看護学教育に対しても熱心に多くのご協力を頂きました。

大学が大切にしている理念は恒久ですが、その具現化は流動的です。社会が求める医療ニーズに応じた看護職を育てるには、社会の変化をいち早くキャッチし、教育においても柔軟な対応が必要かと思えます。今後も選ばれる大学、そして、看護学部であり続けられることを願っております。

愛知医科大学のますますのご発展と、皆さまのご健康とご活躍をお祈りいたします。





**奥村 正直 先生**  
(動物実験部門・准教授)

本学で9年間を過ごし、わずかでしたが充実した日々を経験しました。初めの戸惑いがやがて名残惜しさになる。時の流れは不思議です。これまで皆さんと働けたことに感謝します。



**川井 秀子 さん**  
(整形外科学講座・臨床技術員)

仕事を通して様々な経験をすることができ、無事に定年を迎えられたことを心より感謝しています。また、C・D棟、本館、新病院などが建設され、大学が発展する過程を間近に見てこられたことをうれしく思います。

長い間お世話になり、ありがとうございました。



**小池三奈美 さん**  
(看護部・部長)

愛知医科大学病院での33年間を多くの方に支えられ、無事定年を迎えることができました。皆さまに感謝しお礼を申し上げるとともに、愛知医科大学の更なる発展をお祈り申し上げます。



**竹内 基恭 さん**  
(病理学講座・助手)

多くの方々に支えられ、無事定年を迎えることができました。長い間、色々ありがとうございました。これからも、愛知医科大学の更なる発展をお祈り申し上げます。



**松原 鈴子 さん**  
(看護部・主任)

いきる(生活)ため働く傍ら、皆さまに迷惑をかけたことも。目標年金受給は3年先。再雇用を希望し、達成できたらと計画。本当にお世話になり、ありがとうございました。



**宮島 節雄 さん**  
(感染制御部・主任)

多くの方に支えられ無事定年を迎えることができ、大変感謝いたしております。医療業界を取り巻く環境はますます厳しくなることが予測されますが、愛知医科大学病院の更なる発展をお祈り申し上げます。



**藪下 廣光 先生**  
(産婦人科学講座・教授(特任))

母校である愛知医科大学で定年を迎えられたことは、私にとって望外の幸せです。ほぼ40年、大過なく勤められたのも職員一同のご支援あってのものです。心より感謝申し上げます。母校の更なる飛躍を心より願っています。



**山之内博明 さん**  
(薬剤部・副部长)

36年間様々な経験をさせて頂き、育てて頂いたことに大変感謝しております。中でも新病院建設に関与できたことは良い経験でした。愛知医科大学病院の更なる発展をお祈り申し上げます。

(五十音順)

# 愛知医科大学病院の最新医療を解説 「元気ホスピタル—最善の医療をめざして」書籍を発行

愛知医科大学病院は、平成30年1月31日付けで様々な病気の特徴やその最新の治療方法等を紹介する書籍「元気ホスピタル—最善の医療をめざして 愛知医科大学病院の最新医療」を発行し、平成30年2月13日（火）にマスコミ向けのプレスリリースを行いました。

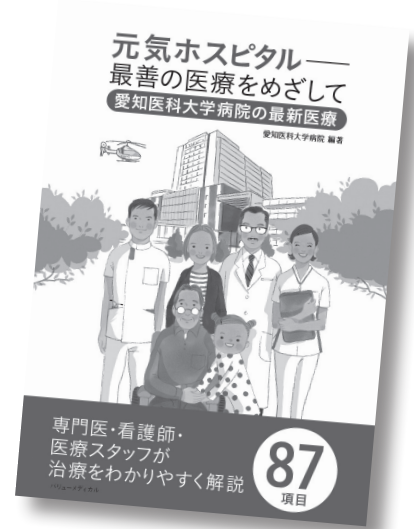
当日は、羽生田正行病院長を始め、若槻明彦副院長、宮地茂教授（脳血管内治療センター）、大橋明子講師（病理診断科）の4名がそれぞれ書籍について解説をし、新聞やテレビなどでも多数紹介頂きました。

本書籍は、臨床現場の第一線で働く本院の医師・看護師・医療スタッフ約100名が執筆しています。テーマごとに大きな見出しを付け、写真やイラストを使って見やすいレイアウトにし、専門用語には解説を付けるなど、できるだけ平易に分かりやすく医療の解説をしています。A4サイズ・214ページで、「がん関連」、「トピックス（特徴ある診療）」、「Q&Aでわかる最新医療（安心で最良の医療を提供）」の3つのテーマに分けて、合計87のテーマを取り上げています。連携する病院や近隣の図書館などにも献本しており、一般の書店でも販売されています。

羽生田病院長からは「治療は、医師と患者さんが共通認識を持ってもらうことが大切ですので、病院の待合室などで気軽に手に取って頂き、ご自身に関係ある箇所を読んで、病気や治療の理解にぜひ役立ててほしいと思います。」とあいさつがありました。



書籍を紹介する羽生田病院長



# 卒後臨床研修修了証授与式挙行

平成30年3月12日（月）午後6時から大学本館701会議室において、卒後臨床研修修了証授与式が挙行されました。【写真】

式は、羽生田正行病院長を始め、岡田尚志郎医学部長、春日井邦夫卒後臨床研修センター長及び各副センター長等が出席の中、整然と且つ厳かに執り行われました。

初めに、春日井センター長から「研修医の人数が例年より少ない中でお互いに協力し合って、2年間の臨床研修を無事修了され、社会に貢献できる立派な医師に成長してくれました。今後の更なる飛躍を期待しています。」と告辞があり、各出席者からの祝辞の後、センター長から一人ひとりに修了証が手渡されました。

今回修了した15名（研修医12名、研修歯科医3名）の



うち、研修医12名全員が本院の専修医として、専門医や学位取得を目指すことになります。本院での臨床研修医として修得した知識、技術及び経験を生かし、より一層精進されることが期待されます。

## ASGN・ラダー認定証交付式挙行

平成30年3月15日（木）病院長室において、平成29年度 ASGN（Aichi Medical University Hospital Super General Nurse）、ASGN更新（認証後2年毎）の認定証交付式が執り行われました。

ASGNは、看護部キャリア開発システムにおいてジェネラリストレベルⅣ（特定の看護分野に関わらず、どの対象者に対してもその場に応じた知識・技術・能力を発揮できる者）の実践能力を認定された看護師で、新たに1名が認定され院内に5名が在籍しています。

また、平成29年度に5名のうち3名が初めて更新を受け、羽生田正行病院長、小池三奈美看護部長から認定証、名札を受け取り激励されました。

ASGNは、取得後2年毎の更新制度を持ち、活動内容や学会発表を受けて更新されます。今後も、臨床教育者（Clinical Educator）として、部署の指導を始め、看護学生の臨地実習指導、院内認定制度Educator研修（静脈注射、膀胱留置カテーテル管理、化学療法管理）のイ



羽生田病院長、小池看護部長、副部長との記念撮影  
ASGNの皆さん（後列左から2人目 亀井隆之さん、左から3人目 鬼頭真樹子さん、右から3人目 友茂樹さん、右から2人目 分造健太さん）

ンストラクターとして、院内研修の企画にも携わってまいります。更に継続した臨床教育者として期待されています。

## 若葉ナース卒業式挙行

平成30年2月15日（木）レストランオレンジにおいて、若葉ナース卒業式が挙行されました。【写真】

これは、平成22年度から開催され、今年度で8回目となります。本院に入職した新卒看護職員が1年間を振り返るとともに、指導に当たった全ての先輩と互いに成長を祝う会です。

国家資格を取得し、初めて本院に入職した新卒看護職員を「若葉ナース」と呼び、名札には初心者マークを付けて看護実践に携わっていますが、この卒業式をもって初心者マークから卒業します。

式では、看護部長から新しい名札が手渡され、一人ひとりが卒業を実感するとともに、各部署の新人教育担当者（新人教育の責任者）に対しては労いの言葉が掛けられました。また、卒業する若葉ナースの代表から、自己



の一年間を振り返り、新人教育に携わってくれた先輩に向けて、「たくさんの学びには辛かった時期もありながら、その困難も先輩のおかげで乗り越え、成長できました。」と感謝の気持ちが伝えられ、感極まる時間を過ごすことができました。

## 新規採用医師ガイダンス

新規採用医師ガイダンスが、平成30年4月2日（月）に開催されました。対象者は4月1日付け新規採用医師、帰局医師及び新規採用臨床研修医で計85名が受講しました。

このガイダンスは、医療安全を始めとする、主な院内ルールの周知徹底を目的に開催しており、羽生田正行病院長による「辞令交付」と「病院の概要及び経営方針」の説明に始まり、各部門の責任者から、院内主要部署の

業務内容、救急医療体制、医療安全管理、感染予防対策、プライマリケアセンターの役割などについてのガイダンスが集中的に行われました。ガイダンスの内容は、日常の診療に直ちに反映されるものばかりであり、参加した医師は真剣な表情で受講していました。

今後、年度途中に入職する医師については、今回の講義内容を録画したDVDを視聴することにより、ガイダンスに充てることとしています。



## 臨床研修医ガイダンス開催

平成30年4月2日（月）から7日（土）まで、新人研修医26名及び研修歯科医1名を対象に、本院における臨床研修に必要な基本的な事項についての臨床研修医ガイダンスが開催されました。

春日井邦夫卒後臨床研修センター長、専任教員の高橋美裕希講師を始めとする副センター長たちから、医師としての心構え等についての話から始まり、3月まで本センターに在籍していた先輩研修医からの初期研修の秘訣や電子カルテの操作方法、除細動器等の実習、BLS（一次救命処置）研修で、常に先輩の医師から後輩の医師へ手助けしたり質問に答える、屋根瓦方式の指導を行いました。

最後に春日井センター長から、臨床研修医一人ひとりに臨床研修許可証が手渡され、6日間のガイダンスが終了しました。このガイダンスの内容は、参加した臨床研修医の方々にとって、将来必ず役立つものと期待されます。



研修をスタートさせた臨床研修医27名

詳しくは、卒後臨床研修センターホームページ、Facebook等で紹介しています。

## 平成29年度第2回保険診療に関する講習会開催

臨床研修病院においては、全職員を対象とした保険診療に関する講習が年2回以上実施されていることが必須とされており、平成30年3月27日（火）午後5時30分から大学本館たちばなホールにおいて、平成29年度第2回保険診療に関する講習会が開催されました。

講習会のテーマは、「2018年度診療報酬改定の概要」と題し、株式会社ソラストの坂井田晃氏から解説を頂きました。今回の診療報酬改定は、6年に一度の介護報酬との同時改定であり、医療計画や地域医療構想など、医

療と介護に関連する様々な制度改革が進む中で行われるため、全体像を考慮しながら2025年以降を見据えた対応が必要とされる「極めて重要な意味を持つ」改定であると言われ、急性期病院において重要な項目を中心に解説を頂きました。

講演会には、医師、コメディカル及び事務職員など幅広い職種から173名の参加があり、医療機関経営における重要性を再認識した講習会でした。

## 集中治療領域の初期診療講習会

平成30年3月17日（土）・18日（日）の2日間にわたり、一般社団法人集中治療医療安全協議会と本院医療安全管理室の共催でFundamental Critical Care Support (FCCS) コースが開催されました。【写真】

FCCSは、米国集中治療医学会が開発したコースであり、集中治療を要する患者の初期対応について学ぶコースです。対象は医師のみではなく、看護師や臨床工学技士など集中治療に関連する全ての医療従事者となっており、わが国では平成21年の初開催以降に約7,000人が修了しています。

今回、本院において第3回目のコースが開催され、合計45名（医師32名、看護師11名、薬剤師1名、臨床工学技士1名）の受講生が修了証を手に入れました。本学からは、医師3名、看護師1名が受講しています。

重症患者を救命するためには、エビデンスに基づいた知識と技術をチームとして実践する必要があります。こ



のように標準化された医療を提供できる医療従事者を多く育成することで、医療安全の実現と患者の予後改善が期待できるため、多くの職員が次回以降に受講されることが期待されます。

## 医療安全ブリリアントアカデミー表彰

本院医療安全管理室では、職員の医療安全文化醸成を目的として、平成28年12月から医療安全アカデミーを開講しており、平成30年1月末をもって第1回のシリーズが終了しました。

研修内容は大きく12のテーマに分けられ、①医療安全の基礎知識・本院の医療安全管理体制、②医療安全の法的问题、③リスクコミュニケーション、④危険薬の誤認防止、⑤周術期の肺塞栓予防、⑥安全な経鼻栄養チューブの挿入、⑦安全な中心静脈カテーテルの穿刺・留置、⑧急変時の迅速対応、⑨事例要因分析から改善へ、⑩患者・市民の医療参加、⑪安全な手術・WHO指針の実践、⑫安全な薬剤混注・抗がん剤ばく露の回避など多岐にわたります。

全12回の研修では、延べ1,042人の職員が受講し、医療安全についての知識を深めています。この中で、全研修を修了した中央放射線部の寺嶋順子さんを「医療安全ブリリアントアカデミー」の第1号に認定し、高安正和



表彰状を授与する高安室長と寺嶋さん

医療安全管理室長から表彰状・認定バッジ等が授与されました。

医療安全管理室では、医療安全の確保と質の向上を目的にこれからも色々な研修を企画していきますので、皆さまのご理解とご協力をお願い申し上げます。

## 平成30年度医療安全アカデミー開催

臨床医学に比べ医療安全の歴史は浅く、本邦で大きく動き出したのは2000年以後と思われます。本院では、1995年に医療安全管理委員会が設置され、2003年に医療安全管理室が開設されました。医療に携わる者として安全な医療を提供する義務があり、そのためには医療安全に対する認識を新たにするとともに、知識を深める必要があります。

医療法では、医療の安全確保のための措置として、医療に係る安全管理のための指針の整備、委員会の開催、職員研修の実施等が挙げられています。また、特定機能病院に対しては、開設者のガバナンス強化、外部監査、相互ピア・レビュー、管理者の安全管理業務経験や選任方法の明確化、全死亡例報告、高難度医療技術の導入プロセスの明確化等も義務づけられています。

そのため、医療安全管理室では、職員研修として、医療安全講演会を年2回開催しているほか、昨年の平成29年度からは実務的内容の勉強会として「医療安全アカデミー」を開催し、多くの方々に参加して頂きました。

本年度も、平成30年4月17日(火)に第1回を「当院



の医療安全体制－現状と今後」をテーマに開催しました。

【写真】

合計12回のプログラムを開催予定で、医療安全に対する意識、安全業務のための技能及び職員間の相互連携など、この機会により深い知識を共有して頂くことを期待しています。

## 情報セキュリティに関する講演会開催

平成30年2月27日(火)午後5時30分からマルチメディア教室において、全学を対象とした情報セキュリティに関する講演会が開催され、教職員等37名が参加しました。

【写真】

これは、昨今の不正アクセスによるWebサイトの改ざんや、標的型攻撃メール等によるマルウェア感染事案など、サイバー攻撃の脅威への的確な対応のため、情報セキュリティに関する意識向上・啓蒙活動の一環として行ったものです。

講演会では、昨年度に引き続き、愛知県警察本部警備部警備総務課サイバー攻撃特別捜査隊の方を講師にお迎えし、「サイバー攻撃の現状と対策」と題して、企業が被害を受けたサイバー犯罪の事例や防止策についてご講演頂きました。また、ビデオシミュレーションゲームを利用した説明では、インシデント対応を疑似体験でき、



大変有意義でした。

本学では、引き続き、情報セキュリティに関する啓蒙活動を実施し、情報漏えいが発生しないよう、教職員及び学生への意識啓蒙に努めます。



## 公用車のデザインがリニューアル

平成30年2月にメディカルクリニック公用車のデザインをリニューアルしました。【写真】

車体に大学病院及びメディカルクリニックの存在を幅広く知って頂くためのラッピングを施し、「走る広告塔」として本学とメディカルクリニック（名古屋市東区）間

を毎日往復しています。

メディカルクリニックでは、大学病院と連携し高度な医療を地域社会に提供するため、広報活動にも積極的に力を入れています。



## 平成29年度防災訓練実施

メディカルクリニックでは、愛知医科大学メディカルクリニック消防計画に基づき、平成30年2月28日（水）に平成29年度防災訓練を実施しました。【写真】

南海トラフ地震M9.0により、名古屋市東区で震度6強の地震を観測し、愛知県西部及び臨海地域は液状化現象が著しく、多くの医療機関が被災している状況を想定した訓練では、クリニック職員が円滑な初動対応を行うための手順を確認しました。

訓練前半では、模擬患者役の職員に対して安否確認及び避難誘導訓練と重症患者を想定した人形を用いた担架での救出救護訓練を実施するとともに、非常時における体制を確立するため災害対策本部を設置し、適切に指揮命令系統が機能することを確認しました。訓練後半では、院内での火災発生時に迅速な初期消火を行うため、消火器、屋内消火栓、防火シャッター等の操作方法の講習会を実施しました。



訓練後の検証会では、参加者から放水消火訓練を経験したいなどの意見が挙がり、災害発生時に職員が適切で円滑な対応ができるよう、今後もより一層実用性のある訓練の実施に努めて参ります。

## 災害医療研究センター 防災リーダー養成講座で出張講演

平成30年3月10日（土）午前10時から長久手文化の家光のホールにおいて、長久手市南小学校区自治会連合会主催の防災リーダー養成講座が開催され、災害医療研究センターの中川隆教授が講師として「大規模地震の教訓—阪神淡路、東日本、熊本から学んだこと—」というテーマで講演を行いました。

東日本大震災や熊本地震などの大規模震災が多発しており、ますます南海トラフ地震に向けた準備が進められておりますが、一昨年度に引き続き、同小学校区自治会の要請を受けて、同講座が開催されました。

当日は、各自治会の会長さんを始め、防災委員を担当している方約70名が参加され、中川教授からは、これまでの大規模災害に関する歴史や社会の動向、先生自身が体験したそれぞれの地震について多くの写真やイラストなどを交えながら紹介があり、参加者は皆さん熱心に聴講していました。



講演する中川教授

災害医療研究センターでは、今後も地域住民の方々への災害医療に関する教育を積極的に行って参ります。



## 運動療育センター 30周年記念講演会開催

平成30年3月17日（土）大学本館たちばなホールにおいて、運動療育センター30周年記念講演会が開催されました。【写真】

まず、運動療育センターの牛田享宏センター長から「痛みにおけるからだづくりの必要性」をテーマに講演があり、痛みについての基礎知識について解説がありました。続いて、特別講演では、本学客員教授の佐藤純先生から「あなたの不調、もしかして天気痛」をテーマの下、天気痛の原因や自分でできる対処法を具体的にご紹介頂きました。

その他にも、運動療育センター30年のあゆみの紹介や抽選会等も行われ、会場は終始和やかな雰囲気包まれていました。

この講演会は、運動療育センター主催で毎年開催しているものですが、今回は例年よりも老若男女を問わずたくさんの方々が参加され、客席では講演内容を熱心にメモされる方々が見られるなど、大変充実した講演会となりました。



運動療育センターでは、これからも多くの方々の健康づくりに役立つテーマを中心に、地域の方々に少しでもお役に立てるよう努めて参りますので、今後ともどうぞお願いいたします。

## 本学のランニングドクター（RD）が静岡マラソン2018で活躍

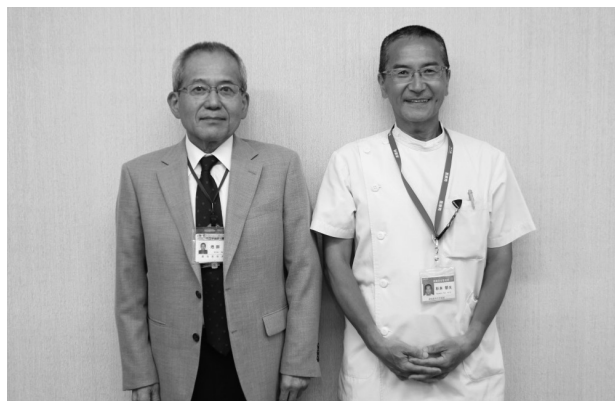
平成30年3月4日（日）静岡市内で開催された静岡マラソン2018において、医療安全管理室の杉本郁夫教授（特任）と病理学講座の池田洋教授とがランニングドクターとして参加し、34.5km地点において心肺停止で倒れた男性を杉本教授（特任）が心臓マッサージ及びAEDで対応後、総合病院へ搬送され、一命を取り留めました。

杉本教授（特任）と池田教授とは、NPO法人日本医師ジョギーズ連盟（JMJA：Japan Medical Joggers Association）に所属するランニングドクターとして、各地で開催されるランニング大会等に参加し、走りながらランナーに最も近い視点からの医療支援活動を行っており、今回の静岡マラソンには総勢18名のランニングドクターが参加しています。

救命処置を行った杉本教授（特任）からは「マラソン中の心肺停止は5万人に1人とされていますが、マラソンブームの昨今では、明らかにこれより高い頻度であると推測されます。マラソン中の心肺停止を事前の健診結果から予見することは困難であり、現時点では発症時の対応を充実させることに尽きると思います。これからも体力の許す限り、ランニングドクターとして走りしたいと思います。」との感想があり、池田教授からは「JMJAは、約460名の会員で構成され、60歳未満の会員には5時間以内の走力とBLSヘルプケアプロバイダーの資格が必要です。一般市民のAED使用が可能前の2000年からの6年間では8例死亡・1名救命が、可能後の2007～16年では3例死亡・27名救命と救命率が向上しています。



マラソン会場での杉本教授（特任）と救命活動に対して実行委員会から贈呈された感謝状



ランニングドクター（RD）の池田教授（右）と杉本教授（特任）（左）

JMJAを含め、一般の方の救命知識の浸透が重要なことは明らかです。」と感想がありました。

# 愛知医大サービス株式会社 JAあいち尾東長久手支店 産直市場開催

平成29年6月にオープンした立石プラザ（アメニティ棟）は、もうすぐ一年を迎えます。

立石池の自然と名古屋の街並みや養老山脈を眺望できる立石プラザの2階フードコートには、多くの来院者や職員・学生などにご利用頂いています。また、3階職員専用交流ラウンジも会議や研修会、立食パーティー等の利用が増え、日々賑わいを増しております。

愛知医大サービスでは、この4月から立石プラザをより皆さまに知って頂きたいと考え、毎月第一水曜日に1階のテラスにおいて、JAあいち尾東長久手支店の産直市場を始めました。地元の新鮮な野菜や果物、お米などの販売をしています。月に1回ということもあり、毎回ラインナップが変わりますので楽しんで頂けます。中でも、地元のお米を使用した米粉パンは大人気です。また、JAあいち尾東オススメの芽キャベツとケールを交配して生まれたプチヴェールが入ったお菓子も販売しており、好評を頂いております。

産直市場の隣では、愛知医大サービス(株)によるオリジナルグッズ販売も行っておりますので、是非お気軽にお立ち寄りください。



多くの方が産直市場へお越し頂いています



オリジナルグッズ販売も好評です

## ～産直市場について～

販売：JAあいち尾東長久手支店

日時：毎月第一水曜日

（祝日の場合は第二水曜日）

AM 10:00～PM 2:00

場所：立石プラザ1階テラス（雨天決行）

## ～大学・病院を支える笑顔豊かなスタッフ陣～

「Smile ～スマイル～」では、大学・病院で活躍する職員の笑顔にスポットライトを当てて、各部署における活動内容や取組みなどについて紹介いたします。

### 看護学部 成人看護学領域

成人看護学は、主に治療回復過程（急性期）と療養生活支援（慢性期）を柱とし、教員は7名で構成されています。治療回復過程は、急激で危機的な健康状態の変化から回復期までの看護を、療養生活支援では、慢性の病気をマネジメントする患者教育や終末期における医療／看護を学びます。

成人看護学の対象者は、社会的役割や責任を持つ成人期にある人です。対象者が生命の危機を乗り越えて社会復帰し、病気や障がいと折り合いをつけながら生活するための支援として幅広い看護を学びます。2学年次から3学年次にかけて、「成人看護学概論」、「治療回復過程援助論Ⅰ・Ⅱ」、「療養生活支援論Ⅰ・Ⅱ」、「治療回復過程援助実習」、「療養生活支援実習」を学び、特に講義演習では、シミュレーション教育を取り入れ、より臨床に近い形で看護を考える機会を持ち、多職種との連携・協働の意義や看護師の役割について意識できるようにカリ



キュラムを構成しています。臨地実習では、看護実践や、学生間、実習指導者及び教員とのディスカッションを重ねながら、看護の専門性や責任感、倫理観を高めます。

研究活動としては、シミュレーション教育に関する研究やe-ラーニングによる学習支援、長期療養者を対象としたICTを活用した遠隔看護に関する研究に取り組んでいます。

### 病院 臨床工学部

臨床工学部は、本院中央診療部門に属し、22病棟、900床に対して、臨床工学技士19名、医療技術員1名を配しており、医師の指示の下に、循環・呼吸・代謝に関する生命維持管理装置の準備から操作など一連の作業を通じて、患者さんに対し、安全・安心な治療・検査等行えるよう常に心掛けています。

循環器部門において、循環器内科では、ペースメーカー関連業務、心臓カテーテル検査・治療における技術提供を行い、心臓外科では、人工心肺認定士等により、心臓手術で心肺機能の代行あるいは補助する機械の操作と管理運用を行います。また、血液浄化部門では、血液浄化認定士らにより、人工透析・アフェレーシス等、様々な血液浄化業務を支えています。次に、呼吸器部門では、院内全体の呼吸器に対して、保守・点検・管理を行います。手術室・集中治療室部門では、数多くの様々な高度医療機器があり、中でも専門の知識が必要な装置が多々あります。特に、臨床工学技士が操作する生命維持管理装置は、より安全な治療のために様々な安全装置が付属



され、複雑化した装置の操作及び保守・点検・管理を行っています。

最後に、医療機器管理部門では、院内7千台以上ある医療機器などを保守・点検・管理をし、安心・安全に使用できる医療環境を作り、更に医療機器の使用法や注意事項などの講習会を医師や看護師へ開催しています。

以上のように、臨床工学部は、医療機器の適切な管理等により、安心・安全な環境を提供したり、直接的に操作することでチーム医療の一員として貢献しています。



## 世界に羽ばたく若手医師の育成

内科学講座（消化管内科）・教授 春日井邦夫

### 【医学教育のグローバルスタンダードを目指して】

患者ニーズの多様化、疾病構造の変化、生命科学や医療技術の急速な進歩を背景として医学教育を取り巻く環境も変化し、新しい世代の医療人の育成が求められており、限られた教育年限の中で知識伝授型の教育から脱却し、新しい時代に対応しうる医師を育成するプログラムへ転換が求められています。臨床医学教育においては、知識伝授型から問題解決型、知識重視型から技能・態度重視型の教育へ転換を図る必要性が高まり、患者中心の全人的医療を展開する医師を育成するための教育体制を確立することが必要です。

医学部教育において質の高い医師を養成するために必要とされるのは臨床実習の充実であり、現在導入が進んでいるクリニカルクラークシップは、診療参加型臨床実習とも呼ばれ、患者の同意の下に学生がチームの一員として一定範囲の医療行為を実践し、その中で医師になるに際して必要な知識、技能、態度を身につける臨床実習です。

消化管内科では、近年の急速な医療・医学の進歩、変化に対応した消化器病学の知識の習得、その実践を目標とした教育を行っており、医学部学生の臨床実習では、学生が興味を持ち、学習意欲を高めることができるように、クリニカルクラークシップを通じてベッドサイド、外来での実習などを中心とした教育を積極的に行っております。大学院生には、きめ細かな指導を行い、消化器病学の分野における将来のリーダーとなる人材(博士(医学))の育成を目的として教育・研究を行っております。

教育、研究、臨床の三本柱の連携と充実をいかに実現するかが課題です。検査・治療手技の高度化により日々の診療に当てる時間が膨大となっていますが、更なる医学教育の充実を図るため、何が必要なのかを常に探索し、将来、臨床や研究においてリーダーとなる人材の育成も目指し、社会への貢献を果たしたいと考えています。

### 【世界に発信する医学研究】

近年、機能的消化管障害という内視鏡検査などでは異常は認められないにも関わらず、腹部症状を呈する疾患群が注目されています。「機能的胸やけ」、「機能的ディ

スぺプシア」、「過敏性腸症候群」などがこれらに当てはまりますが、発症の詳細なメカニズムや病態については、いまだ解明されていない疾患です。我々はいち早くからこれらの疾患に注目し研究を重ね、様々な診断法や治療法を確立してきました。患者さんから得られた臨床データを様々な角度から解析し、これら疾患の病態を解明することで、新規治療薬の開発並びにその臨床応用の一助につなげたいと考えています。また、炎症性腸疾患（潰瘍性大腸炎・クローン病）においては、厚生労働省難治性疾患克服研究事業「難治性炎症性腸管障害に関する調査研究」班に属し、診療ガイドラインの策定、新たな治療法の開発、病因・病態解明に取り組むとともに、臨床治験を積極的に実施しています。既存の治療法に加えて、新たな生物学的製剤等を含め、様々な治療法を積極的に導入し、臨床データをもとに研究を行っています。

消化管内科の診療で大部分を占める消化管内視鏡診療（検査・治療）の件数は年々増加の一途を辿っており、現在、年間約10,000件以上の内視鏡を用いた診断・治療を行っています。内視鏡的治療においては、早期消化管がんに対する内視鏡的治療（内視鏡的粘膜下層切開剥離術など）を多数実施しており、安全かつ良好な治療成績を積み上げてきています。そして、より低侵襲な消化管癌治療の実践と新しいツールの開発を目指して、様々な臨床研究を行っています。

更に、消化管がんに関する基礎研究では、上皮細胞増殖因子（EGF）及び腫瘍壊死因子（TNF-a）を介した細胞増殖抑制メカニズムの解析を行っています。胃がんや大腸がんなどの培養細胞から得られたデータを基に、患者さんから採取した消化管がん組織を用いて、データの裏付けを行い、新しい治療薬の確立を目指しています。

このように、消化管内科では、我が国の消化器病疾患の診断や治療の発展に重要な役割を果たしております。

### 【講座からの一言】

内科学講座（消化管内科）では、若手医師の育成に全力を注いでいます。世界に通用するような医師を輩出できるように教室員一丸となって努力しております。今後ともご支援賜りますようよろしくお願いいたします。



## Physician-Scientistの育成を目指して

内科学講座（肝胆膵内科）・教授 米田 政志

### 【医学教育のグローバルスタンダードを目指して】

ここ数十年とこれからの数年にかけて、医学教育は大きな変換期を迎えています。日本の医学教育は他の欧米諸国と比較して、独自の進化を遂げており「医学教育のガラパゴス諸島」であると揶揄されてきました。これは、我が国の医学教育が教育の専門家によってなされてきたものではなく、教育学を学んでこなかった医学部出身者の医師達によって構築されてきたことがその要因の一つであると考えられています。アメリカ、カナダにおいては、医学教育の重要性が早くから注目され、受け身型の座学による講義から問題点を自ら抽出して学生同士のディスカッションを通して解決することによって学習効果を上げようとする「問題解決型学習（PBL：Project-Based Learning）」が、更に臨床実習においては、見学型の実習から積極的に医療現場に参加するクリニカル・クラークシップが早くから取り入れられていました。この様な現状の中で、21世紀になって日本でも、PBLやクリニカル・クラークシップを導入しようという動きが欧米諸国に大きく後れを取って始まりました。更に、アメリカにおいては、アメリカ以外の大学医学部出身でアメリカの医師免許を取得する者のレベルの低さが問題となり、ECFMG（Educational Commission for Foreign Medical Graduate）は2023年より、アメリカ以外の大学にもアメリカと同等の教育システムを担保すべく世界医学教育連盟の国際認証を取得することを求めています。この様な世界の医学教育の流れは、最終的に知識を詰め込んだだけの医師を養成するのではなく、医療現場の問題点を自ら抽出して、その問題点を解決するための計画を論理的に立てて実行することのできる医師の育成を目指しているものと言い換えることができます。また、医学研究は、臨床の問題点にその手掛かりがあり、基礎研究や臨床研究にフィードバックすることによって、医学は今日まで進歩を続けました。したがって、臨床現場にいる我々が医学研究をしなくなってしまうことは、今後の医学の進歩・発展を止めてしまうことに繋がります。我々の内科学講座（肝胆膵内科）は単なる臨床医ではなく、医療現場の問題点を見出して、その問題点の解決のための理論的な思考を身につけて解決法を計画実行できる医師、つまりPhysician-Scientistの育成を目指しています。

### 【世界に発信する医学研究】

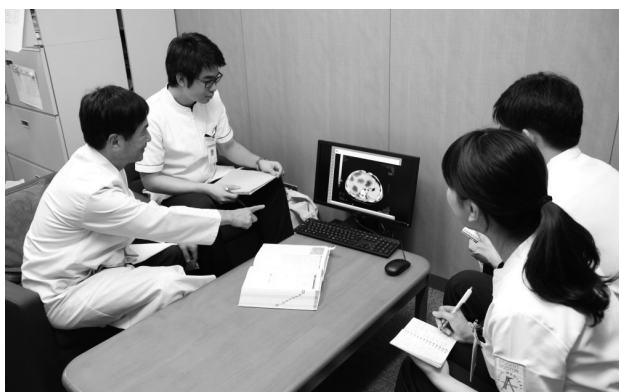
内科学講座（肝胆膵内科）は、肝臓病領域では、ウイルス性肝炎、非アルコール性脂肪性肝炎（NASH）の研

究に、胆膵領域では、内視鏡による胆道系腫瘍の治療の工夫と膵腫瘍の内視鏡を利用した安全で確実な生検診断の確立に力を注いでいます。

ウイルス性肝炎は、最大の課題であったC型肝炎に対する治療法がほぼ確立して、現在では、B型肝炎に対する根治療法の開発に世界中の研究者が取り組んでいます。これまでの治療は、B型肝炎ウイルスの増殖を抑える核酸アナログの投与しかなく、ウイルスは生体から排除することは不可能でした。我々の研究グループはB型肝炎ウイルスの肝細胞からの分泌機構に着目して、糖鎖タンパク研究を応用した手法でウイルス分泌を抑制することを見出し、特許を取得して新たな薬剤の開発に向かっています。また、ごく最近では、B型肝炎ウイルスが肝細胞内に入り込む際のキャリアタンパクを抑え込むことによって感染を止めようというアイデアから、種々の化学物質のスクリーニングと薬物の設計を行って、特許取得と創薬が目前になっているところです。NASHに関しては、ビタミンEとアンジオテンシン受容体拮抗薬による治療法を世界に先駆けて開発し、また、診断に関しても振動波を利用したトランジェントエラストグラフィをNASH線維化評価法として応用するとともに、診断の為にスコアリングシステムを開発・評価してその成果を世界に発信してきました。これらの研究活動によって、世界中のNASH診療ガイドラインは我々の論文データを多く採用しています。更に、胆道系腫瘍による閉塞性黄疸に対する内視鏡治療では、多くの手技とデバイスを開発するとともに内視鏡を用いた膵腫瘍の生検でも独自の手技を次々を開発して、多くの英語論文を出すことで世界に発信して世界中の研究者から注目を集めています。

### 【講座からの一言】

内科学講座（肝胆膵内科）は、Physician-Scientistの育成を目指しながら、世界に発信できる研究を遂行しています。医学研究の問題点は医療の現場にあり、その問題点を見逃さずに取り上げて、解決法を論理的に組み立てて実行することを我々のモットーとしています。その為には、研究を行うには基礎的な考え方の習得が重要で、更に基礎研究と臨床の橋渡ししが必須であります。この研究の理論的な考え方は臨床現場でも大切で、患者さんのデータから論理的に診断を導き出して治療に結びつけるといったことに役立っています。臨床だけでなく、基礎の先生方のご協力を頂ければ幸いです。





# 海外研修派遣研修記

本学では、教育、研究活動等の向上に寄与するため、教員の海外研修派遣を実施しています。この度、運動療育センターの池本竜則講師（本年4月1日から整形外科講座へ配置換え）が海外研修へ参加されましたので、ご紹介します。

## 池 本 竜 則

（運動療育センター・講師）

研修課題：難治性慢性疼痛に対する効果的治療プログラムの開発および、医療者への痛み教育プログラム開発

研修先：シドニー大学ロイヤルノースショア病院  
ペインマネジメント部門

研修期間：平成29年4月1日～平成30年3月31日

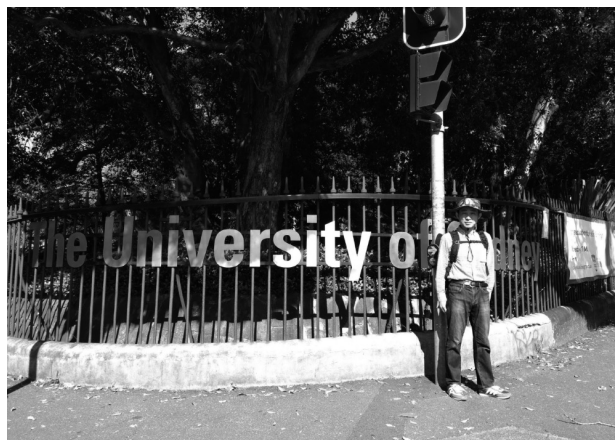
私はこの度、本学の海外研修派遣制度により、豪州シドニー大学に1年間の海外研修の機会を頂きました。シドニー大学は、2018年度の国際大学ランキングによると61位に番付されている総合大学ですが、日本の医学部と同様にいくつかの附属病院があるようです。今回私は、その中でも中核病院であるロイヤルノースショア病院ペインマネジメント部門に留学して勉強させて頂くことになりました。

私自身は、2001年に高知医科大学卒業後、直ちに整形外科医の道に進み、知識及び技術の研鑽を積んで参りましたが、同時に、本学学際的痛みセンターの牛田享宏教授の指導の下、運動器の障害の中でも「痛み」という症状に焦点を当てて、研究を進めて参りました。2011年に高知の地でNPO法人「いたみ医学研究情報センター」を立ち上げましたが、より幅広い活動を目指すため、2012年に愛知県に拠点を移し、同時に私自身も愛知医科大学運動療育センター及び痛みセンターでお世話になることになりました。

自分自身の研究及び整形外科での臨床経験や社会活動を通して、「痛み」は局所の組織損傷の程度だけでなく、心理的社会的要因が大きく影響していることを実感し、その見識を高めるために「痛み学」分野の権威として知られる臨床心理士のMichael Nicholas教授に研修の申請をお願いしました。数か月にわたるメール交換の後、先方より研修を受け入れてくださる通知を頂いたことで、今回の留学が実現しました。

実際に、現地で生活を始めてみると、言語の壁の他、日本との社会環境の違い（特にサービス面）、不動産価格の高騰など、様々な面で苦労することがありましたが、ほとんどの人は親切であり、現地に長期間滞在している日本人など多くの人と関わる事ができて、素晴らしい体験をすることができました。

研修先では、当初の課題としていた「慢性疼痛に対する認知行動療法を用いた集学的治療プログラム」を主に学ぶことになりました。現地では、ADAPTプログラム



研修先のシドニー大学の前で

と呼ばれ、20年以上の歴史があり、これまで多くの治療効果エビデンスが国際雑誌に報告されています。具体的には、痛みのため日常生活動作が制限されている患者に対して、患者自身が自己管理能力を習得することにより、痛みによる機能障害を改善させ、活動的な日常生活や職場復帰を促すプログラムです。対象は1グループ約10名で、期間は120時間（3週間）を1クールとしていて、医師、臨床心理士、理学療法士、看護師の4名が各セッションを交代で担当します。このような集学的プログラムは世界各国で普及していますが、他国のプログラムと異なる点は、現在まで処方され服薬してきた薬剤を整理し、不要な薬は減量または中止することです。この減薬（主にオピオイド）の成功により、患者は自信を取り戻し、薬の副作用からも解放され、健康な体を取り戻していきます。また、本プログラムは65歳以上の高齢者向けに、週2回のプログラムを4週間にわたって行う短縮版が開発されています。今後日本でも、高齢者の増加とともに本プログラムの需要の高まりが予想されることから、高齢者用プログラムの日本における実用性検証を行いたいと考えています。帰国後に早速、愛知県瀬戸市において、慢性の痛みを有する虚弱高齢者に対する4週間の自己マネジメントプログラムを計画しております。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださった愛知医科大学の関係者の皆さまに感謝申し上げます。



# 学 術 振 興

## 学 位 授 与

### ◆大学院医学研究科

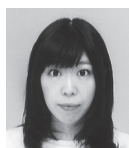


伊藤 誠

学位授与番号 甲第503号

学位授与年月日 平成30年2月8日

論文題目「Dose distributions of high-precision radiotherapy treatment: A comparison between the CyberKnife and TrueBeam systems (高精度放射線治療機の線量分布：サイバーナイフとトゥルービームの比較)」



中村 絵美

学位授与番号 甲第504号

学位授与年月日 平成30年2月8日

論文題目「Sevoflurane Inhalation Accelerates the Long-Term Memory Consolidation via Small GTPase Overexpression in the Hippocampus of Mice in Adolescence (若年成体マウスへのセボフルラン曝露はsmall GTPaseの発現を介して長期記憶定着を促進する)」



辻本 朋哉

学位授与番号 甲第505号

学位授与年月日 平成30年2月8日

論文題目「Effects of regular water- and land-based exercise on physical function after 5 years: A long-term study on the well-being of older Japanese adults (5年間の定期的な水中・陸上運動が身体運動機能に及ぼす影響：日本人中高年者の健康に対する長期的研究)」

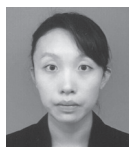


田中 るい

学位授与番号 甲第506号

学位授与年月日 平成30年2月22日

論文題目「The efficacy of combination therapy with oncolytic herpes simplex virus HF10 and dacarbazine in a mouse melanoma model (マウス悪性黒色腫モデルにおけるHF10とダカルバジン併用療法の検討)」



田邊 奈千

学位授与番号 甲第507号

学位授与年月日 平成30年2月22日

論文題目「Different significances exist between steady-state change of cerebral blood flow and its dynamism depending on the effect of drugs in Parkinson's disease.- A serial cerebral blood flow single-photon emission computed tomography (SPECT) study - (Parkinson病患者において抗Parkinson病薬が及ぼす動的脳血流変化と臨床効果の相関)」



安藤 高志

学位授与番号 甲第508号

学位授与年月日 平成30年3月3日

論文題目「Pretreatment of LPS inhibits IFN- $\beta$ -induced STAT1 phosphorylation through SOCS3 induced by LPS (LPS前処理が、SOCS3を介して、IFN- $\beta$ によるSTAT1のリン酸化を阻害する)」



下郷 彰礼

学位授与番号 甲第509号

学位授与年月日 平成30年3月3日

論文題目「Risk Factors for Delayed Ulcer Healing after Endoscopic Submucosal Dissection of Gastric Neoplasms (胃腫瘍に対する内視鏡的粘膜剥離術後の人工潰瘍治癒が遅延するリスク因子についての検討)」



高田 威一郎

学位授与番号 甲第510号

学位授与年月日 平成30年3月3日

論文題目「Association of the *exoU* genotype with a multidrug non-susceptible phenotype and mRNA expressions of resistance genes in *Pseudomonas aeruginosa* (緑膿菌における*exoU*遺伝子保有と多剤耐性および耐性関連遺伝子mRNA発現量との相関)」



宮本 泰周

学位授与番号 甲第511号

学位授与年月日 平成30年3月3日

論文題目「Phosphatidylinositol 3-kinase inhibition induces vasodilator effect of sevoflurane via reduction of Rho kinase activity (ホスファチジルイノシトール3-キナーゼ阻害は、Rhoキナーゼ活性の低下を介してセボフルランの血管拡張効果を増強する)」

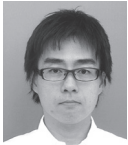


Md. Abdullah Al Mamun

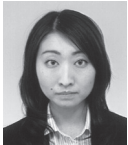
学位授与番号 甲第512号

学位授与年月日 平成30年3月3日

論文題目「Adenosine triphosphate is a critical determinant for VEGFR signal during hypoxia (アデノシン三リン酸は低酸素下における血管内皮細胞増殖因子受容体シグナルを決定する)」

**竹下 昌宏**

学位授与番号 甲第513号  
 学位授与年月日 平成30年3月3日  
 論文題目「Noninvasive Mathematical Analysis of Spectral Electrocardiographic Components for Coronary Lesions of Intermediate to Obstructive Stenosis Severity - Relationship with Classic and Functional SYNTAX Score (中等度から閉塞性狭窄の冠動脈病変の重篤度に関する非侵襲的心電図スペクトル成分の数学的解析と古典的、機能的SYNTAXスコアの関連)」

**吉田 敦美**

学位授与番号 甲第514号  
 学位授与年月日 平成30年3月3日  
 論文題目「Placental oxidative stress and maternal endothelial function in pregnant women with normotensive fetal growth restriction (子宮内胎児発育遅延を伴う正常血圧妊婦における胎盤の酸化ストレスと母体の血液内皮機能)」

**内野 かおり**

学位授与番号 甲第515号  
 学位授与年月日 平成30年3月3日  
 論文題目「*Toll-like receptor* genetic variations in bone marrow transplantation (骨髄移植における*Toll-like receptor*の遺伝子多型)」

**梅本 佳納榮**

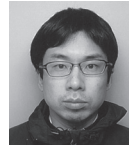
学位授与番号 甲第516号  
 学位授与年月日 平成30年3月3日  
 論文題目「Vascular branches from cutaneous nerve of the forearm and hand: application to better understanding Raynaud's disease (前腕および手の皮神経から分岐する血管枝：レイノー現象のさらなる理解への応用)」

**加藤 秀雄**

学位授与番号 甲第517号  
 学位授与年月日 平成30年3月3日  
 論文題目「Considerations about the Use of a Loading Dose of Daptomycin in a Neutropenic Murine Thigh Infection Model with Methicillin-Resistant *Staphylococcus aureus* Infection (大腿部MRSA感染マウスモデルを用いたダプトマイシン負荷投与の検討)」

**堀部 裕一郎**

学位授与番号 甲第518号  
 学位授与年月日 平成30年3月15日  
 論文題目「Efficacy of the red blood cell distribution width for predicting the prognosis of Bell palsy: a pilot study. (ベル麻痺予後予測因子としての赤血球容積粒度分布幅 (RDW) の有用性)」

**多田井 幸揮**

学位授与番号 甲第519号  
 学位授与年月日 平成30年3月15日  
 論文題目「Interaction of receptor type of protein tyrosine phosphatase sigma (RPTP $\sigma$ ) with a glycosaminoglycan library (グリコサミノグリカンライブラリーを用いた受容体型タンパク質チロシンホスファターゼシグマ (RPTP $\sigma$ ) との親和性解析)」

**松本 慶太**

学位授与番号 甲第520号  
 学位授与年月日 平成30年3月22日  
 論文題目「A Re-Analysis of Facial Expression and Voice Recognition Abilities in Children with Autism Spectrum Disorder (自閉症スペクトラム障害児の表情と音声の認知に関する再解析研究)」

**伊藤 竜男**

学位授与番号 甲第521号  
 学位授与年月日 平成30年4月12日  
 論文題目「The Differential Diagnosis of Central Diabetes Insipidus by Arginine-Vasopressin Measurement Using High-sensitivity Radioimmunoassay (高感度ラジオイムノアッセイ法を用いたアルギニンバソプレシン測定による中枢性尿崩症の鑑別診断について)」

**池田 秀次**

学位授与番号 乙第387号  
 学位授与年月日 平成30年2月8日  
 論文題目「Renal dysfunction after abdominal or thoracic endovascular aortic aneurysm repair: incidence and risk factors (胸部および腹部大動脈瘤に対するステントグラフト内挿術後の腎機能障害の発生とリスク因子についての検討)」

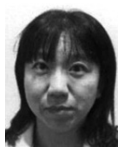
**三戸 秀哲**

学位授与番号 乙第388号  
 学位授与年月日 平成30年2月22日  
 論文題目「Consecutive Microscopic Anatomical Characteristics of the Lacrimal Sac and Nasolacrimal Duct: Cases With or Without Inflammation. (涙嚢と鼻涙管における連続切片による組織学的特徴：炎症例と非炎症例の比較)」

**金森 寛幸**

学位授与番号 乙第389号  
 学位授与年月日 平成30年3月15日  
 論文題目「Influence of nicotine on choline-deficient, L- amino acid-defined diet-induced non- alcoholic steatohepatitis in rats (コリン欠乏Lアミノ酸食によるラットの脂肪肝炎へのニコチンの影響)」

## ◆大学院看護学研究科



大島 亜友美

学位授与番号 第100号

学位授与年月日 平成30年3月3日

論文題目「市町村保健師が初めてのジョブ・ローテーションで得た経験と課題」



濱田 美保

学位授与番号 第101号

学位授与年月日 平成30年3月3日

論文題目「皮膚・排泄ケア認定看護師のスキンケアにおける患者の精神面への影響」



田口 博子

学位授与番号 第102号

学位授与年月日 平成30年3月3日

論文題目「就労腹膜透析療養者の職場でのセルフケア状況とセルフケアを支える支援についての検討」



大口 祐矢

学位授与番号 第103号

学位授与年月日 平成30年3月3日

論文題目「看護管理者に求められるコンピテンシー—看護管理者とゆとり教育世代の比較から—」



柴原 成郎

学位授与番号 第104号

学位授与年月日 平成30年3月3日

論文題目「病院の他職種との協働における診療看護師の役割」

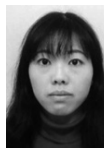


角 由美子

学位授与番号 第105号

学位授与年月日 平成30年3月3日

論文題目「がんになった看護師がグループで語り合う病いの体験—就労までのプロセスに焦点をあてて—」



津下 和貴子

学位授与番号 第106号

学位授与年月日 平成30年3月3日

論文題目「手術前患者の口腔内衛生状態の実態と口腔ケアに関する基礎的調査」



林田 さやか

学位授与番号 第107号

学位授与年月日 平成30年3月3日

論文題目「高度実践看護師（診療看護師）コース修了者ができる筋萎縮性側索硬化症在宅難病患者支援についての文献的考察」

## 研究助成等採択者

○日本私立学校振興・共済事業団 平成30年度若手・女性研究者奨励金（女性研究者奨励金）  
氏名 福重香（解剖学講座・助教）  
研究題目 メディカルガスを主薬とした炎症性皮膚疾患適応外用薬剤の開発  
助成金額 400,000円

○公益財団法人市原国際奨学財団 研究助成金  
氏名 西山毅（公衆衛生学講座・准教授（特任））  
研究題目 児童精神科・構造化面接K-SADS-PL日本語版の開発  
助成金額 500,000円

○公益財団法人旭硝子財団 研究助成金  
氏名 梅村朋弘（衛生学講座・講師）  
研究題目 インドコルカタにおける貧困層の児童を対象とした呼吸器疾患の研究  
助成金額 1,000,000円

○日本骨髄腫学会 平成30年度日本骨髄腫学会奨励賞  
氏名 太田明伸（生化学講座・講師）  
研究題目 PDZ binding kinaseが骨髄腫細胞の生存に及ぼす影響と治療標的分子としての可能性  
助成金額 500,000円



## 本学講座等の主催による学会等

### 【学会名】

- ・第29回日本臨床微生物学会総会・学術集会
- ・日本放射線学会第163回中部地方会ほか
- ・第31回日本軟骨代謝学会
- ・Advanced Prostate Pathology Course in Aichi

### 【開催日】

- 平成30年2月9日(金)～11日(日)
- 平成30年2月17日(土)・18日(日)
- 平成30年3月2日(金)・3日(土)
- 平成30年4月21日(土)・22日(日)

### 【会長等】

- 三鴨 廣繁
- 石口 恒男
- 渡辺 秀人
- 都築 豊徳

## 第29回日本臨床微生物学会総会・学術集会

感染症科・教授 三鴨 廣繁

平成30年2月9日(金)から11日(日)の3日間、長良川国際会議場及び岐阜都ホテルにおいて、第29回日本臨床微生物学会総会・学術集会を主催させて頂きました。本学術集会では、微生物に関する臨床検査、基礎的及び臨床的研究あるいは診療に携わっておられる医師、臨床検査技師、薬剤師、看護師など全国の医療従事者2,465名が参加され、多くの研究発表と活発な討論が行われました。

皆さまのおかげを持ちまして、参加者は地方開催では過去最高記録となりました。本会の学会テーマとして、『「堅忍不拔」の精神を伝承し「有為転変」の姿勢の重要性を学ぶ』を掲げさせて頂きました。「堅忍不拔」とは「意志が強く、辛いことでもじっと耐え忍んで心を動かさないこと」であり、「有為転変」とは「世の中の全てのものが絶えず変化して、しばらくの間も同じ状態にとどまることがないこと」です。

日本では、微生物検査は、診療報酬でも病院内でも、必ずしも恵まれた環境にないものの、臨床検査技師を中心とした個々の献身的な努力により感染症検査が成り立ってきたという経緯があります。この精神は、若い世代にも伝承していく必要がある姿勢だと考えています。また、近年では、遺伝子検査やポストゲノム時代検査などの導入により、臨床検査は明らかに進歩しており、進化にも対応していかなければなりません。学術集会では熱い討論が行われ、明日からの臨床検査、診療、研究に有益な会であったと確信しております。

学会開催に当たっては、一般財団法人愛知医科大学愛恵会を始めとして、岐阜大学産科婦人科同門会、愛知医科大学病院感染症科及び感染制御部、各種企業から経済的なご協力並びに労務提供を頂きましたことに衷心からお礼を申し上げます。

## 日本放射線学会第163回中部地方会 第63回中部 I V R ・ 第64回関西 I V R 合同研究会 日本核医学会第86回中部地方会

放射線医学講座・教授 石口 恒男

平成30年2月17日(土)・18日(日)大学本館たちばなホールと講義室において、日本医学放射線学会第163回中部地方会、第63回中部IVR・第64回関西IVR合同研究会、日本核医学会第86回中部地方会を開催しました。

本学会は、東海北陸地方の大学の持ち回りで年2回開催され、IVR研究会は2年に1回関西地方と合同で行っています。学会では、中枢神経、頭頸部、胸部、腹部、骨盤、骨軟部など各領域の画像診断、放射線治療、IVR、核医学に関して活発な討議がなされました。また、本院の脳血管内治療センター教授の宮地茂先生に

「Neurointerventionalistに学ぶ動脈瘤治療－基礎から最新技術まで－」と題した特別講演を賜り、放射線科IVRにも応用できる多くの技術を学ぶことができ、好評を博しました。また、一般演題は本講座を含めて155題の発表があり、参加者は600名を越える大変有意義な学会として、成功裏に会を終えることができました。

末筆ながら、本学術集会の開催に当たり、多大なるご支援、ご協力を賜りました本学関係者の皆さま方に心よりお礼申し上げます。

## 第31回日本軟骨代謝学会

分子医科学研究所・教授 渡辺 秀人

平成30年3月2日（金）・3日（土）ウインクあいちにおいて、第31回日本軟骨代謝学会を主催いたしました。

本学会は、1988年に研究会として発足し1995年に学会へと発展し、会員数約500名にまで成長しました。本学会は、軟骨の構造・機能に関して基礎と臨床の研究者が一堂に会し議論を交わすユニークな学会です。今回は Danny Chan博士（香港大学）、Hari Reddi（UC Davis）博士の2名の海外研究者を招聘し、山口祐先生（Sanford

Burnham Prebys Medical Research Institute）には Zoom(ライブ動画)講演をお願いしました。本学からは、整形外科学講座の出家正隆教授に組織委員を担当頂き、学際的痛みセンターの牛田享宏教授には教育講演をお願いしました。おかげさまで参加者は230名を超え、学会は盛会のうちに無事終了しました。

本会の開催に当たり、皆さまの多大なるご支援、ご協力を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

## *Advanced Prostate Pathology Course in Aichi*

病理診断科・教授 都築 豊徳

平成30年4月21日（土）・22日（日）本院病理診断科において、Advanced Prostate Pathology Course in Aichiを行いました。

スウェーデンのカロリンスカ大学・教授であるLars Egevad先生と私がcourse directorとして、長崎大学病理診断科・准教授の古里文吾先生をゲストにお迎えして、今回の講習会を開催しました。内容は前立腺癌の基本的な病理診断の方法を講義とディスカッション顕微鏡を用いて直接標本を鏡し、参加者と直接討議する方法を用いました。学内外から37名の参加者があり、大変盛況な

ものとなりました。

基本的な講義は英語による進行で、今後重要である国際化に向けても非常に有益な講習会でした。少し英語に自信のない参加者には、日本語による解説も行いました。参加者には非常に好評で、アンケートでも次回の開催を期待する参加者が多数ありました。

末筆となりますが、このような貴重な講習会の開催にご支援を賜りました本学関係者には心から御礼申し上げます。

# 規 則

規則の制定・改廃情報をお知らせします。

## 学則の一部改正

愛知医科大学学則の一部が改正され、以下の整備がされました。

- ・学則上の各学部の目的が教育研究上のものであることがより明確にされました。  
施行日は平成30年1月29日
- ・医学部における進級認定を、各学年次で行うことが定められました。  
施行日は平成30年4月1日
- ・大学附属施設の長の資格が改められました。  
施行日は平成30年4月1日

## 大学院学則の一部改正

愛知医科大学大学院学則の一部が改正され、以下の整備がされました。

- ・学則上の各研究科の目的が教育研究上のものであることがより明確にされました。
- ・国費外国人留学生の大学院医学研究科博士課程入学試験受験に係る入学検定料の免除に関する事項が定められ、併せて愛知医科大学大学院医学研究科学生の学納金等の減免について（理事長裁定）の一部が改正されました。  
施行日は平成30年1月29日

## 学長業務補佐規程の一部改正

愛知医科大学学長業務補佐規程の一部が改正され、学長業務補佐の任期及び資格対象が改められました。

施行日は平成30年4月1日

## 利益相反規程の一部改正等

愛知医科大学利益相反規程及び愛知医科大学利益相反規程細則の一部が改正され、臨床研究法に定める臨床研究に係る利益相反管理に関する事項が定められました。

施行日はいずれも平成30年4月1日

## 「倫理審査手数料の額について」の裁定

平成30年4月1日付で「倫理審査手数料の額について」が理事長裁定され、医学部倫理委員会における倫理審査に係る手数料が定められました。

## 「総合医学研究機構の部門の組織等及び部門長の選考等について」の一部改正

平成30年3月1日付で「総合医学研究機構の部門の組織等及び部門長の選考等について」（医学部長裁定）の一部が改正され、部門長の資格が改められました。

## 医学研究科の教育・研究上の基本組織等に関する規程の一部改正

愛知医科大学大学院医学研究科の教育・研究上の基本組織等に関する規程の一部が改正され、メディカルクリニック及びリハビリテーション科が医学研究科の教育・研究上の基本組織に加えられました。

施行日は、メディカルクリニックについては平成30年2月1日、リハビリテーション科については平成30年4月1日

## 看護学研究科履修規程の一部改正

愛知医科大学大学院看護学研究科履修規程の一部が改正され、平成30年度入学生の授業科目、年次配当、単位数、専攻領域等及び履修方法が定められました。

施行日は平成30年4月1日

## 専門医制度に係る出向等取扱規程の制定

学校法人愛知医科大学専門医制度に係る出向等取扱規程が制定され、新専門医制度の実施に係る専攻医の派遣・受入れに関する事項が定められました。

施行日は平成30年4月1日

## 看護師特定行為管理規程の制定等

愛知医科大学病院における特定行為研修修了者の業務範囲、業務管理等を定めるため、次の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも平成30年4月1日

### 【新規制定】

- ・愛知医科大学病院看護師特定行為管理規程
- ・愛知医科大学病院看護師特定行為管理委員会規程

### 【一部改正】

- ・愛知医科大学病院看護部規程

## 病理部運営委員会規程の一部改正

愛知医科大学附属病院病理部運営委員会規程の一部が改正され、委員構成等が改められました。

施行日は平成30年4月1日

## 抗菌薬適正使用支援チーム規程の制定

愛知医科大学病院抗菌薬適正使用支援チーム規程が制定され、抗菌薬適正使用支援チームの組織・任務等に関する事項が定められました。

施行日は平成30年4月1日



## 臓器提供実務委員会規程の一部改正等

愛知医科大学附属病院臓器提供実務委員会規程の一部改正及び愛知医科大学病院臓器提供ワーキンググループ要綱の制定がされ、委員会の名称及び委員構成が改められ、委員会に臓器提供ワーキンググループが置かれました。

施行日はいずれも平成30年4月1日

## 医療安全管理委員会規程の一部改正

愛知医科大学病院医療安全管理委員会規程の一部が改正され、委員会の運営体制が改められました。

施行日は平成30年2月1日

## 医療安全外部監査委員会規程の一部改正

愛知医科大学病院医療安全外部監査委員会規程の一部が改正され、委員会の業務内容が改められました。

施行日は平成30年2月1日

## 「医療事故等の公表に関する指針」の一部改正

平成30年2月1日付で「医療事故等の公表に関する指針」（病院長裁定）の一部が改正され、行政機関の名称及び連絡先番号が改められました。

## 「医療安全管理室及び医療安全管理者の業務等について」の一部改正

平成30年3月1日付で「医療安全管理室及び医療安全管理者の業務等について」（病院長裁定）の一部が改正され、「医療安全カンファレンス」の名称が「医療安全管理部門会議」に改められました。

## 災害医療研究センター規程の一部改正

愛知医科大学災害医療研究センター規程の一部が改正され、センター長の資格が改められました。

施行日は平成30年4月1日

## 運動療育センター利用会則の制定等

愛知医科大学運動療育センターにおけるメディカルチェック料金等を変更するため、次の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも平成30年3月1日

### 【新規制定】

- ・愛知医科大学運動療育センター利用会則
- ・運動療育センター料金について

### 【廃止】

- ・運動療育センター料金について

## 喫煙所管理要綱の廃止

学内喫煙所の全面廃止に伴い、学校法人愛知医科大学喫煙所管理要綱が廃止されました。

廃止日は平成30年4月1日

## 給与規程の一部改正等

職員の給与に係る昇格時及び降格時号給対応表を変更するため、次の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも平成30年4月1日

### 【一部改正】

- ・学校法人愛知医科大学給与規程
- ・学校法人愛知医科大学給与規程施行細則

## 「職員の旧姓使用取扱いについて」の裁定

平成30年3月5日付で「職員の旧姓使用取扱いについて」が理事長裁定され、本学における旧姓使用の取扱いに関する事項が定められました。